

白兔は理想を抱え、幻  
想へと走る

幻桜ユウ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

僕はある人の英雄であり続ける。それが僕の理想であり、幻想でもある。でも、それでも、僕はある人が好きで好きで仕方ないから。だから、今日も僕はあの人のために強くなる。

# 目次

第十二話	94
第十一話	86
第十話	79
第九話	70
第八話	65
第七話	58
第六話	43
第五話	34
第四話	29
第三話	17
第二話	9
第一話	1

第十三話	101
第十四話	110
第十五話	120
第十六話	130
第十七話	139
第十八話	149
第十九話	156
第二十話	162
第二十一話	169
第二十二話	175
第二十三話	183
第二十四話	193
第二十五話	207

第三十八話  
第三十七話  
第三十六話  
第三十五話  
第三十四話  
第三十三話  
第三十二話  
第三十一話  
第三十話  
第二十九話  
第二十八話  
第二十七話  
第二十六話

385 375 367 357 345 332 307 290 274 264 248 232 221

第三十九話  
第四十話  
第四十一話  
第四十二話  
第四十三話  
第四十四話  
第四十五話

441 434 427 417 409 403 396

# 第一話

「お祖父ちゃん！ お祖父ちゃん！」

白髪赤目の少年は泣く。

たった一人の家族を亡くしてしまったから。

ただ一つ言うなれば、この少年はたった5歳という歳で肉親と死別したということだろう。

その少年の後ろには何とも言えない表情で少年を見ている女性がいた。

……だが、女性というには少し、いや、かなり足りない胸だが（ボゴツ！  
すみません。

えっと、気を取り直して、これはある一人の少年がある一つの大きいなる物語とはまた違った冒険譚である。

ここは迷宮都市オラリオ。幾多の冒険者がおり、ダンジョンへと挑む、とても賑やかな街である。

そして、都市最大派閥の一つ『ロキファミア』は今日も騒がしかった。

「こらー！ アイズ！ どこに行った！」

ハイエルフの王女のリヴェリア・リヨス・アールヴは今日も自分の授業から逃げ出した問題児、アイズ・ヴァレンシユタインを探している。周りの団員達は「またか」という表情で見守っている。

「アイズ……どこに行ったのかな？」

リヴェリアの横で同じくアイズを探す白髪赤目の少年はベル・クラネル。少し前にア

イズと同時期に保護されて、冒険者の一人として活動している。もちろん、イズも冒険者だ。このオラリオではベルとイズは期待のルーキーとして都市の有名人である。

「全く。すまないなベル。イズのせいで授業が中断なつてしまった」

リヴェリアはベルに謝る。ベルはとても勤勉で何故かファミリアの団員から避けられる自分の授業にも何の不满抱かず、それどころかとても積極的に参加している。イズは全くの正反対と言つても良く、すぐ目を離せば、ダンジョンに向かつてしまい、とても世話を焼いている。

ベルは首を振つて、大丈夫だと告げる。

イズにこの子の爪の垢を煎じて飲ませたいぐらいである。

「ベル。イズがどこに行つたか分かるか？」

「うくん。ダンジョンだと思つたけど、武器置いていってたし、別のところかもしれない」

「そうか」

ふむ。どうすべきか。闇派閥のこともある。あまり遠くに行つてほしくないのだが、仕方ない。

少し、真面目に追いかけるとしよう。

リヴェリアが纏う雰囲気を変え、ベルは内心「これはかなり怒つてるな」と思つて

いたが、それだけ心配なのだろうと理解した。

「では、ベル。私はあの問題児を連れて帰ってくるから、先に部屋にロキのところに行つてくれ」

「分かった」

ベルはトテトテとロキの所に向かった。側から見れば、兎がびよんぴよんと跳ねているようにしか見えない。

リヴェリアはそんなベルの様子を見て、癒されながら、レベル5の『敏捷』で向かっていった。

ベルは執務室の前に来て、トントンと扉をノックした。

「ベルかな？　良いよ、入つておいで」



ベルはいつも思う。何故ノックしただけで分かるのだろうか？と。

ファミリアの団長―『勇者』のフィン・ディムナは圧倒的な頭脳を持っている。

さて、皆様も疑問に思っていることだろう。「このシヨタベルは妙に大人びてないか？」と。えっ？ 思っていないって？ そんなこと言わないでよ。

冗談はさておき、このベルは前世と前前世を覚えている。前世とはオラリオの冒険者の『ヘスティア・ファミリア』の団長として英雄にまで至ったこと。前前世とは今の時代という『古代』の『始原の英雄』とも呼ばれるアルゴノウトとしての記憶だ。

これは主神―ロキ以外には誰にも話しておらず、ロキに話した時には「よりもよつてあのドチビのファミリアやとく！」と言っていたことには苦笑せざるを得なかった。

では、場面を戻そう。

僕は扉を開けて、部屋の中に入った。

「やあ、アイズはまた逃げ出したのかい？」

フィンさんは苦笑混じりに言う。

「アイズたんはもう少し落ち着きを持つべきやな〜」

ロキ様はゲラゲラ笑う。

「あはは・・・」

もちろん、僕は何とも言えないものである。前世でアイズに初めて会った時から、

ずっとあの人は憧憬で好きな人だったのだ。前世では『ある事件』の後、正式に恋人になり、神様達には僕は『英雄王』とアイズは『英雄王妃』と呼ばれ、それからはほぼ、夫婦同然のようなものだった。たとえ、今そうでなくてもアイズを悪く言えるわけがないであらう。

「そうだ。リヴェリアさんにステータスの更新をしてこいと言われたので、お願いします」

「ええよ。じゃあ、こつちに座りや〜」

「僕も同席しても良いかい？」

「はい、良いですよ」

僕は上半身だけ脱いで、ロキ様に背中を向けた。ロキ様は背中に刻まれた神の恩恵（ファルナ）の更新をする。

「ベルたん……。アイズたんにも言うてるけど、ベルたんも大概やで」

「そうですか？」

「いくらなんでも、僕にはこれは擁護できないな〜」

「フィンさんまで？」

「ほい、終了。これが結果や。よう見てみい」

「はあ……」

僕はロキ様から手渡された羊皮紙を見た。

ベル・クラネル L.V. 2

『力』S 901↓954

『耐久』S 942↓973

『器用』S 982↓SS 1035

『敏捷』SS 1072↓SSS 1121

『魔力』S 923↓942

幸運 H

### 《魔法》

【エレメンタルフォース】

・付与魔法

・速攻魔法

・『ローフォース』に属性名を入れることでその属性を纏うことができる

・使用可能属性 『ファイア』『アイス』『ウインド』『サンダー』『アース』『ホーリー』

『ダーク』

《スキル》

【理想】

- ・早熟する
- ・理想を強く想う程、効果上昇
- ・想いは伝播する。

【幻想】

- ・【理想】が限界へと至った時発動
- ・古き理想が燃えて、新しき理想が生まれる
- ・燃やされた理想は使用可能

## 第二話

「ベルたん………一体何してきたんや？」

「何と言われましても、いつも通りダンジョンの二十階層でアイズと鍛錬しました」  
僕とアイズはレベル2の冒険者であるが、ペアで二十階層に行けるほどの強さを持っている。理由は単純で、僕のスキルと同じ様なスキルをアイズも持っているからである。前世では、レベル9になった時に得たと聞いたが、その上位互換とも言えるスキルが今のアイズに備わっている。

ちなみにもあるが、いくら二人で二十階層まで攻略できると言っても、僕たちは子供であるため、保護者としてリヴェリアさんがついてきてくれている。アイズは「勉強から逃げられない……」と言っていたが、勉強しない方が悪いので、特に擁護はしない。アフターケアはするが。

「それにこのままでは、ランクアップもできませんから、それぐらいが丁度良いんですよ」

「でもなく。ウチとしてはあんまり二人に無理してほしくないんやけどなく」  
ランクアップすなわち『偉業』の達成。神々が認める偉業を成し遂げた時、ラン

クアアップすることができる。ベタなもので言えば、自分よりも強い敵に勝つことだ。例外は除き、一人で強敵に勝つことはできない。だからこそ、冒険者はパーティーを組んで強敵に挑む。『冒険』をするのだ。

例外というのは、僕やアイズのようにステイタスの限界突破をしている様な時だ。流石にレベルが二つ上の相手は限界突破していてもほぼ無理に近いものだ。しかし、レベルが一つ上ならば、限界突破のステイタスで一人でも強敵の撃破ができる。事実、僕は前世でレベル1でありながら、レベル2にカテゴライズされるミノタウロスを単独撃破し、ランクアップした。

「すみません。でも、強くなるためには時間を無駄にしたくないんです」

「……………君の言う『最悪の未来』を回避するためにかい？」

「……………はい」

『最悪の未来』——前世でも体験することは無かったある出来事。ゼウスファミリアとヘラファミリアのレベル7冒険者がオラリオを襲ったあの事件。僕の叔父や義母（叔母と言ったら怒られるから）とも言えるザルドさんとアルフィアさんが神エレボスと共謀し、オラリオを破滅の一手手前まで追い込んだ。真相としては二人と一柱は当時のオラリオの冒険者の成長を促し、英雄の礎となり、命を落とした。それを僕は阻止する。あの二人は絶対に死なせない。できる限りのことはしてきているし、あの二人の『病気』

を治すとは行かなくても、延命させるものは見つかった。僕は絶対に確かめなければならぬ。あの二人が僕のために行動しているのかという事を。

僕は『幻想』に走らなければならない。その悲劇と惨劇を『喜劇』にするために。

しばらく、ロキ様とフィンさんと話していると、扉がコンコンとノックされた。フィンさんが「どうぞ」と言うと、扉が開き、リヴェリアさんと首根っこを掴まれたアイズがいた。

「ただいま帰った」

「お疲れ様。何処にいたんだい？」

「じゃが丸くんを買いに行ってたぞ。見つけるのは簡単だった」

「………むむ」

リヴェリアさんがフィンさんに報告していると、アイズが「離して」と言わんばかり

に唸っている。可愛い。

「全く。ベルのところに行つてこい」

リヴェリアさんがそう言い、手を離すと、アイズは猛スピードで抱きついてきた。いくら同じレベル2でもその速さで来られるととても痛い。

「ベル。慰めて」

「はいはい。よしよし」

僕はアイズのご要望通り、優しく頭を撫でた。アイズは「えへへ」といった顔でも幸せそうである。僕もとことん甘いなうと思いつつ、ロキ様が近づいてきた。

「ぐへへ。アイズたん！ ウチにも抱きついてきてもええんやで」

「斬りますよ？」

「アツハイスミマセン」

ロキ様も懲りないな。これがずっと続いているのだから、神様らしいなと思う。

「そうだ。ロキ。アイズのステイタス更新もしてくれ、その間にベルのステイタスを見る」

「ああ、分かつたで」

「アイズ。ちよつとだけだから離れて？」

「うん……。分かつた」



明らかにシヨボンとした顔で離れていったアイズ。とても愛らしいのだが、今は我慢しなければ。

「どうぞリヴェリアさん」

「ありがとうベル。ふむ。アブリティはトータルで200以上上がったか。『敏捷』は……もはや何も言うまい。発展アブリティは上がらずか」

「そうですね。もうすぐランクアップできそうです」

「そうだな。技と駆け引きは私達以上。アブリティの貯金もあって、レベル3は軽く下せるだろう」

うん。リヴェリアさんは私情を挟まず、客観的な意見から僕の戦闘力を分析してくれている。僕の予想と同じだったし、なんだか嬉しい。

「ん？　なんだか、嬉しそうだな」

そんな僕の気持ちを見抜いたのか、優しく微笑みながら、僕の頭を撫でる。とても気持ち良い。思わず目を細め、自分から撫でられに行く。

すると、背後からとんでもない圧がきた。後ろを見ると、ステイタス更新を終えて、ニコニコ笑顔のアイズがいた。普段ならば、愛らしいで済むのだが、目の前のアイズからは「浮気はダメだよ？」とでも言わんばかりの圧を放っていた前世のアイズと全く同じ気配を感じる。そして、僕の袖をチョンチョンと引っ張る。「こっちに来なさい」とでも

？ 逆らうのはダメな気がして、大人しくアイズに引つ張られて、部屋を出た。

「ベルは大変だね」

「アイズたんかわええなあ。あ、これ、アイズたんのステイタスや」

「ああやってずっとベルのそばにいてくれるなら、私も楽なのだが。ああ、ありがとう」

そんな会話が執務室から聞こえてきた。なんて他人事なのだろうか。

アイズ・ヴァレンシユタイン L.V. 2

『力』 SS 1082↓SSS 1192

『耐久』 SS 1024↓1082

『器用』 SS 1058↓1097

『敏捷』 SSS 1165↓1245

『魔力』 SS 1031↓1094

精霊 H

《魔法》

## 【エアリエル】

- ・付与魔法
- ・風属性

・詠唱式『聖なる風よ（テンペスト）』

## 【精霊の奇跡】

- ・回復魔法

・【エアリエル】発動時、効果上昇

・詠唱式『母なる風よ、どうか私に力を貸して』

・自分が最も愛する者の為に使用する時、蘇生魔法に変化可能

## 《スキル》

## 【精霊姫】

・怪物種に対しアビリティ超高補正

・自身の愛する者の為に戦う時アビリティ超高補正

・自身の愛する者と魂を繋ぐ

## 【英雄王妃】

- ・早熟する

・想いが強くなる程効果上昇

・自身が最も愛する者という時想いはさらに強くなる

## 第三話

現在、袖を引つ張られ続けて、街を歩いていきます。周りからなんだか生暖かい視線が

！

「アイズ？ 一体どこに向かつてるの？」

「アストレアファミアリア」

アイズは僕の問いに間髪入れず答えた。何か怖い！ えっ何か怒らせることしたのかな?! 謝りたいけど、でも前世のアイズが「原因も分からないのに謝らないで」って言われたし、どうしよう・・・。

アストレアファミアリアに行くにしてもこのままなのは不味い！

僕は意を決して、足を止めた。

すると、僕が急に止まったからか、アイズは僕の方にバランスを崩した。僕はそっとアイズを抱えて、ゆっくり撫でた。

アイズは一瞬ピクツとしたが、そのまま為されるがままになった。どうやら機嫌は直

してくれたらしい。ん？ 顔が真っ赤になった？ 大丈夫かな？

アイズはゆっくり口を開いた。

「・・・ベル。ここ、大通りの・・・真ん中・・・だよ？」

「へっ？」

あっ！

僕は今いる場所を再確認しながら、周りを見ると、通行人が皆こっち向いて、生暖かい視線を向けている。

僕は自分の過ちを確認し、一気に顔が赤くなってしまった。

「ご、ごめん！ アイズ、行こう！」

「あっ」

僕は早くその場から離れようとアイズの手を引っ張って、アストレアファミリアのホームに向かって走った。

やらかしたく！ あゝこれは怒られるかな。

僕はチラツと後ろを見ると、アイズと目が合った。アイズは微笑んで、

「ベル。時と場所は選ぼうね」

と言った。その言葉に僕はさらに恥ずかしくなった。

おかしいな。子供の頃のアイズってダンジョンしか考えていなかったって前世に

リヴェリアさんから聞いていたんだけどなく。僕がいるから？　でも、そんなことで変わるのかな？

アイズが前世からついてきていることに全然気が付かない鈍感鬼のベルである。

そうして、アストレアファミアのホームに着いた僕たち。ここに来た用は一つしかない。『ある人』に会いに来たのだ。

その『ある人』とは――

「あら？　ベル、アイズちゃん。いらっしやい」

ホームに入った僕たちを迎えてくれたのは白色の長髪で水色の瞳をしている女

性——僕の母親のメーテリアである。

さて、疑問に思う人がいるだろう。何故、メーテリアは生きているのかということに。それは数ヶ月前に遡る。

祖父の墓石の前でしきりに泣いた後、僕は記憶を前世と前前世の記憶を思い出した。すぐさま行動した。後ろに立っていたロキ様に眷属してくれるように頼んだ。

最初、ロキ様は渋っていたが、根気強く頼み込んだら、了承してくれた。ロキフアミリアのホームで神の恩恵を刻んでもらい、ステイタスを確認した。



『力』 I 0

『耐久』 I 0

『器用』 I 0

『敏捷』 I 0

『魔力』 I 0

## 《魔法》

## 【英雄の試練】

・強化魔法

・対象は自分が英雄の素質があると思った者

・対象の負の状況を超えるための試練を出す

・詠唱式『英雄王の名において世界に命ずる。英雄の器に正義を注げ。英雄の炉に悪

をくべろ』

## 《スキル》

## 【理想】

・早熟する

・理想を強く想う程、効果上昇

・想いは伝播する。

【幻想】

- ・【理想】が限界へと至った時発動
- ・古き理想が燃えて、新しき理想が生まれる
- ・燃やされた理想は使用可能

この魔法ならいけると確信した僕は早速使った。ロキ様に止められかけたが、静観することにしたようだ。

『英雄王の名において世界に命ずる。英雄の器に正義を注げ。英雄の炉に悪をくべろ』

対象はメーテリア。僕は母さんの話をへらお婆ちゃんから聞いていた。しっかりと想像しろ。精神枯渇なんて考えるな。お前はできる筈だ。

【英雄の試練】

突如として、私は目が覚めた。

「ここは一体？」

周りを見回しても、草原しかない。

「私は確か、ベルをゼウス様に預けて、病気で死んだはず」

ならば、ここは死後の世界だろうか？

「ベルは無事に成長できているかしら？　ゼウス様に預けてしまったけれど、良くな

い知識を与えられていそうだわ」

私は残してきたベルの心配をする。

すると、突如声がした。

「――英雄の素質を持つ者よ。」

「誰かしら？　私には英雄の素質なんてないわよ？」

「英雄の素質があるかどうかは貴方が決めることではない。貴方は選ばれたのだ。」

「選ばれた、ねえ。一体誰にかしら?」

「英雄の王に。」

「英雄の王。そう。もうそんな存在が現れたのね。それで、もう死んでしまった私に何か用なのかしら?」

「貴方は生き返ることが出来る。」

「それは転生ということかしら? それとも蘇生かしら?」

「蘇生だ。英雄の王は貴方に生きている事を望んだ。」

「わざわざ、私なんかを? 一体何故?」

「私が知るところではない。貴方は生き返るか生き返らないのか、それを選択するだけだ。」

「そう。じゃあ、私は生き返らないわ」

「何故?」

「何故も何も、私は人生に後悔はしてないもの。病死なんてどこにでもあることよ」

「本当か? 本当に心残りはないのか?」

「ええ。ベルは私がいなくても成長していける。姉さんも分かってくれるわ」

「貴方の蘇生を望むのは貴方の子であるのか?」

「どういうこと？ ベルが私の蘇生を？ 英雄の王っていうのはベルのことなの？」

「――その通りだ。英雄の王は親を欲している。これは英雄の王の妻ですら、その欲を満たすことはできなかった。」

「ベルが私を？ 私を欲しているの？」

「――お母さん！」

「ベル!？」

「――お母さん！ お願い！ 戻ってきて！ 我が儘だつていうことは分かつてる！  
でも、それでも僕はお母さんと一緒にいたい！」

「――これを聞いて、貴方はまだ生き返りたくないと言う？」

「……いえ、そうね。あの子は泣いていたわ。泣いているのなら、慰めてあげるのが母親の役目よね」

「――ならば、今一度、貴方の望みを聞こう。」

「私は生き返るわ。そして、母親としてあの子の側にいるわ」

「――その覚悟と想い、世界はそれを承諾しよう。今、この時をもって、英雄の試練は果たされた。」

翌日――

僕は目が覚めた。どうやら、魔法の行使で気絶したようだ。  
ん？ 動こうとするが、何かがちり抱かれて、全く動けない。  
とりあえず、抜け出そうと身を動かすと。

「ひゃんー！」

女性の声が聞こえた。

すると、拘束が緩くなって、上を見上げると、そこには僕の母親――メーテリアがいた。

「ふふっ。おはよう、ベル」

「ッ！ お、おはよう、お母さん」

僕はお母さんに抱きついて、思いつきり泣いた。

「うっ、グスッ、ひぐっ、お、母さん」

「よしよし。よく頑張ったね。ベル」

お母さんは泣いている僕を何度も何度も撫で続けた。

メーテリア Lv. 5

『力』 A 8 1 2

『耐久』 A 8 0 3

『器用』 S 9 2 4

『敏捷』 B 7 5 6

『魔力』 S 9 7 8

精癒D

《魔法》

【ヒールブレス】

・範囲回復魔法

・ 詠唱式『命の息吹よ』

【英雄の讃歌】

・ 範囲強化魔法

・ 詠唱式『希望の歌よ』

《スキル》

【英雄王の母】

・ 自分の子を支援する時、魔法の効果上昇。

・ 自分の子のステータスを知ることができる。

・ 自分の子が死ぬまで、状態異常無効、不老不死となる。

【正義の友】

・ 誰かを助けようとする時、アビリティ高補正。

・ 対象が大事であればあるほど、補正増大。



## 第四話

さて、回想を終わろうか。

ベルとアイズはメーテリアに招かれ、アストレアファミリアのホーム『星屑の庭』のリビングにて、お茶をすることになった。

三人が椅子に座ると、二階から胡桃色の長髪と藍色の瞳をした女神ーアストレア様が来た。

「あら？ いらつしやいベル、アイズ。『あの件』かしら？」

アストレア様の言う『あの件』というのはベルのランクアップの条件の一つである『魔法とスキルの完全理解』の『全使用可能属性の同時展開の完全制御』である。そのためベルはアストレアファミリアに協力を要請しに来た。アイズはただの付き添いである。

「はい。アリーゼさん達は居ますか？」

「今はパトロール中ね。でも、もうすぐ帰ってくると思うわよ」

「では、待ってます」

「ふふっ。じゃあ、お茶を用意するわね」

「ありがとう。お母さん」

メーテリアは席を立ち、台所の方へ向かって行った。代わりにアストレア様が座った。

「それで？　今回は何階層に行くの？」

「今回は二十階層です。特に冒険者依頼（クエスト）もありませんし、あそこなら周りに気を使わなくていいので。アイズとの特訓もそこでしていますし」

「……貴方達って本当にレベル2なのか時々疑問になるのよね」

「あはは……」

「モグモグ」

ベルは苦笑する。自分でも異常だということは分かっているからだ。アイズは出されたお茶に目もくれずじゃが丸くんを食べ続けている。

興味ないのは分かるけど、少しは話ぐらい聞いてもいいんじゃないかなあ？

「強くなるうとするのは良いけど、無理はしないでね」

「はい。お母さん。そういえば、体調はどう？」

「ん？　元気よ。スキルのおかげか病気の影響は全く無いし、体力とかも戻ってきているから、そんなに心配しなくて良いのよ？」

「と、こう言ってますけど、アストレア様？ どうなんですか？」

「買い出しとか家事全般を積極的にやっているわよ。たまにダンジョンにも行っ  
ちやっているわよ」

「へえ。ねえ、お母さん」

「な、何かしら？」

ベルはメーテリアに視線を向けながら呼びかけると、メーテリアは視線を外しながら  
応答した。

「僕、言った筈だよ？ 家事は許すけど、ダンジョンはダメだって」

「ダ、ダンジョンっていつても、6階層ぐらいまでよ？ 戦わないと体が鈍っちゃう  
し。私だって一応レベル5なのよ？」

「ふくん。そっか。お母さんは僕の言うこと聞いてくれないんだね」

「あ、ち、違うのよ!？」

ベルはわざとらしく悲しむとメーテリアが慌てて弁明する。

「た、確かにベルの言うことを守ろうとしたわ。でも、アリーゼちゃんが『私達が言わ  
なければ、ベルにはバレないわ!』って言ったから、それで」

はい。黒幕発見しました。今回の模擬戦での哀れな生贄が決まりました。

「メーテリア。ベルに良いようにされてるわね・・・」

「モグモグ」

アストレア様は苦笑し、アイズはまだ、じゃが丸くんを食べている。すると、玄関の方から大きな声が聞こえてきた。

「アストレア様〜！ メーテリア〜！ 帰ったわ〜！」

「おや？ どうやらベルとアイズもいるようですね」

帰ってきた二人の内、最初に言ったのはアリーゼ・ローヴェル。アストレアファミリアの団長で赤髪のポニーテールが特徴である。二人目はリユー・リオン。金髪で長髪のエルフであり、ベルがアイズと出会う前なら確実に一目惚れする程、ベルの好みにドストライクしたエルフである。

ちなみにそれを知ったアイズはリヴェリアに自分の耳をエルフに近づける方法を聞き、呆れられたのはここだけの話である。

「アリーゼさん。リユーさん。巡回お疲れ様です」

「私のような超絶美少女には巡回なんて紅茶のさいさいよ！」

「アリーゼ。それを言うなら、お茶の子さいさいです」

「そうとも言うわね！」

「そうとしか言いません」

相変わらず漫才染みたやり取りをする二人。アリーゼさんはいい加減にちゃんと言

葉と意味を知ってから使うべきだと思う。

「大丈夫ですか？ お疲れでしたら、少し時間を置きますが」

「いえ。今回の巡回は特に何も無かったので、このまま行けます」

「分かりました。では、よろしくお願いします」

「ええ。任せました」

うーん。こうしていると、リユースさんは完璧なのに、どうして時々、ポンコツになるんだろうか？

「アイズ？ どうするの？」

「一緒に行く」

「そっか」

アイズは丁度良くじゃが丸くんを食べ終わり、立ち上がった。

四人でダンジョン二十階層へと向かった。

## 第五話

ベル達は現在、ダンジョンの入り口ローバベルの塔の前に立っている。

「じゃあ、ベル行きましょー!」

「アリーゼさん。その調子で行ったら、二十階層まで持たな〜行っちゃいましたか」  
「全く、アリーゼは・・・」

アリーゼはウキウキした感じで走って行った。ベルはアリーゼを止めようにも間に合わなかった。リユウはアリーゼの行動に頭を抱えている。

アリーゼさんはレベル3だし、ちよつとやそつとじゃ疲れないとは思うけど、日帰りのつもりだし、僕も少しボコボコにするつもりだから、心配だな。↑それは心配とは言わない。

すると、急に僕の身体に悪寒が駆け巡った。天高くから見下ろされ、魂の質を測ってくる無遠慮な視線が僕に向けられている。

こんな視線を送ってくるのは僕が知る限りただ一人。フレイヤ様しかないだろう。

正直、これまでも何度かあったが、今日はいつも以上に奥底まで見てくる。

何かあったのだろうか？ つまらないが故の暇潰しか、それとも――

『決してありえない未知への興味』か。

しかし、このままだと『鏡』を使ってまで、ダンジョンの中を覗きかねない。

少し『酔って』いてもらおう。

転生のお陰で自分の魂というものを自覚できた。自分の魂に意識を向けて、一瞬だけ魂の輝きを強くした。

方法は簡単だ。『理想』を強く抱けば良い。純粋な想いであればあるほど、魂は白く輝く。他ならないフレイヤ様が言っていたことだ。前世のという言葉が付くが。

どうやら、上手く行ったようだ。視線が途切れた。

そんな一瞬とも言えるやり取りをしていると、アイズが小首をかしげながら、尋ねてきた。

「どうかしたの？ ベル？」

「ん。何でもないよ」

「そう。『今は』何も聞かないけど、何かあったら言っただね。じゃないと、何かしちゃうかも」

「う、うん」

えっ、なんかアイズ怖い。ヤバい。リヴェリアさんの言った通り、本当に僕のそばに置いておかないと何かしでかす可能性が高い！

ベルはアイズから逃げるようにダンジョンへと向かった。

だから、ベルは分からなかった。アイズは上を見て、「ふふっ」と笑っていたことに。

僕達は二十階層に着いた。

此処は『異端児（ゼノス）』の件で訪れて、『童女（ヴィーブル）』のウィーネを異端児の隠れ里に連れてきた。まさにこの場所で異端児達と手合わせ程度だが、戦闘を行っ



た。

僕はこの場所に来ると、何とも言えない気持ちになる。此処で異端児達と会えたが、今の状況では絶対に会うことはできない。ウラノス様やフェルズさんに認めてもらえていないから。

何ともどかしいことか。前世では完全に人類と異端児達が手を取り、一種の平和が作られた。『アイズ』の為にこれは絶対に避けて通れない道だ。

すると、アリーゼさんが口を開いた。

「よし！ では、始めましょうか！ 打ち合わせでは私とベルの一对一だけど、変わら  
ずかしら？」

僕はアリーゼさんのその言葉に同意を示そうとすると、アイズが待ったをかけた。

「私も戦いたい」

「アイズも？ じゃあ、どうしようかしら、リユームも入れて二対二にすべきかしら？」  
その言葉にアイズは首を横に振って、否定を示す。

「二人ずつが良い」

「それって、三つ編みかしら？」

「アリーゼさん。それを言うなら三つ巴ですよ」

「そうとも言うわね！」

「そうとしか言いませんよ」

だが、なるほど。当初の予定とは違うが、それはそれで良い特訓になるかもしれない。

「僕は良いですよ」

「ベルが良いなら、私もイイケド・・・」

アリーゼは思っている。「この子、どれだけ戦いたいのかしら？」と。

「じゃあ、始めよっか」

「うん。リユーさん。始まりの合図をお願いします」

僕はスキル『幻想』を使い、『ヘステイアナイフ』を作り出した。

「分かりました。それでは、よいい始め！」

リユーさんの合図で一斉に動き出した。

最初にベルの前に来たのはアリーゼだった。

「本気で行くわよ！」

「はい！」

ベルはアリーゼの連続攻撃をヘステイアナイフで防御あるいは回避し続けた。

すると、ベルの後ろからアイズが奇襲してきた。

ベルは身体を捻って、紙一重で回避した。

「アイズ、ちよつと攻撃鋭くない？」

「ん。気のせい」

「いや、絶対気のせいじゃない！」

いつもの模擬戦より攻撃が苛烈になっている。速さ重視のスタイルでも、防戦一方になつてしまう。

現在、ベルはアリーゼとアイズの二人から同時に攻撃をされ続けている。

「ちよつとお二人さん？ 何か手を組んで僕を倒そうとしているように感じるのだけ  
ど？」

「気のせい」

「気のせいよー！」

「アツハイソウデスカ」

ベルは二人の攻撃を捌きまくっているせいか、体勢を崩した。二人は好機とばかりにその隙に飛びついた。まるで、餌を目の前にぶら下げられた馬のように。

『オールフォース』

「ツー！ 『聖なる風よ（テンペスト）』『エアリエル』」

『アガリス・アルヴェシンス』

ちよつと二人とも本気過ぎではありませんかねえ！

「はあー！」

「ふっ!」

「くっ!」

二人の強くなった攻撃を魔法の制御に頭を回しながら、捌き続ける。難易度は先程の比ではない。

そこからは長かったような短かったような。そうして戦闘していくうちに制御は最適化され、意識しなくても暴発はしなさそうだ。

「ハア、ハア、ハア」

「これで最後にしましょう」

「ええ、そうね」

「ん」

三人は一触即発の状態で睨み合う。

何処からか、ぼちゃん、という音が聞こえた瞬間三人は一撃を繰り出した。

「ハアアアアアアアア!!!」

その攻撃の末、三人の内一人だけ立っていた。

それはもちろんー

「ふっふっふっ。さすがは超絶美少女の私ねー」

アリーゼである。

ベルとアイズは地に倒れている。意識はあるようだが、どちらも動けないといった感じだ。

「ベル、アイズ。お疲れ様です。回復薬です。動けないようですので飲ませてあげますね」

「あはは、お願いします」

リユーはベルを上半身だけ起こして、回復薬を飲ませた。

ちなみに、リユーさんは典型的なエルフなので肌の接触を嫌う。だけど、アリーゼさ

んや僕は大丈夫らしい。前世からの疑問だが、どんな基準なのだろうか？

なので、リユーさんはアイズに触れることができないので僕を先に回復させ、僕がアイズに回復薬を飲ませることになる。

「アイズ、口を開けて？」

「口移し」

「何処で覚えてきたの？ そんな言葉……。とにかく、それはダメ。そういうのは大きくなつて好きな人とするんだよ？」

「私はベルが好きだよ？」

「んっんん!! もう、良いから飲みなさい」

「むっ」

アイズは不満一杯だが、しっかり回復薬を飲んだ。

・・・帰ったら、リヴェリアさんと相談しよう。

そうして、僕達は地上へと戻ったのだった。

## 第六話

僕はダンジョンから地上へと帰還した。すっかり夕暮れ時になって、冒険者も各々の家へと帰る。

そして、バベルの前にてアリーゼさん達と別れた僕とアイズはロキファミリアのホームー『黄昏の館』へと戻った。

そこで迎えてくれたのはロキファミリアの首脳陣であるフィンさん、リヴェリアさん、ガレスさんと主神ロキ様だった。

「二人ともお疲れさん！」

「どうやらしつかり試練は達成できたようだね」

「二人とも疲れているだろう？ 立ち話でなく座つて話そう」

「ガツハツハ！ ベル！ 良い面構えじゃないか！ 今夜は宴を開こうじゃないか！」

ああ。やっぱり家族つていうのは良いなあ。前世の僕が取りこぼした一つの真理。

やっぱり『孤独の英雄』は必要ない。いや、そんなものは存在しない。僕はここに来て良かった。ここでなら、見つけられると思うから。前世では辿り着けなかった『幻想』を。

「ただいま。みんな」

「私、疲れた。ベル、膝枕して」

アイズよ。少々マイペースではないか？ あと、僕も疲れているんだけど？

「アイズ。ベルだって疲れているんだ。せめて、明日にしておけ」

「じゃあ、予定通り二人のステイタス更新やな」

そして、僕は執務室に移動し、僕は長椅子に横になった。そして、僕の上にロキ様が跨り、ステイタス更新をする。

「ベルたん……。予想通りランクアップは可能やけど、このアビリティはドン引きやで」

「そうですか？」

「だっておかしいやろ！ 何でちよつとダンジョンに潜っただけでこんなにアビリティが伸びるんや！」

ロキ様はそう言って、ランクアップする前の最終ステイタスを写した羊皮紙を渡してきた。



ベル・クラネル L.V. 2

『力』S 9 5 4 ↓ S S S 1 1 3 8

『耐久』S 9 7 3 ↓ S S S 1 1 2 3

『器用』S S 1 0 3 5 ↓ S S S 1 2 8 9

『敏捷』S S S 1 1 2 1 ↓ 1 2 6 2

『魔力』S 9 4 2 ↓ S S S 1 2 7 4

幸運 H

### 《魔法》

【エレメンタルフォース】

・付与魔法

・速攻魔法

・『ローフォース』に属性名を入れることでその属性を纏うことができる

・使用可能属性 『ファイア』『アイス』『ウインド』『サンダー』『アース』『ホーリー』

『ダーク』

《スキル》

【理想】

- ・早熟する
- ・理想を強く想う程、効果上昇
- ・想いは伝播する。

【幻想】

- ・【理想】が限界へと至った時発動
- ・古き理想が燃えて、新しき理想が生まれる
- ・燃やされた理想は使用可能

「なんかすごい成長していますね。トータル10000越えですか」  
「もう、二人とも怖過ぎるで・・・」  
そう言いながら、新しくなったステイタスを写した羊皮紙を確認した。

ベル・クラネル L.V. 3

『力』10

『耐久』 I O

『器用』 I O

『敏捷』 I O

『魔力』 I O

幸運 H 純粹 I

《魔法》

二

《スキル》

【理想】

- ・早熟する
- ・理想を強く想う程、効果上昇
- ・想いは伝播する。

【幻想】

- ・【理想】が限界へと至った時発動
- ・古き理想が燃えて、新しき理想が生まれる
- ・燃やされた理想は使用可能

【理想昇華】

- ・燃やされた理想を理想の形に応じて変化
- ・燃やされた理想を理想の質に応じて強化
- ・燃やされた理想を理想の色に応じて昇華

「魔法は……発現してませんね。その代わりに、スキルが発現しましたか」

「『理想昇華』……か。見たところ、他の二つのスキルと関係したスキルのような感じが、リヴェリアさんが僕のスキルについて分析する。」

「『理想昇華』という名前を見ると、『理想』の上位互換のように見えるけど、あまり関係があるように見えないね」

「うーん。『幻想』の延長線上ですかね？」

フィンさんは率直な感想を言う。

「うーむ。それもあるが、儂としては発展アビリティの『純粹』の方が気になるぞ」

「『純粹』ねえ。綺麗になるんやないか？」

「言われてみると、ベルが少し綺麗になってる気がする」

ガレスさんは発展アビリティに目を付け、ロキ様がなんとなく効果を考え、アイズは僕を見てそんなことを言う。

自分が綺麗になったかどうかは鏡を見ないと分からないな。

「でも、ベルだよ？」

「ベルだしね」

「ベルだぞ？」

「ベルたんやからなあ」

「な、何？ 一体？」

突然、みんなが僕だからと言って頷き合っている。何のことだろうか？

「「「「確実に何かある」」」」

「え〜」

一体僕はどんな目で見られているんだ？

「僕としてはアイズのステイタスが気になるんだけど？」

「ベルは見ちゃ、メツ！ だよ？」

「やっぱりか・・・」

実はアイズは僕にステイタスを見せたくないらしい。まあ、普通は同ファミリアでも他人にステイタスは見せないものだが。

とりあえず、アイズが見てはいけなと言っているから、僕は先に自分の部屋に戻る  
としよう。

「ん。ロキ、お願い」

「おお、分かったで〜」

私はベルを部屋から追い出して、ステイタスの更新をする。

「ほい、これがレベル2の最終ステイタスやで〜」

アイズ・ヴァレンシユタイン L.V. 2

『力』 SSS 1 1 9 2 ↓ 1 2 9 6

『耐久』 SS 1 0 8 2 ↓ SSS 1 2 1 1

『器用』 SS 1 0 9 7 ↓ SSS 1 2 5 6

『敏捷』 SSS 1 2 4 5 ↓ 1 3 6 7

『魔力』 SS 1 0 9 4 ↓ SSS 1 2 4 8

精霊 H

### 《魔法》

【エアリエル】

・付与魔法

・風属性

・詠唱式『聖なる風よ（テンペスト）』

【精霊の奇跡】

・回復魔法

・【エアリエル】発動時、効果上昇

・詠唱式『母なる風よ、どうか私に力を貸して』

・自分が最も愛する者の為に使用する時、蘇生魔法に変化可能

《スキル》

【精霊姫】

- ・怪物種に対しアビリテイ超高補正
- ・自身の愛する者の為に戦う時アビリテイ超高補正
- ・自身の愛する者と魂を繋ぐ

【英雄王妃】

- ・早熟する
- ・想いが強くなる程効果上昇
- ・自身が最も愛する者という時想いはさらに強くなる

「アイズたん……。どんだけベルたんが好きなんや……。」

「ん。言葉で表現できないくらい」

「事情は把握しているが、見た目7歳の少女が女の顔をしていることに複雑な気持ちだ」

私は普通のことを言ったつもりだけど、何でリヴェリアが複雑に感じるのだろうか？

「それで？ 新しいステイタスは？」

「ああ、うん。これやで」



アイズ・ヴァレンシユタイン L.V. 3

『力』 I 0

『耐久』 I 0

『器用』 I 0

『敏捷』 I 0

『魔力』 I 0

精霊 H 聖風 I

《魔法》

【エアリエル】

・付与魔法

・風属性

・第一詠唱式『聖なる風よ（テンペスト）』

・第二詠唱式『白く輝け（クラネル）』

・第二詠唱式により出力増大

【精霊の奇跡】

・回復魔法

・【エアリエル】発動時、効果上昇

・詠唱式『母なる風よ、どうか私に力を貸して』

・自分が最も愛する者の為に使用する時、蘇生魔法に変化可能

《スキル》

【精霊姫】

・怪物種に対しアビリティ超高補正

・自身の愛する者の為に戦う時アビリティ超高補正

・自身の愛する者と魂を繋ぐ

【英雄王妃】

・早熟する

・想いが強くなる程効果上昇

・自身が最も愛する者という時想いはさらに強くなる

「・・・あまり変わらない」

私が新しいステータスへの不満をボソツと言うと、

「いやいやいや、エアリエルの強化はかなり凄いと思うぞ?!」  
ロキは慌てて、私にフォローを入れてくる。

「そうだぞ? 出力増大としか書いてないが、お前の風は元々が強いんだぞ? どの程度かは分からないが、お前の想いの結晶でもあるんだ。とんでもない性能を秘めていると私は思うが?」

「・・・うん。私が信じてあげなきゃダメだよね」

「そうやで? もちろん、ウチらもアイズさんの事は信じとる。でもな、やっぱ、自分が一番自分のことを信じてあげないといけないんや」

「うん。ありがとうロキ」

そうだよね。ベルは自分の力を信じて、今まで戦ってきたんだよ。それが全て強さに結びついているわけじゃないけど、ベルの純粋な想いが『私だけの英雄』に繋がった。そう考えると、自分を信じるといえるのは忘れてはいけないことだと思う。

「ぐへへ〜! 素直なアイズたんもええなあ!」

「変なことしたら、斬ります」

「アツハイスミマセン」

「全く。お前も懲りないな」

やれやれと言った風にリヴェリアは首を振るが、内心では絶対に懲りることはないの

だろうなと思っっている。

「じゃあ、ベルのところに行ってくる」

「待て」

「ムギユツ」

私はベルの所に行こうとすると、リヴェリアに捕まった。

一体、何のようなのだろうか？ 私は早くベルの下に行きたいのだが。

「アイズ。お前、ベルに回復薬の口移しを頼んだそうだな？」

ビクツとアイズの肩が跳ねた。

「ナ、ナンノコトカ、ワタシ、ワカラナイ」

「惚けても無駄だぞ？ ベルに相談されたからな」

「ベル!? 何でリヴェリアに言ったの!？」

「さて、お前の中身はもう既に立派な淑女なのだろうか？ そんなお前がいくら、ベルの

ことが好きとはいえ、限度はあるはずだろう？」

「うっ」

「よし。お前は今から説教だ」

「えうっ」

しっかり捕まっているから、全然逃げられない！

この後、少女は保護者にこっぴどと絞られ、翌朝でベルに止めてもらうまで続いたのだった。

## 第七話

僕とアイズがレベル3へと至ったその次の日の朝。

僕の目の前にはこれ以上に無い程の説教をするリヴェリアさんと正座しつつも全く寝ていないのかうつらうつらとしながら説教を受けるアイズいた。

どうしてこんな事に？ もしかして、昨日、僕がリヴェリアさんに相談したことが原因？

一体何故？ 別に所詮子供のお遊びだと一笑に付すだけで良いはずなのに。それもそれができない程の何かがあつたのかな？

うーん。どんなに考えても答えは出ないかな。とりあえず、止めよう。リヴェリアの説教はもうアイズの耳に入つてなさそうだし。むしろ、よく耐えていると褒めたいぐらいだ。

そう思い、僕はリヴェリアさんの服の裾をチョンチョンと引つ張つた。

すると、リヴェリアは説教を止め、僕の方に向いた。そして、「どうした？」と言う。

とりあえず、事情も分からないまま説教を止めるよう説得するわけにはいかないの  
で、僕は前世で培った『あざとさ（シルさん直伝）』を用いて、全力の涙目と上目遣いで  
こう言った。

「もうやめて下さい、『おねえちゃん』」

べるのあざとさというげき！

りぐえりあはあまりのかわいさにかたまつた！

それをみていたほかのだんいんたちがかわいさにたおれた！

あれ？ リヴェリアさんが固まつた？ お、おかしいなあ。シルさんに「ベルさんが  
これをやれば、歳上のお姉さん全員イチコロです！」なんて言つてたからやつてみたの  
に。

この『自分の容姿を視野に入れていない馬鹿鬼』はこれを初めてやつたため、どんな  
威力を持つているか知らないのだ。いや、仮に使つていたとしても、どうせ気付かなか  
つたと思うが。

ちなみに、眠そうなアイズもベルの声が聞こえて来たため、すぐに起きたが、ベルの  
可愛さに当てられ、すぐに気絶した。とても幸せそうな顔で。

すると、リヴェリアはハツとして意識が回復した。

あ、危なかつた！ 危うくあまりの可愛さに昇天するところだった！ ベルは己の容

姿を分かっていないのか!? そんな目で懇願されては何でも受け入れてしまうだろうが!

私は目の前でとても不思議そうな顔でこちらを見ている少年を見ながら、少し前のことを思い出す。

あれはアイズに世話を焼かされていて、少し苛立っていた時だ。

ロキが一人の年端もいかない少年を連れて来た。

最初は誘拐かと思つたが、その少年の眼を見て、理解した。

この子はとてつもない想いを秘めていると。こんな若い少年には今すぐにも駆け出してしまいそうな程の願いがあると。

だから、私はロキからではなく本人から名前を聞いた。すると、その少年は焦りを身に宿しながらも微笑みながら答えた。

「ベル。ベル・クラネルです。五歳です。『初めまして』」

彼のーベルの『初めまして』という言葉に何となくだが、ちよつと悲しくなつた。何だか、距離が離れているようなそんな気がした。小さい少年が遠慮を用いて、近づこうとしない。

だから、『私の方から』近づいた。自分でも何故そうしようとしたのかは分からない。



それでも何だか気に食わなかったのだ。子供が大人に遠慮している事に。

そして、私はロキに尋ねた。

「この子はどうするんだ」

「ウチの眷属にする。もちろんこの子の同意はあるで」

ロキは真剣な表情で答えた。

つまりはこの子がファミリアに加わるのは決定しているということだ。

ならば、問題ないだろう。そう自分に言い訳聞かせて、少年を抱いた。「えっ!? あのっ!」や「ひゅー。あのママがな」という言葉が聞こえる。断じて、私はママではない!

「ベル」

「は、はい」

「君は今日から私達の家族だ。だから、遠慮なんてしなくて良い。ここには君より歳上しかないが、だからといって変に縮こまる必要は無い」

私はベルの頭を撫でながら、そう言う。

すると、ベルは私の服を掴みながら、小さな声で呟いた。

「ありがとうございます」

そして、ベルは私の腕をポンポンと叩く。

「もう、大丈夫です」

先程の焦りを感じさせない微笑みでそう言った。

この時、不覚にも私はキュンってなった。

それに気づいたロキが後に押揃いにきたが、手刀をかましてやった。

こんな所だろう。不意にベルを抱きしめたくなくなった。彼には母親がいるが、メーテリアの話によると、ベルは家族の愛を求めていて、母の愛を与えても更に渴望していると。だから、メーテリア以外にも家族が必要だということ聞いた。

私はベルの何になりたいのだろうか？

母親？ いや、メーテリアがいるだろう。

恋人？ いや、ベルとアイズは両思いだろう。

うーんと考えながら、ベルを撫でてしているとベルが小さく呟いた。

「お姉ちゃんがいたら、こんな感じなのかな？」

この時、私の頭に電撃が走った。

そうか、ベルは姉が欲しいのか。

ならば、私がベルの姉になろう。ベルはどう思うだろうか？

「なあ、ベル。良かったら、私がお前の姉になろうか？」

「えっ、あつ、えっ?」

「何をそんなに驚いている? お前がさつき言っていたことだろうか?」

「えっ、いやっ、あのっ。別にそんな意味じゃっ」

「そうなのか? ベルは私が姉になるのは嫌なのか?」

ちよつとずるいかもしれないが、さつきの仕返しだ。

「いつ、いえっ! 嫌じゃないっていうか、むしろ、嬉しい……です」

「そうか。なら、問題はないな」

私の言葉にベルはオドオドしながら聞いてくる。

「……良いんですか?」

「私が提案しているんだ。良いに決まっているだろう?」

「うう。おねえ……ちゃん?」

「ツ! ああ、そうだ。私はベルのお姉ちゃんだ」

「あう」

「ふふっ。よしよし」

リヴェリアはみんなが起きるまでずっと撫で続けていた。

そして、真っ先に起きたアイズがベルを撫でるのに参加したのは言うまでもない。

それを見たロキが「リヴェリアママが、お姉ちゃん……これはアリやな!」と

言  
つ  
て、  
リ  
ヴ  
エ  
リ  
ア  
に  
叩  
か  
れ  
た  
の  
も  
言  
う  
ま  
で  
も  
な  
い  
こ  
と  
だ  
ら  
う。

## 第八話

僕とアイズのランクアップ記念に『黄昏の館』で宴をすることになった。お母さんも招待されて来ている。

だがもちろん、僕もアイズもお酒は飲めないのです、普通の果実水を飲むことになる。すると、ロキ様が開始の合図した。

「それじゃ始めるで！　ベルたんとアイズたんのランクアップおめでとぅー!!  
かんぱーい！」

「!!!かんぱーい!!!」

コーンコーン!!

「ゴクツゴクツ、プハーー！　いやー！　ベルたん達の手前、飲酒は遠慮してたけど！  
久しぶりの酒は美味いわーー！」

ロキ様はグラスに入ったお酒を一口气飲みし、久しぶりに飲んだ酒に感動している。  
正直、ダメな人しか見えない。リヴェリアさーお姉ちゃんに怒られるよ？

チヨビチヨビと果実水を飲みながら、そう思う僕。

すると、隣に座るお母さんが僕の頭を撫でながら話しかけて来た。

「レベル3おめでとう。ベル。無理はしてない？ どこか怪我したら私に言うのよ。しつかり治すからね」

レベル5の回復魔法か。『戦場の聖女(デア・セイント)』のアミッドさん以上はあるだろうなあ。アミッドさんはまだオラリオに来ていないから、僕はお母さんに回復を頼んでいる。リヴェリアお姉ちゃんも回復はできるけど、僕にかかりつきりなのはまずいためという理由もある。本人は「ベルが一番大事だ！」なんて言っていたけど、ファミリアの副団長なのだから、団員も見えてあげて欲しい。

「ありがとう。お母さん。その時はお願ひ」

「ええ。任せなさい。『精癒』も持っているから、精神力の心配は要らないわよ。ドン  
ドン来なさい」

「いや、そもそも、ドンドン怪我するような事態は起きてほしくないんだけど」

僕は苦笑いしながら、そう返す。お母さんは「それもそうね」と言った。しかし、願っても勝手に来るからなく。そういうことって。

僕はこの先に起こる事に自分の記憶を整理しながら遠い目をせざるをえなかった。

そして数分後、僕に全く予想だにできなかったことが起きた。

「お母しやくん。頭もつとなでて〜」

「あらあら。ベルつたら甘えん坊さんね〜。よしよし」

「えへへ〜」

酔いました。

ええ、お酒を飲んでないのに酔いました。

雰囲気です酔いました。

結構油断してました。

ベルは普段人に甘えたい欲求がかなりありますが、そこは前世と前前世の記憶を持っていることにより、自制できていました。しかし、酔うと、自制が外れて、あらか不思議、押さえつけられた甘えたい欲求が解放されます。よってこの状況が作り出されました。

「お母しやくん。だいすき！ ずっとあいたかつたよ〜」

「ごめんねベル。でも、お母さんはこれからずっと貴方のそばにいるわ」

「えへへ。やった〜！ ずっといつしよにいようね〜」

「ええ、ずっと一緒よ」

ベルの甘え全開状態にメーテリアは口がにやけそうな衝動を抑えながら、なんとか対応する。

正直、全然抑えられていない。

すると、ベルは撫でられるだけじゃ、飽き足らないのかメーテリアに抱きついた。ちなみにアイズは静観している。アイズは『精霊』のアビリティと精霊の血の共鳴のおかげで状態異常には強いのだ。ベルは唯一打ち消せる『純粹』を持っているが、I程度ではたかが知れているのである。

ベルは5歳児だし、仕方ないよネ！

「お母しやくん。お母しやくん」

「どうしたの？ ベル」



「あのね。お母しゃんむりしてないかなって。しんぱいだから」

「つ?!?!? だ、大丈夫よ! お母さんレベル5で強いなのよ?」

ベルのナチュラルあざとさ(フレイヤ様命名)のかわいさにメーテリアが口を押さえながら、必死ににやけないように奮闘している。

しかし、先程から何度も言っているが、全然隠せていない。

「ベル。次はリヴェリアお姉ちゃん所に行つて来なさい。私はちよつと休憩するわ」

「あーい」

ベルは長椅子から降り、斜向かいに座っているリヴェリアの下までトテトテ歩いて行つた。

この様子には他の団員達もお酒を飲むのを抑えて、代わりに鼻血が出ないように鼻を押さえていた。

宴はまだまだ続く・・・

## 第九話

宴が始まり、皆の調子も最高点だと言える頃――

ベルがメーターリアの所から私の下にトテトテと歩きながら、向かって来ていた。

正直、その可愛さに悶絶しそうだったが、そこは他の団員の手前、我慢した。

しかし、隠しきれてな（以下略）

「お姉ちゃん。ギューっしてして〜」

「あ、ああ。おいでベル」

私はベルを対面状態で膝の上に乗せて、ハグした。

ベルは普段、子供の欲らしい欲というものを表に出さない。今は酔っているせいか、かなり曝け出しているが。

これからも度々酔わせるか？

そんな事がふと頭によぎったが、すぐに霧散させる。

ベルはまだ子供だぞ！ 体に悪すぎる！

それにしても、ベルは可愛いな。短い腕で私の背中に手を回し、小さい頭を私の胸の谷間に埋めている。とても愛おしい。ずっとこうしていたいぐらいだ。

「お姉ちゃん？ どうしたの？」

「ん？ なんでもないぞ」

どうやら、ベルに見透かされそうなくらい、顔が緩んでいたようだ。酔っていないければ、確実にバレていただろうが。

折角のことだ、普段じゃ、絶対はぐらかしてくるような質問をしてやろう。

「ベル。私のことは好きか？」

「うん。だ〜い好きだよっ！」

「ゴフツ！ そ、そうか。どこが好きなんだ？」

「えつとね〜。しっかりと僕の仕事を見てくださいる所！」

「そうか。私はいつもベルの事を見ているぞ」

「お姉ちゃんも？ お揃いだ〜」

ん？ 軽く告白っぽくなっている気がする。私も酔っているのか？ 確かにベルの

可愛さに酔っているが。

というか、さりげなくベルが「お姉ちゃん『も』」と言ったぞ？ もしかして、ベルも

私のことを見てくれているのか？

そう認識するのと同時に私の顔が赤くなっていくのを感じる。嬉しさと恥ずかしさが入り混じった感情が頭の中を回る。

えっ？ えっ？ えっ？ ベルが私のことを見ていた？ いつも？ もしかして、甘えたかった？ 言ってくれば良かったのに。いつでも甘やかしたのに。

「？ お姉ちゃん？ 顔が赤いよ？」

「ん。大丈夫だ。気にするな」

そんな私の心を知ってか知らずかベルは私の心配をしてくる。なんと可愛いことか。だが、そろそろ離してあげた方が良いか。この子が大好きな『娘』が嫉妬を含む視線をこっちに送ってきている。

「ベル、そろそろアイズの所に行つてくるといい」

「うん！ 分かった！」

ベルは私の膝の上から降りて、パァーとした笑顔のアイズの下へ向かった。

ベルの温もりは消えてしまったが、しかし、私は決意した。これからはすっかり甘やかそう、と。

私は絶賛、不機嫌モードである。

なぜならば、私の愛しいベルがメーテリアさんはまだしもリヴェリアにも甘えているのだ。私の所には来ずにだ。リヴェリアがベルの姉になったことは聞いたが、それでも羨ましいのだ。

すると、リヴェリアが私の視線に気づいたのかベルをこつちに寄越してくれた。ありがとうリヴェリア。リヴェリアならやってくれと信じてた。

「ベル、おいで」

「アーイーズ。今日も可愛いね」

「ふえっ!?!」

な、なんで!? いきなりそんな事を!?

びつくりして、変な声出ちゃった。……何だかベルがいつもと違う。どちらかと言うと、前世のベルと同じような？ それも恋人時代の時の意地悪ベルに似ている？ というよりほとんど同じ？

「アイズ。ほら、よしよし可愛いね」

「うっ、うっ」

ベルが私を抱きしめながら、頭を撫でてくる。

うっ。どうして？ ベルは甘えるんじゃないやなくて、甘やかしてくるの？

……撫でられて拒絶してない私が言うのも何だが。

「ベル？ 私にもベルを撫でさせて？」

「うーん。だーめ。しばらく、アイズを堪能できてなかったんだよ？ 今日ばかりは僕が主導権を握らせてもらうよ」

ベルはそう言いながら、私を押し倒す。すると、ベルは私の耳や首を甘噛みしてくる。

「あつ、ふあつ、ベル、ダメッだよっ？ そこっ、は、弱い、の」

「ふふっ。本当に可愛いねアイズ。ダメって言う割には拒絶はしないんだね」

「……私がベルを拒絶できる訳ないもん」

「本当にそういう所だよ、アイズ。君の一つ一つの行動が愛しい。もつと、僕に見せて

？ あむっ」

「ひゃあつー！」

私は慌てて口を手で押さえる。

ベル!? 君は確か私が転生している事知らなかったはずだよね!? 扱いがまるで前世のソレと変わらないよ!? 嬉しいけど! 嬉しいけども!

「ああ、アイズ。君も何か要望があるかい?」

ベルが私に要望があるかを聞いてくる。

前世ならば、このまま愛してもらうけど、今じゃあ、そんな事できないし。

そうだ! この前の『口移し』の件があった!

「・・・して・・・欲しい」

「ん? もう一度言ってみて?」

「キス・・・して欲しいな?」

「おやおや。アイズから具体的な内容が聞けるとは思えなかったよ」

「んっ」

私は自身の唇を差し出す。すると、ベルも段々と私に顔を近づけて、唇が触れー

「はい。ダメだよ、ベル。君達はまだ子供なんだから、そういうのは感心しないなあ」

「あうっ」

フィンがベルを抱っこして離し、軽く叩いた。

むく。あと、もうちよつとだったのにく。

「アイズもだよ。そういうのはしっかり大人になってからだよ」

フィンには私にも苦笑しながら軽く叱ってくる。

「むく」

「そんな顔してもダメだよ」

「・・・はい」

「よろしい」

「ベル、良いかい？」

「あう。分かったく。フィンお兄ちゃん」

「っ!？」

ベルがフィンの事をお兄ちゃんと呼んだ。

ベル。まだ、酔ってるの？

フィンも驚きのあまりに固まってるよ。

「っは! びっくりした! これはすごい威力だね」

「フィンお兄ちゃん。ギュー」

「っ!」

「おやおや、さつきとはまた打って変わってだね。抱きついてくれるのはとても嬉し



いのだが、離れてくれないかい？ さつきからアイズの視線が怖いから」

「フィンお兄ちゃんは僕のこと嫌いなのか？」

「うっ！ そうじゃないんだ、ベル。後でいくらでも抱きついて良いから」

「・・・ほんとに？」

「本当だとも。『勇者』の名に誓おう」

「うん。分かった！」

そうして、ベルはフィンから離れた。

よし、このままだと神の言うところの『BL』展開になりそうだった！ 背丈も似ているし！

すると、ベルが目を擦っている。

「うみゆう」

「ベル、眠い？」

「うん」

「じゃあ、一緒に寝よ？ それくらい良いよね？ フィン」

「んー。まあ、良いかな」

「許可も貰ったし、部屋に行こ？」

「うにゆ」

そして、私はベルと私の部屋のベッドで一緒に寝た。

ちなみにベルはこの宴の出来事を何一つ覚えておらず、団員達はベルを今後、酔わせようか割と真剣に考えていた。

## 第十話

ランクアップの宴が終わった次の日の朝――

「う、うゝん」

僕は目が覚めた。

僕、いつの間に寝てしまったのだろうか？ 確か、僕とアイズのランクアップを祝う為の宴が開かれて、僕は果実水を飲んでいて、その後は――

ダメだ。全然思い出せない。夜遅かったし、眠くなってしまったのだろうか？ 僕の体は5歳児だし、あり得なくもないんだけど。何でだろうか？ 絶対に思い出してはいけないようなそんな気がする。思い出したら最後、死が訪れそうなそんな気がする。よし、思い出すのやめよう！

ふと、気づいた。ここは僕の部屋ではないことに。もつと言うと、とても女の子らしい部屋だ。

……なんか、部屋の机に僕に似た人形があるような気がするけど、気にしちや

いけない！ そう！ あれは、そうだ！ きつとアルミラージ似の人形なんだ！ そうに違いない！

僕は半ばいや、完全に現実逃避しながらベッドに潜り込もうとした。

うん？ 何か妙な膨らみが……。この部屋の様子と膨らみの大きさから察するに……。まさか、

僕は布団を剥ぎ取った。そこには――

「すーすー」

すやすやと寝ているアイズがいた。

は。これにはため息を吐かざるを得ない。

アイズ。僕の大好きな大好きなお姫様。子供の頃は本当にお転婆だったんだね。前世のリヴェリアさんから聞いてた通りだよ。

僕はアイズの頭を撫でる。

「んっ……。すー」

アイズはそれに少し反応したが、どうやら起きないようだ。

全く、そんなに無防備だと――

僕はアイズの耳元に顔を近づけると

「わるい男に食べられちゃうよ？」

「ッ!？」

そう呟くと、アイズは肩をビクツとさせた。

「ふふっ。やっぱり起きてたね。アイズ」

「むゝ。その声と殺気はズルくない？」

「起きない方が悪いよ」

アイズが言った通り、自分の声を少し変え、殺気を混ぜた。まあ、変えたと言っても、アルゴノウトの声に寄せただけだし、殺気だつて微量だ。

「むゝ。とりあえず、いつも通り訓練しよっか。でも、今日は庭でしょう。あくまで調整用の」

「そうだね」

僕はとりあえず、服が昨日のままだった為、着替えに行こうと部屋を出た。

ふゝ。アイズが復讐以外にも興味を持ってくれているのか、速く強くなるうとしても余裕がない感じはしない。

アイズの心は僕には推し測れないけど、きつと良い方ではあるだろう。

でも、例え、君が僕を知らなくても僕は君の英雄であり続ける。そして、それは決してあり得ない『幻想』だ。だって、君は――

僕が庭で体をほぐしていると、アイズがやってきた。

アイズの格好は白いワンピース姿。

そんな姿じゃ下着見えちゃうよ？

と思ったが、どうやら短パン履いてきているらしい。

それならワンピースじゃなくて良かったのでは？ と思ったが、女の子は複雑なの

だ。突っ込まない方が良い。

「じゃあ、始めよっか」

「そうだね」

ここで、僕のスキル『理想昇華』について少し話をしよう。このスキルは簡単に言えば、抱く理想に応じて自分の今まで燃やしてきた理想を変化させるスキル。例えば、魔法『ファイアボルト』があつたとしよう。速攻魔法でただ放つ魔法ではあるが、槍状と貫通力をイメージすれば、一点突破型のファイアボルトを放つ事ができる。他には、強さを望めば、火力が増す。『色』はーまだよく分からない。

とりあえず、そのスキルを使つて僕はアルゴノウトの時に使つていた『雷霆の剣』を短剣状にして、作り出した。

質量は減つていて、まさに理想通り。しっかり手に馴染む。

アイズは身の丈には合わない愛剣『デスペレート』を抜いた。

うくん。本当によくそれで動いているよなあ。僕には無理だ。

「? 新しい剣?」

「ん。そうだよ。新しいスキルを使つてみようと思つてね」

「そっか。……こつちから行くよ」

すると、アイズは僕の目の前にまで近づき、剣を突き出す。

僕はそれを横から短刀を当てて、軌道を逸らした。

アイズはそれを当然だと思つていたのか、すぐに剣を引き戻し、二突き目を放つ。

さつきより速い!

さつきとの緩急が激しい。だが、まだ追いつける。さつきと同じように短刀で弾きつつ、一気に肉薄する。

ここからはー速度と手数にものを言わせた攻撃を開始する。

僕は『雷霆の短刀』をことごとく繰り出し、アイズは身の丈に合わない長剣を素早く動かし、僕の攻撃を全て防御する。

だが、僕は攻撃をやめない。一瞬でもやめた時、形勢が逆転するのは目に見えている。しかし、アイズも大人しく防御するだけではない。防御と同時に攻撃を仕掛けていく。これが7歳児の戦闘技術なのはどうなんだ？

自分（5歳児）のことを棚に上げて、アイズと同じく高度な戦闘を続けるべし。

「んっ。流石だねべし」

「こっちは大変なだけだねー」



凄まじい剣戟を繰り広げるベルとアイズ。その戦いを2階から見守る人が居た。

「全く、朝からよく動くものだ」

「良いじゃない。子供は元気が一番よ」

「それはそうだが」

リヴェリアとメーテリアだった。

リヴェリアは二人の様子にため息を吐き、メーテリアはまあまあと言って、リヴェリアを宥める。

「とりあえず、二人には後でみつつつちり座学を開いてやる」

リヴェリアのその言葉に……

ビクッ

「今も庭で戦う二人が反応したのは言うまでもない。」

## 第十一話

何だか、この後の未来を悟ってしまったが、そんなものはポイツと捨てて、戦闘に集中する。

さて、どうするか。僕もアイズも攻撃と防御を同時に行なっているため、膠着状態に陥っている。

左肩、右脇腹、首、左足、胴、右腕。

アイズは身体の色んな場所をランダムに攻撃してくる。だが、視線、重心、狙う場所の関係性の無さから剣の動きを予測し、自分の短剣を合わせる。

普通なら、さらにフェイントを加えて、攻撃を複雑するものだが、当初の目的通り『調整』を意識しているからなのか、この状況から変わらない。

「アイズ？ どうしたの？」

「ん。『調整』が微妙。このまま続けても、少ししか調整出来なさそうだけど、これ以上力を出すと、庭がめちゃくちゃになっちゃう」

僕達は戦闘を続けながら、会話する。全く手を緩めずに。

アイズの懸念することは分かる。僕達ももうレベル3の冒険者だ。本気を出せば、庭が吹っ飛ぶ。まあ、魔法やスキルを使わなければ、なんとかなるかもしれないが。

「ここで終わる？」

「嫌、まだ戦っていたい。というより、この後来る『説教』から逃げたい」

「いや、長引いたら逆に怒られない？」

うん。絶対に怒られるネ。

「ここで止めておいた方が良いんじゃない？」

「うっ。そうだね」

そうして、僕達は『調整』を終えた。

それを見計らったかのように母さんと……笑顔でいっばいのリヴェリアさんが来た。

ひっ！ 怖い！ 笑顔なのに目元が暗い！

「えと、あの、お姉ちゃ「ん？」ナンデモナイデス」

「さて。お前達。覚悟はできているかな？」

「覚悟って言っても、私達悪いことはしてないもん」

「ちよっ!? アイズ!? その発言は火に油を注——「ほ——う? どうやら説教された

「いようだな？」ああ、もうダメか」

「どうやら、お説教コースに決まったようだ。アイズは分かっているようだが、リヴェリアさんが心配しているのは『技術』の高さと身体能力の高さのバランスだ。僕達は身体能力はレベル3であるが、『技術』に関しては多分だが、『武神』タケミカヅチ様のような神様は除いて、世界で最高峰と言っても良いだろう。つまりは、身体能力が技術に追いつかなくて、体に異常が出るのではと心配しているのだ。」

「ちなみにアイズの『調整』が上手くいかないのはそういった原因がある。だが、本人は全然気が付かない。」

「仕方ない。説教を通じても分からないようなら、僕から言っておこうか。そういうのは自分で気づくべきだと思うが、周りを心配させては元も子もない。」

「全く。ベルはしっかり理解しているようだからまだ良いが、アイズ、お前は全然理解していないようだな。座学を開いてやるから、こっちに来い！」

「やー！」

「はーい。アイズちゃん。逃げちゃダメよ？」

「リヴェリアの鬼気迫る様子にアイズは逃げようとするが、母さんに捕縛される。レベル3がレベル5二人に勝てないのは道理だ。」

「ベル！ 助けて」

「後でいくらでも慰めてあげるよ」

「ベルーーーーー!!!」

アイズは母と姉に連れて行かれた。

合掌。

私はリヴェリアとメーテリアさんに強制的に連行され、リヴェリアの座学部屋まで連行された。

私は椅子に座り、二人に聞いた。

「それで？ ベルに聞かれちゃまずい話でもあるの？」

「さっきの態度からは想像できない程の変わりようだな……まあ、良い。ベルについて聞きたいことがあつてな」

「ベルについて？ 何が聞きたいの？」

「ああ、ベルは何故あんなに『不安定』なんだ？」

『不安定』——何が不安定なのかと聞かれると答えるのはただ一つ。

『理想』と『幻想』の『迷走』だ。

全てを救う英雄という『理想』と私だけの英雄という『幻想』をベルは持っている。

それ即ち『矛盾』だ。人間らしいと言えば、人間らしいのだが、ベルのそれは度が過ぎてゐる。

ベルの記憶だけならばマシだった。幻想しか抱かなかつたはずだから。しかし、ベルはアルゴノウトの記憶も持っている。それが不味かった。アルゴノウトの全てを救いたいという『理想』が強く心に根付いてしまった。

それでベルの心は『不安定』になつてゐるのだ。

そういうことを二人に伝えた。

「つまり、ベルが記憶を取り戻した時点でこれは避けては通れない道だったわけか。それならそれで早く相談して欲しかったものだが……」

「無理。ベルは自覚してないし、私も『今』はどうしようもないと思っっているから」  
「『今』は……か。ちゃんと対策を考えているなら良い」

「ふふっ」

「?!」

メーテリアの微笑に私とリヴェリアの二人が首を傾げる。

「いえ、ごめんなさいね。二人の様子が本当の親子みたいだからね」

「そ、そうか？」

「ん。リヴェリアは私のもう一人のお母さんだから」

「ん!？」

「ふふっ。そうよね。ベルも私に遠慮なく色々話して欲しいわ」

ベルは私にどう甘えるべきか決めかねているようだからね。つとメーテリアさんは付け足した。

「大丈夫。少し時間はかかるけど、きっとベルはしっかり決断するはずだから」

「ええ、そうね。あっそうだ！もし、ベルがみんなの英雄になることを決断したらアイズちゃんはと思うの？」

ふと、思いついたようにメーテリアさんが私に聞いてきた。

ベルがみんなの英雄——『最後の英雄』を選択した時。私は——

「私はベルの隣にいる。ベルが例え、沢山の女の子を家族に迎えたとしても私はベルの一番であり続ける。だって、ベルのことが一番好きなのは私だから」

「ツ！　そうか。今のお前はとても良い笑顔をしている。お前はその調子でいろ」

「うん。あつ。リヴェリア」

「ん？　何だ？」

「リヴェリアは今、ベルの姉という立場だけど、別にベルと恋人関係になつても私は何も言わないよ？」

「なっ?!?　お、お前は、何を、言つて?!?」

私の言葉にリヴェリアの顔は真っ赤になる。やっぱり、長い年を生きても生娘にはキツイ話題だったかな？

「メーテリアさん」

「私も？　何かしら？」

「メーテリアさんはベルと血が繋がっているけど、不完全蘇生魔法と『英雄の試練』の効果でほぼ生娘同然に戻っているのは知ってますよね？」

「え、ええ。そうね。私もビックリしたけど、それがどうしたの？」

メーテリアさんは若干嫌な予感しながらも私に聞いてきた。つまり私が言いたいの  
は――



「ベルと子を作っても私は何も言いませんよ?」

「えっ!?! いやっ、あのっ、えっど!?!」

メーテリアさんが珍しく慌てている。口調も少し崩れている。してやったり。先程の仕返しだ。

アイズは悪い笑顔を浮かべ、二人はベルとの関係を妄想し、赤くなりながら、身体をクネクネしている。

アイズは二人を置いて、ベルの所に向かうのだった。

## 第十二話

今、僕は街を歩いている。

特に用がある訳でもなく、ただの散歩である。

『暗黒期』である現在。前世では、本当に闇に包まれていたようだ。

じゃあ、今は？

今はとても活気付いている。

その理由としては闇派閥の活動をしつかり抑えているからだ。

都市内は〈ロキ・ファミリア〉、〈フレイヤ・ファミリア〉、〈アストレア・ファミリア〉、〈ガネーシャ・ファミリア〉が。

都市外は〈アルテミス・ファミリア〉等のファミリアが。

皆がしつかりと手を取り、闇派閥を鎮圧しているのだ。

だが、同時に懸念事項がある。

こうして、闇派閥から守っているのは良いが。

それによって、神エレボスが想像以上の戦力の増強を図ってくる可能性がある。

正直、レベル7冒険者の『暴喰』のザルドと『静寂』のアルフィア以上の何かと言つたら、『神獣の触手』しか思いつかない。

うん。それ以上は本当にやめて欲しい。切実に。

僕は頭の中で想像を働かせながら、されど、顔には全く出さずに移動する。

すると、そうして歩いていている内に見慣れた廃教会の前に着いた。

ああ。とても懐かしいなあ。ここが僕とヘスティア様の最初の場所。

折角来たんだし、中を覗いてみようかな？ 手入れもしてなさそうだし、掃除もしようかな？

そして、僕は廃教会の扉を開けて、中に入った。

うん。結構埃被ってるし、椅子とか散乱している。地下室に入りたくても、これじゃどうしようもないな。

僕は苦笑しながら、スキル『幻想』と『理想昇華』で『炎の魔剣』を変化させて、『ゴミのみ焼却する炎の魔剣』を作った。

本当に便利だなこのスキル。

さて、僕は『掃除(笑)の魔剣』を構えて、魔力を操作し、加減を調整。そして、振り下ろす！

ゴオオオオオ!

魔劍から出た炎は廃教会の中身を燃やして、数秒後に発散させた魔力を魔劍に収束させた。

炎から現れたのは先程とは比べられないめっちゃ綺麗なった内装。

「うんうん。綺麗になった。便利すぎて若干僕も引くよ」

地下室も綺麗なっている。今更だけど、本当に僕は恵まれてるなあ。

さて、折角ここに来たんだし、本でも読もうかな。

そして、さっきの魔劍を消して、眼鏡と本を出した。

ちなみに眼鏡は伊達。目は悪くないんだけど、前世でも眼鏡かけて本読むことがあつ

たから、癖になっている。

本は冒険譚である。内容は『眷属の物語（ベル・クラネル）』。僕の前世のスキル『眷属冒険譚（メモリアフレーズ）』によって自動記録された本である。

暇があれば、こうやって本を読んでいる。

さて、今日は何を読もうかな？

私の名はアルフィア。へへら・ファミリアのレベル7冒険者で二つ名は『静寂』だ。今は特にすることがないため、妹ローメーテリアがお気に入りだった廃教会に向かっている。

オラリオを戦場にする前に訪れておこうと思った。

そして、廃教会？ に着いたのだが、これはどういうことだ。

廃教会だった筈のものがすっかり綺麗な新品同然の教会になっている。綺麗になりすぎて、周りから浮いているぐらいである。

いつの間に新しく建ったんだ？ というか、何故ここだけなんだ？

・・・中に人がいる気配がするが、別に嫌な気配ではない。寧ろ、どこか近しい感じがする。

色々疑問はあるが、とりあえず中に入る。

これは凄いな。外見からでも想像していたが、中も相当なものだ。

周りを見渡していると、最前列の席に座っている少年がいる。

一瞬、自分の目を信じられなかった。当たり前だろう。どうしてここに妹の子がーベルがいるのか私には全く分からなかった。

ベルは鼻歌を歌いながら、本を読んでいる。

5歳の少年の筈だが、本を読む様子は中々どうして様になっている。

すると、ベルはこちらに気づいたのか鼻歌を止め、本を閉じて、眼鏡を外し、こちらに向いた。

そして、口を開いた。

「どうも、お姉さん。いえ、貴方は僕のことを分かっているようですので、他人行儀は辞めましょう。……初めまして、アルフィアお義母さん」

ベルの口調は随分大人びている。というより、ベルが私の事をお義母さんと呼んでいい。いや、おばさんとは言われたくないのだから、良いのだが。

「やっぱりベル……なのか?」

「うん。そうだよ」

本人からは嘘の気配はしない。

ああ、私の心は歓喜に包まれている。ベルがどうしてここにいるのか。ベルの様子とかそんなのはどうでも良い。ベルがここにいるそれだけ良い。

「そうか。ベル・・・抱きついてても良いか?」

「え? うん。良いよ。はい」

ベルは私の急な提案に驚きながらも了承し、腕を広げた。

私はすぐにベルに抱きついた。

「ベル」

「うん。どうしたの?」

「ベルは冒険者なのか?」

「うん。そうだよ」

「ベルは英雄になりたいのか?」

「うん。なりたい」

「そうか、そうか」

ここにいた。英雄の器が。私の『失望』も『絶望』も全て消し去ってくれるような英雄の器が。

私はみつともなく甥に抱きついて静かに泣いた。

私が泣いている間、ベルはずっと私の頭を撫でてくれた。「よく頑張ったね」「僕はこ

「ここにいますよ」と声をかけながら。  
全く。この私を泣かせるのはメーテリアとお前だけだ。



## 第十三話

「えっと。落ち着いた？ アルフィアお義母さん」

「ああ、ありがとう。ベル」

アルフィアお義母さんは僕に抱きついたまま、僕の頬を撫でる。

とても心地良い。僕は思わず目を細めて自分から撫でられに行く。

アルフィアお義母さんは僕のその様子に微笑を浮かべると、僕を抱きしめて、立ち上がり椅子に座った。僕は対面座りでアルフィアお義母さんの膝に座る。

座る前にアルフィアお義母さんが着ていたローブを取っていたため、黒いドレスが現れた。

ええ、ここまで言えば、分かるでしょう？

僕の身長的に今、目の前にアルフィアお義母さんの胸がある。

ヤバイヤバイヤバイ！ 5歳だから体は反応しないけど！ それでも中身は歳取っているから！ 最近は精神が体に引つ張られているからか、簡単に反応してしまう！

すると、アルフィアお義母さんはそんな僕の状態を不思議に思ったのか、聞いてきた。

「どうした？ ベル。そんなに顔を赤くして」

「いや、えつと、ジツハデスネ・・・」

少年説明中・・・・・・・・

「・・・という訳なんです」

「なるほど。つまり、私の体に欲情していると？」

「してませんよ!?!」

何言ってるのお義母さん!?

「ふふっ。冗談だ。だが、恥ずかしいという割にはお前の手は私の体を離さないようだがな」

「・・・あまり虐めないで、お義母さん」

「お前が可愛いのが悪い」

「むう〜」

「よしよし」

アルフィアお義母さんは僕の頭を撫でる。そんな事しても許さないもん!

そんな意思に反して、僕の体はアルフィアお義母さんの愛を求めろのだから、精神がさらに幼くなっていると自覚せざるを得ない。

「良かった。メーテリアに続き、お前まで居なくなってしまうたら、私は壊れてしまうかもしれない」

この時の僕はあまり顔に出さずともアルフィアお義母さんに会えた事が嬉しかったのだろう。

普段なら絶対言わないような事を言ってしまうまでに。

「……お義母さんはやっぱり『そっち』に行っちゃうの?」

「……ああ、それが私の使命だからだ」

僕が何を言っても、もうお義母さん達は止まらない。

早い早い早い! まだ三年前なのに、『約束』が早い! お義母さん達と戦いたくない

のに! 一緒に居たいのに!

気づけば、僕の間からは涙が出ていた。

「やめて。やめて。僕のために世界から消えないで」

「すまないな。お前は優しい。その優しさからお前は私とザルドには剣を向けられないかもしれない。お前のその『迷い』はとても優しい。だが、お前は、お前だけは忘れてはならない。『理想』とは皆が持っているものだ。他ならないスキルに現れる程の

『理想』を抱えるお前はわかる筈だ」

「・・・うん」

「お前が持つ『理想』を叶えたいならば、私の『理想』を超えてみせろ」

「・・・」

「だが、気にする必要はない」

「え？」

「計画ではまだ三年もある。それまではいくらでも会えるさ」

「そう・・・だね」

分かつている。これは今のような状況ではなく、『敵』としてという事だ。

僕は決めかねている。まだ迷っている。自分の在り方を。

「目標はまだ定まっていない・・・か。焦るな。お前は確実に強くなる。私やメーターアの血を引いているんだ。弱いわけがない」

「ふふつ。自分でそれを言うの？」

「ああ、言うともさ。だから、立ち上がれベル・クラネル。自分を信じろ」

「もうっ。こういう時でも僕を強くさせようとするの？」

「当たり前だろう。へへラ・ファミリアだったら、そもそも、甘えも許されないからな」

「ひえっ！」

うくん。もしへゼウス・ファミリアやへヘラ・ファミリアが今もあつたら、僕は  
どうなっていたのだろうか？

ひたすら、団員達に打ちのめされる？

いや、そもそもどちらのファミリアに入るのだろうか？

「ふふっ。元気は出たか？」

「まあ、うん」

「そういえば、この後予定はあるのか？」

「えっ？ いや、無いけど」

「ならば、ここでお前の今までの冒険を聞かせてくれ。お前の英雄譚を聞きたい」

「うん。良いよ」

僕は『眷属の物語（ベル・クラネル）』を開いた。

これは、一人の少年が一人の少女のための『英雄』になるまでの話。

私はなんと幸福なのだろうか。

メーテリアを失い、病気が体を蝕んでいく時に、ベルが現れた。

聞けば、ベルは前世で『英雄王』と呼ばれ、あの「黒き終末」を乗り越えたとのことだ。

ああ、私達の犠牲は無駄ではなかった事を証明された。

そして、ベルは私の『絶望』を消し去る希望となってくれた。

もはや、私には憂いはない。

喜んで、この身を次代の英雄達の礎へと捧げよう。

ああでも、こうして会えたベルに別れを告げるのは心苦しい。

この子はとても優しい。例え、私が『悪』に身を墮としても、この子は私が死ねば、泣いてくれるだろう。苦しんでしまうだろう。

それは嫌だな。ベルの為に在りたくても、ベルを泣かせたいわけではない。

こうしてみると、別の生き方があったのではと思ってしまう。

考えれば考える程、私の決意は揺らいでいく。

それを考えるのを辞めなければならぬのに、どうしても考えてしまう。

ふっ。笑いたければ、笑えば良い。

この私でさえも、もし、ベルの前に立てば、決意は揺らぎ、ベルに手を出すことはできなくなるかもしれない。いや、きっと出来ないのだろうな。

本を開き、物語を語るこの少年はとても年相応で、輝いている。

この後の思考はもう、覚えていない。

もし、  
叶うのならば、  
私を救ってくれべし。





## 第十四話

アルフィアお義母さんに一通り話し終わり、もう帰る時間になった。

「お義母さん。また会いましょう」

「……ああ、そうだな」

「では」

僕は先に教会を出ようとした。

すると、お義母さんが僕の手を取った。

「どうしたの？」

「……いや、すまない。何でもないんだ」

何でもないような顔をしていない。

もしかして、寂しいのかな？

「はあ、全く。仕方のない人ですね。これをどうぞ」

「これは？」

僕は眼晶（オクルス）を加工したネックレスをあげた。効果は通常通り、通信型魔道具。

ただ、違うのは情報をオクルスを通じて、頭の中で交換するという点だ。それを説明したら、とても驚かれた。

「凄いな。こんな魔道具を作れるとは」

「作るとは言っても、既製品のオクルスをスキルを使って変化させただけだから、あまり凄くないんだけどね」

「いや、それでも凄いぞ」

「う、うん」

「とりあえず、これでベルと連絡を取れるのか？」

「まあね。僕にも都合があるから、絶対とは言えないけど」

「分かった。ありがとうベル」

アルフィアお義母さんは女神顔負けの笑顔を浮かべ、感謝してくれた。待つて待つて！ めっちゃ美しいから！ 耐性が下がってる僕には辛いから！

「こ、これで良いかな？」

「ああ、すまないな。引き止めてしまった」

「そう思うなら、『こっち』に来る？」

「うっ。いや。行かない」

めっちや揺らぎまくってるじゃん。

今ならさっきの仕返しできるか？

「ねえ、お義母さん。ちよつと顔こっちに近づけて」

「ん？ ああ」

お義母さんが膝を折って、僕に顔を近づけた。そして、僕はお義母さんの耳元でこう言った。

「お義母さんが『そっち』にいるならー」

ー僕がアルフィアをそこから奪ってみせるから。

「っっっ!?!?」

お義母さんは顔を真っ赤にして僕から離れた。

うんうん。美人なお義母さんが照れるのは可愛いね。

「じゃあね。お義母さん」

僕は今度こそ、教会から出た。

「あれは、ズルいぞ。ベル」

まだ、顔が赤い。さつきまでの子供なベルではなく、大人で男としての魅力を充分に纏っていた。

私は現役時代では、『才禍の怪物』などと恐れられていた。

そのためか、私に近づく男なんていなかった。（あのゼウスのような変態共は別として）

だから、私は男と関係を持ったこともなければ、興味も無かった。

そして、今、こうしてベルの男の魅力に当てられ、私の心は完全にベルに偏ってしまった。

色恋沙汰とは無関係であったため、一気に堕ちてしまった。

私は今、変な顔をしていないだろうか？

多分だが、これがかつての仲間を見られてしまえば、揶揄われるに違いない。神には「甥に惚れるのはヤバいな」とか言われそうだが、お前らが言うなと言いたい。

全く、ベルは誰にでもああやってるんじゃないだろうか？

あんな事されれば、大体の女性は簡単に堕ちるぞ。

それこそ神でさえもだ。

「あれで、一途だというのだからタチが悪い。前世では沢山の女を泣かせたのだろうな」

だが、今世はどうだろうか？

本人は一途のつもりだそうだが、それ以上に愛を欲する傾向が見られる。

神フレイヤ辺りが騒ぎそうだが、どうだかな。

とりあえずは良いだろう。私はベルの家族なのだ。私がずっとベルの側にいても何も言われないだろう。

着々と進むベルの家族ハーレム。

そして、今ここで言おう。

家族だからといって、血が繋がっている必要があるのか？

いや、無い！

ならば、家族が十人ぐらい増えたって問題ないだろう！

そうだろう！ みんな！

→誰に言ってるんだこいつは。

翌日ー

今日も今日とて、街を散歩中。

そしたら、今日はー

「フレイヤ様がお呼びだ。ついて来てもらおう」

・・・『猛者』オツタルさんに会っちゃった。

「まあ、良いですけど。どこに行くんですか？」

『戦いの野（フオールクフアング）』だ」

「うえっ!？」

何で、そっち!？ 嫌な予感しかないんだけど。

僕はオツタルさんについて行き、ヘフレイヤ・ファミアの本拠地『戦いの野（フオールクフアング）』の館に着いた。そして、フレイヤ様の自室に着き、オツタルさんは扉をノックし、報告した。



「ベル・クラネルを連れて参りました」

「ありがとう。オツタル。中に入って良いわよ」

「失礼します」

「し、失礼します」

一応礼儀として、僕も一声かけながら中に入った。

「よく来てくれたわね。ベル」

「まあ、暇だったので。あと、『魅了』を使うのやめて下さい」

僕がフレイヤ様にそう言うと、フレイヤ様は頬を膨らませて、

「・・・本当に効かないのね」

フレイヤ様は会う度に僕に『魅了』をかけてくる。最初から効かないと言っているのに全く止める気配がない。

「まあ、別に良いわ。私が言いたいのはこの前、貴方が私に向かってしたことよ」

この前というと、あれかな。酔わせたやつ。

「いや、いくら何でも、あれは見過ぎです。あれで止めなかったらダンジョンの中まで見る気だったでしょう?」

「・・・そんな事無いわよ」

「そう言うなら、こっちを見て言ってください」

フレイヤ様は僕の問いに顔を背けて答える。

うん。嘘ですね。僕でも分かる。

「今まで通りであれば、気になりませんでした。あれはダメです。普通に身体中に悪寒が走りました」

「む〜」

「そんな顔してもダメです」

フレイヤ様は何というか外見と中身が一致してない。外見は美しい美女なのに中身はまるつきり少女である。

「見るだけが嫌なら、暇があれば、こうしてお話もしますし」

「・・・本当に？」

「貴方、神ですから嘘なら分かるでしょう？」

「そうね」

「どうか、暇ならば、『姿』を変えて、街に出てみては？」

「何故、貴方がそれを知っているのかはさて置き、それは良い案ね」

・・・後ろでオツタルさんがギョツとする気配を感じる。

諦めてください。どうせ、この柱はやりませぬ。

「そうねえ。ミアの酒場の店員になろうかしら？　その前に変える『姿』を見つけないとね」

何だかごめんなさい。シルさん。ヘルンさん。

今はまだ会ってない二人に謝る。

「今日は良い事を聞けたわ。ありがとうベル」

「ええ、まあ。それなら良かったです」

フレイヤ様がとても楽しそうだ。これからフレイヤ様に関わる人には頑張ってもらおう。僕は知らない。

## 第十五話

どうしてこうなった……。

「「「兔野郎に目にももの見せてやれー!」」」

「「「フレイヤ様の興味をぶんどって行く兔に慈悲は無い!」」」

「「「「兔死すべし!!」」」」

どうしてこうなった……。 (二回目)

確か、フレイヤ様の用が終わって、帰ろうとしたら、へフレイヤ・ファミリアの団員達がめっちゃ怖い形相で僕を見ていた。

すると、レベル5の冒険者『女神の戦車(ヴァナ・フレイヤ)』のアレン・フロームルが『模擬戦』の提案をして来た。

正直、意外だった。この『戦いの野(フォールクファング)』では日夜団員達の殺し合いが繰り返されて、幹部のアレンさんが殺し合いではなく、『模擬戦』を提案して来た。いや、まあ、殺し合いを提案されても困るのだけど。

それを聞いた他の団員達が乗ってきて、このような状況になっている。

本当にどうしてこうなった……。(三回目)

大丈夫かなあ。これ、派閥抗争にならないかなあ。

その辺を考慮をして、『模擬戦』になっているのだけど。

「始めるぞ。兎野郎」

「あつ、はい。よろしくお願いします」

アレンさんは槍を構え、僕は短剣状態にした『雷霆の剣』と『炎の魔剣』を構えた。

この『戦いの野（フォールクフアング）』に始まりの合図は無い。

よって、僕が先に動いた。

姿勢を低くし、右足で地面を蹴り、一気に近づく。その速さのまま、『雷霆の剣』を振るい、雷を放つ。

攻撃は止めない。レベル3如きの魔力を乗せた力なんてレベル5に敵うわけがない。

続いて、『炎の魔剣』を振るう。炎が放たれるが、アレンさんは槍で切り裂き、僕に近づく。

僕は短剣でアレンさんは槍。得物のリーチが違く、その上、アレンさんは僕よりも速い。だから、槍を掻い潜りアレンさんの体の近くで戦わなければならぬ。

「シッ！」

「ッ！」

アレンさんが槍で激しい突きを繰り返す。

速い。僕の動体視力はもはや、アレンさんの槍を捉えていない。

『だが』、体は勝手に動く。『雷霆の剣』を逆手持ちにし、槍の刃の横腹に当て、受け流す。そのまま、『炎の魔剣』を振るうも槍で防御された。

そして、僕は距離を取り、魔法を撃とうとすると、アレンさんが話しかけて来た。

「おい。兔野郎。今のは何だ？」

「今の、とは？」

「惚けるな。さっきの俺の槍を受け流した時のやつだ。レベル3の動体視力じゃ、間に合わないはずだ。何故反応できた？」

「と言われましても、『僕の頭』は反応できてないんですよ。『身体』が勝手に反応しただけで」

「ちっ！ 化け物が」

貴方に言われたくない。貴方今、16歳の筈ですよねえ！ 何でそんなに強いんですか!?

と、悪態をつくアレンさんにももの申したい僕。

だが、現実是非情。そんな事を言う暇を与えてくれない。

アレンさんは引き続き、攻撃を繰り返す。

よく分からない会話のせいで魔法を放てなかった僕は思考を別に移行させ、防御と回避は反射で行う事にした。

さて、どうするか。僕の攻撃の殆どはアレンさんに効かない。さつき放とうとした魔法も決定打にはなり得ない。『オールフォース』か？ いや、『オールフォース』でも多分届かない。『英雄願望（アルゴノウト）』か？ いや、できなくはないが、どの程度溜めるべきか。

うーん。やっぱり、別のが良いかな。

『オールフォース』を一点に集中させ、『英雄願望（アルゴノウト）』の1秒蓄力（チャージ）で充分かな？

とりあえず、やってみよう。ダメだったら、別の作戦を考える。

そして、思考を戻すと、アレンさんが全然当たらないことに痺れを切らしたのか、今まで最速の攻撃を繰り返した。

待つて待つて！ 短気すぎでしょこの人！

だが、丁度いい。その攻撃を真つ向から防御し、わざと飛ばされる。

「『オールフォース』」

魔法を唱え、『雷霆の剣』に全属性付与をする。

『英雄願望（アルゴノウト）』の引鉄（トリガー）、思い浮かべる憧憬の存在は——『前

世の英雄王（ベル・クラネル）』

前世において、ただ一人の少女の為に「隻眼の黒竜」を討った少年。勝利の大鐘楼を鳴らし、『英雄の一撃』をもって、世界に平和を齎した『最後の英雄』。

僕は今も、『存在しない幻想』を走り続けている。決して、届くことは無いと知りながら。かつて持っていた『理想』を捨てた僕には何も見えていない事をこの時の僕は何も理解していない。

リン。

音が一度鳴る。

『英雄願望（アルゴノウト）』の1秒蓄力（チャージ）。

相手を傷付けない一撃。しかし、確かな『勝利の一撃』。

僕はその一撃を持って、アレンさんに向かった。



フレイヤ・ファミリアの団員達はいつの間にか、息をする事を忘れていた。あの『勇者』も含めて。

兔ーベル・クラネルの圧倒的な戦闘技術。

ついこの間にレベル3に上がったと聞いたベル・クラネルがレベル5と互角の戦いを繰り広げている。

それを可能にしているのは『技』と『駆け引き』ーそして、『覚悟』。

レベルが二つ上の相手にすら物怖じしない胆力。それが『技』と『駆け引き』を最大限に活かしている。

悔しい。

幹部以外の団員達は思った。

あんなに小さい子供が自身より強大な敵と戦っている。

対して、自分達はどうだ？

同レベルの相手と戦って満足しているのか？

己より上との戦いを避けて？

それが自分達の『覚悟』だということのか？

否！ 断じて否！ フレイヤ様に捧げた忠誠はそんな弱いものではない！  
彼らは更なる強い『覚悟』を抱き、強くなる事を決意した。

一方、幹部は

苛立ち、悔しき、そして納得という心だった。

最初は「何故、あの少年が」という心情だった。

しかし、この光景を見せられて、思う。

とても眩しいと。

もしかしたら、フレイヤ様はこれを見たのかもしれないと。

新たな『可能性』。

自分達はどこか慢心していたのではないか？

第一級冒険者となり、幹部にもなり、甘えていたのではないか？

そんな事で、フレイヤ様の愛を頂けるわけないだろう！

同時にアレンがそれを分かっている、ベル・クラネルに模擬戦を申し込んでいたのではないかと思う。

思えば、アレンは最初からベル・クラネルを怨敵としてはいなかった。どちらかと言えば、好敵手に近い感じだった。

レベルが下でも、その実力を評価し、その上でベル・クラネルに追いつかれないように自身を鍛え上げていた。

だからこそ、アレンは現状、オツタルの次に強く、副団長になっているのだろうと改めて思った。

リン。

たった一度の鐘の音。それでも確かにその音が聞こえた。

その瞬間、全ての者がベル・クラネルの方へ向き、驚愕した。

5歳の小さな少年が今、この時、確かに肉体的な『成長』をしていたように見えた。

見た目は16歳辺りだろうか？ いや、錯覚だ。自分達の目の前には5歳の少年がいるようにしか見えない。

その筈なのに、ベル・クラネルの纏う雰囲気は自分達の目を錯覚させる。

そして、ベル・クラネルは走り出した。

確かな『一撃』を持って。

「ハアアアアアアア!!」

「チッ! この一撃はやべエ!」

だが、避けるわけにはいかない。

それは目の前の『男』の『覚悟』に泥を塗る事だからだ。

だから、俺は槍を深く構え、史上最速の動きをもって、激突した。

「ハアアアアアア!!」

白く輝く剣と銀色の軌跡を描く槍が衝突した。



## 第十六話

「う、うーん」

僕は目が覚めた。ここは・・・僕の部屋かな？

確か、アレンさんと戦って、それで・・・

「ハアアアアアアアア！」

最後、僕の剣とアレンさんの槍がぶつかって、僕が押し負けたのか。

ハア。アレンさん強すぎないか？ この時点で前世で初めて会った時と同じくらい強くなっている気がする。

正直、『英雄王』としては歓迎するのだけど、僕としては悔しいかな。

・・・あの人の英雄であり続けると決めた時にもう負けないつもりでいたのに。どこかで気が緩んでいたのかな？

まあ良いかな。悔しい事は間違い無いけど、もう一度、僕が強くなる理由を確認でき

たのだから。前向きに行こう。

そして、僕が身体を起こそうとすると、どうやら僕のベッドに身体を預けて寝ている人がいるようだ。しかも、一人じゃ無い。

えっと、アイズ、リヴェリアさん、お母さん。

わあ。家族大集合。

とりあえず、三人起こさない僕も起き上がれないし、

「三人とも『起きて』」

「「ッ!?!」」

僕のちよつとした声に三人が飛び起きた。

リヴェリアさんが肩で息をしながら、僕に話しかける。

「べ、ベル。起きたのか。というか、起こすならもう少し、真つ当な起こし方にしてく

れ。心臓に悪いぞ」

お母さんにも、

「そ、そうよ!?! いくら何でも、それはやめてほしいわ」

しかし、アイズは

「ベル、今度それで寝かし付けて」

と要求してくる。

するわけないでしょ。

僕がやったのは『音』を通じて相手の精神に直接影響を与えた。影響といっても、軽く『夢見』を良くしようとさせたただけだ。

下層、深層に行くような人ならば、敏感に反応する。

アイズは、どうなんだろうなあ。

アイズはたまに何考えているか分からない。だから、本気か冗談かあまり判別できない。

すると、リヴェリアさんが口を開いた。

「全く。心配したぞ。いきなり、あの『女神の戦車』<sup>ヴァーナ・フレイヤ</sup>が寝ているお前を背負ってここま  
で運んできたのだからな」

あの人本当に世話焼きだよなあ。

「事情を聞けば、『女神の戦車』<sup>ヴァーナ・フレイヤ</sup>と模擬戦をしたのだろうか。良く無事だったな。……  
無事じゃなかったら、『フレイヤ・ファミリア』を滅ぼしに行っていたが」

ヤッバイ。めっちゃ怒ってる。

「そうねえ。その時は私も行くわ。私の子を傷付けた罪は重いわよ」

怖い！ 具体的に言うとうと、前世でレベル4の時にリユーさんと深層探索した時くらい  
怖い！



「ベル。よしよし」

アイズは平常運転。僕の頭を撫でている。

「アイズは普通なんだね」

「ん。私はアレンさんがずるいと思う」

「ず、ずるい?」

あれ? 何だか雲行きが怪しいな?

「私も全力のベルと戦いたい」

「いや、あのね? 模擬戦だから、言うほど、全力じゃないっていうか」

「でも、スキル使ったんでしょ」

「ぐつ、何故それを」

「アレンさんが自慢してきた」

アレンさああああん?!?!? 何故言ったんですか?!? こうなる事が目に見えているで

しように!

はっ! まさか! あの時の攻撃が手加減していた事がバレた!? だから、その仕返

しにこれを!?

それに気づいた瞬間、どこかで黒い猫キヤットピロー人がニヤつとした気がする。

「だから、「フレイヤ・ファミリア」に行く前に全力のベルと戦って、自慢しに行く」

動機がシヨボ過ぎる！

かなりの子供染みた目的を話すアイズ。(実際子供だが)

「落ち着いて。この通り、僕は無事だし、模擬戦を受けたのは僕の意思だし、アレンさんが勘違いしているだけだから」

僕は三人を宥めるのにかなりの時間を要した。

「・・・ということがありまして」

「ははっ。それだけ二人はベルのことが心配だったということだよ。アイズは・・・また違うけどね」

「ベルたんはホンマに無茶を平気でするんやな」

三人を宥め終えた後、フィンさんとロキ様にも話しに行った。

「そんじゃ、ベルたん。ステイタス更新しよつか」

「あつはい。お願いします」

アイズやアレンさんとの模擬戦を通して経験値エクセリアが大量に溜まっているため、ステイタ

ス更新をすることになった。

いつも通り、背中でステイタス更新を感じながら、僕はこの後の事を考えていく。

どうするべきか。一番気にしなければならないのは二年後の『死の七日間』だ。

だが、他にもある。神タナトスによるワイヴァーンの事件。イシユタル・ファミリア

もあつた筈だ。

これらは全て潰す必要がある。神タナトスの件についてはちよつとヘルメス様に用

がある。

深い思考に行きそうになった時、ロキ様がステイタス更新が終わって、僕に情報を見

せてきた。

ベル・クラネル L v. 3

『力』 I O ↓ D 5 4 6

『耐久』 I O ↓ E 4 8 6

『器用』 I O ↓ E 4 9 3

『敏捷』 I O ↓ D 5 8 7

『魔力』 I O ↓ E 4 5 2

幸運 G 純粹 H

《魔法》

【

《スキル》

【理想】

- ・早熟する
- ・理想を強く想う程、効果上昇
- ・想いは伝播する。

【幻想】

- ・【理想】が限界へと至った時発動
- ・古き理想が燃えて、新しき理想が生まれる
- ・燃やされた理想は使用可能

【理想昇華】

- ・燃やされた理想を理想の形に応じて変化
- ・燃やされた理想を理想の質に応じて強化
- ・燃やされた理想を理想の色に応じて昇華

「アビリティが軒並み上がりましたね」

「そんなレベルやないで……。頭がおかしなで」

「これはすごいね。僕も負けてられないよ」

ロキ様が頭を押さえ、フィンさんは驚きながらも、更なる強さを求める決意をしたようだ。

僕ももつと強くならなくちゃ。

そして、舞台は二年後へと移る。

ベルとアイズはレベル5冒険者に。

フィンさん、リヴェリアさん、ガレスさんはレベル6冒険者に。

アストレア・ファミリア大体がレベル4冒険者に、リユースさん、アリーゼさん、輝夜

さんはレベル5冒険者に。

フレイヤ・ファミリアの幹部はレベル6冒険者に。

オツタルさんはレベル7冒険者に。

そして、アルフィアさん、ザルドさんはレベル8冒険者に。

『死の七日間』は正史よりも更なる激化を遂げ、それは後に『英雄達の晚宴会』と呼ばれる。

## 第十七話

舞台は整った。

これはもはや、『悲劇』でも『惨劇』でもない。

何処にでもあるような『喜劇』。

しかし、ただ一人の少年にとってはここが一番の『正念場』である。

さあ、新たなる英雄の冒険を見に行こう。

その幕が下がるまで・・・

僕は今、『黄昏の館』の食堂にいる。

ええ、現在朝食を食べています。

ちなみにアイズと食べています。

ええ、だからどうした、と？

どうして、そんな喋り方なのか、と？

ええ、簡単に言えば、現実逃避です。

この状況からの・・・！

アイズはパンをちぎって、僕の口元に出してくる。ある言葉と共に。

「あーん」

ええ、あーんをしてくるんです。

えっ？ 羨ましいって？



知った事じゃないです。時々なら良いかもしれないし、僕も良いと思うんだけど。毎日  
はキツ過ぎる！

そう思つて、アイズに止めるように言ったのだけど。

「やだ」

の一点張りだった。

それをさも当然かのように言うのだから、止めるのも面倒になつてしまうものである。

「ベル？ 食べないの？」

「タベマス」

僕は大人しく口を開け、パンを口に頬張る。

「おいしい？」

「オイシイ」

ただのパンに何言つてんだ？

ちなみにだが、僕とアイズは付き合つてるわけではない。うん。その筈なんだが、これは何だ？

依存？ だが、不安定感はないし、瞳に昏くない。

ちよつとどうしようかな？ この前、リヴェリアさんに相談したら、「しばらくの間だ

けだ。大人しく受け入れてやれ」と言われてしまった。

・・・そう言われてから、地味に一ヶ月経っているのだが・・・。

僕は周りを見ると、他の団員達は一斉に顔を背ける。

ちよっ!? 助けて! 本当に!

そのまま僕はアイズにあーんをされ続け、今日の朝食を終えた。

「・・・お疲れ様。ベル」

「はい。フィンさーん」

「あー。よしよし」

僕はフィンさんに抱きつく、フィンさんは抱きついた僕を苦笑しながら、頭を撫でる。

「アイズは何処に行ったんだい?」

「・・・リヴェリアお姉ちゃんに連れてかれた」

「(流星に無視できなかつたんだらうね)」

「どうしたんですか? フィンさん?」

「いや。何でもないよ」

すると、執務室の扉が開き、お母さんが入ってきた。

「そろそろ時間よ？ もう少しで『敵』が来るわよ？」

「あい。頑張る」

「ああ、行っておいで。ベル」

「はい」

僕はスキル『幻想』を使い、武器と防具を整えた。

腰には短剣状の『雷霆の剣』と『炎の魔剣』。

防具は黒竜の素材で作られた服や外套。鎧ではなくても、黒竜の素材で作られているから、とても頑丈である。

「それでは、行ってきます」

ここはオラリオにある魔石工場の一つ。

闇派閥イヴイルスを誘い込むための『ダミー』である。

言うなれば、『Gホイホイ』である。

「くそっ！ 撤退だ！」

『目的の物』は手に入れた！ 全員散開！ 一つでも多く、持ち帰るのだ！」

「全員、逃がすつもりはない。一人残らずお縄についてもらおう」

「くっ！」

『英雄願望』アルゴノット

自分の足にスキルを使い、一気に加速する。

闇派閥イヴイルスの構成員の群れに突っ込み、一人ずつ確実に手刀で意識を刈って行く。

そして、数分後には誘い込まれた闇派閥イヴァイルスの構成員は全員、地に伏していた。

そこに遅れて、「ガネーシャ・ファミリア」がやって来た。

その中から、「ガネーシャ・ファミリア」の団長の【象神の杖】アンクローシャ シャクテイさんが現れて、僕に話しかけて来た。

「凄いな。私達もそれなりに急いで来た筈なのだが」

「とりあえず、全員気絶させておきました。捕縛をお願いします」

「ああ、任された。捕縛を急げ！ 付近の調査と警戒を怠るな！」

「「「はっ！」」」

【ガネーシャ・ファミリア】の団員達はシャクテイさんの指示に従い、速やかに動き出した。

「ありがとう。ベル。面倒事を押し付けてしまって、本来ならば、君のような子供に任せるべきではないのだが」

「いえ、これも『作戦』の内ですから」

「・・・【勇者】ブレイクの『作戦』という事か。【ロキ・ファミリア】の幹部のお気に入りである君を差し向けるという事はそれだけ、問題はないという事か」

「？ 何ですか？ お気に入りって」

「ん？ 知らないのか？ 君は大体、【ロキ・ファミリア】の幹部達と行動していると

「いう噂があつてな。それが、そういう風になつたという事だ。私もその様子は見たし、事実だと思つていたのだが……」

「初めて聞いたのだが。いつの間にそんな噂が出たんだ？」

「まあ、今は良いでしょう。シャクティさん。今までの襲われた工場で『アレ』は無くなつていましたか？」

「……ああ、君の予想通り、『魔石の撃鉄装置』が無くなつていた。今、調べさせているが、この工場でも同様の物が無くなつていいるだろう」

「なるほど。やつぱり」

「『確実に闇派閥イウイリスの下つ端構成員は困

更に考察を続けていく。

「僕が気配を掴めないという事は何らかの魔法かスキルによつて姿を消している」

「下つ端ではないという事はそれなりの実力者。痕跡が無いことが逆にその者の実力を表している」

「つまり、体術の『技』を磨いている者」

「レベル5以上は確実だ」

「こつちの『策』に乗つて、下つ端が成功しようが、失敗しようが、関係無い。迷いなく捨て駒にするあたり、本当に闇派閥イウイリスらしい」

「ちよつとちよつと二人とも!」

僕とシャクテイさんで考察していると、後ろからシャクテイさんの妹——【象神ウイヤールサの詩】  
アーデイさんが止めて来た。

「お姉ちゃん。気絶していた闇派閥イツイルスの構成員は全員捕縛完了したよ」

「アーデイ。ここにはベルしか居ないから良いが、あまり他の者がいる場でそう呼ぶ  
など言つた筈だろう」

僕は良いの？

「アーデイさん。こんにちは」

「うん。ベル君こんにちは。お疲れ様」

「はい。ありがとうございます」

「うんうん。ベル君はしっかりしてるね。よしよし」

アーデイさんに会つたのは二年前。「アストレア・ファミリア」の紹介で。

そして、アーデイさんは僕の頭を撫でながら、尋ねる。

「ベル君はこれからどうするの?」

「そうですね、少し寄りたいたところがあるので、そこに行つてから、本拠地ホームに帰ること  
にします」

「そつか。ベル君なら心配無いかもしれないけど、まだ闇派閥イツイルスが潜んでいるかもしれ

ないから、あまり遅くまで外出してちやダメだよ?」

「はい。心配してくれてありがとうございます」

「うん。じゃあ、早く行って来なさい」

「では、また会いましょう」

「うん。バイバーイ!」

僕はアーティさんとシャクティさんと別れ、しばらくして路地裏に入った。そこで、

「やあ、初めまして、君がベル・クラネルで合ってるかい?」  
神エレンと会った。



## 第十八話

「やあ、初めまして、君がベル・クラネルで合ってるかい？」

仕事が終わって、路地裏に入ると、そこで神エレンと会った。

神エレンは神エレボスの偽名なのだが、本人が纏う雰囲気はヘルメス様みたいな軽薄なため、今は神エレンとしているのだろうと思う。

「その通りですよ。神エレン。何か御用ですか？」

「おや？ 俺の事を知っているのかい？ それは嬉しいなあ。用ってほどのものは無いよ。ただ、君に興味があつてね」

「なるほど。奇遇ですね。丁度、僕も会えたら良いなと思つていたんですよ」

「へえ。そうなのかい？ それは良かった」

僕と神エレンは互いに微笑を浮かべる。

第三者から見たら、二人とも真つ黒だというに違いないだろう。

「では、先にそちらの方の用件を聞きましょう」

「ありがとう。では、ベル・クラネル。君に聞きたい事がある」

「それは？」

「『正義』とは何か」

「なるほど。リユーさんが聞かれたら、答えにくそうな質問ですね」

「そうだね。さつき、リユーちゃんに聞いて来たよ」

「手が早いですね。．．．そして、僕がどう思うか．．．ですか」

「最初はそうしようと思っただけけど、やっぱりやめた。今の君に聞いてもはぐらかされそう。だから、せめてこれだけは聞こう。君は『正義』について明確な答えは出ているかい？」

その問いに僕はこう答えた。

「出ていません」

「やっぱりそうか」

僕の答えに神エレンはクツクツクツと笑う。

「君から『嘘』が見えない。参ったな。ちよつと、警戒心高すぎない？」

「普通では？」

「いやいや、神相手に嘘をつけるのは中々に凄い事だよ。おそらく、君にしかできないんじゃないかなあ」

「ふふつ。それはどうでしょうか？ 少なくとも、僕は一人知っていますよ」

「いやゝ。これだから、下界は面白い。とびっきりの『未知』が詰まっている」  
「質問は終わりですか？」

「ああ、すまない。これで終わりだよ。さて、次は君の用件を聞いてみようじゃないか」

「では、神エレンではなく、神エレボスに聞きます」

僕がそう言うと、神エレンーいや、神エレボスは僅かに目を開く。

「ほう？ 俺に聞きたいことか？ もしや、『二人』のことか？」

「ええ。最近どうなのかな？ と思ひまして」

アルフィアお義母さんとザルド叔父さんの事だ。本人からレベル8になった事は聞いたが、やつぱりここは保護者神からも聞いておくべきだろう。

「二人とも元氣すぎるぐらい元氣だ。それはお前もよく分かっていることだろう？」

「まあ、そうなんですけどね。アルフィアお義母さんなんて、ある時から、凄く楽しそうでしたから」

すると、神エレボスはニヤニヤしながら、聞いてくる。

「ほほゝう？ アルフィアのことを『お義母さん』ねゝ。『叔母さん』とは呼ばないのか？」

「そこら辺は女性にとっては非常にデリケートな部分ですよ？ ザルドさんなんて結

構怒りを買っちゃっているんじゃないですか？」

僕その言葉に神エレボスは遠い目をしながら、

「ああ。そうだな。俺達がお前とアルフィアが密会していることを知った時、ザルドが『お前……。自分の甥に『叔母さん』じゃなくて『お義母さん』と呼ばせているのか？』って言った時、アルフィアが『福音』！』って魔法でぶっ飛ばしていたからな。何故か、俺も巻き込まれたが」

と言っていた。それはご愁傷様です。でも、大丈夫です！ どつかの物語では僕のお爺ちゃんが吹っ飛んでいるので！

と、何のフォローにもならないことを心の中で言い、僕はそのことに笑って満足した。

「ありがとうございます。おかげで、楽しみが増えました」

「それは良かった。しかし、良いのか？ 俺の正体を誰かに伝えなくて」

この神は分かかって言っている。

もはや、これは完全なる『喜劇』。

舞台の脚本は神の手から離れた。

これはただの『茶番』になり下がった。

でも、それで良い。

皆が苦しむ物語は必要ない。

皆が笑う。そんな物語がきつと良い筈だから。  
だから、僕は笑いながら言うのさ。

「必要ないですから」と。

そのまま、神エレボスと別れ、僕は『星屑の庭』に向かった。  
リユーさんと話をするためである。

本来のお話ならば、ここでリユーさんは自らの『正義』を疑い始める。

そのまま、度重なる絶望で一時的に『正義』は失墜する。

しかし、最後、明確ではなくても、答えを出し、『正義』をもって、『悪』を討った。

そんな物語も良いかもしれない。しかし、僕はそれを許すつもりはない。

そこから、生まれるのは『普通の英雄』だ。

普通の英雄ではマイナスがゼロになっただけ、それでは意味がない。

求めるのは『前世の自分新たな英雄』。

立ち上がれ、決して現実に妥協するな。

選択肢が無いなら、増やしてみろ。

不可能ならば、可能にしてみろ。

偽善を善にしてみろ。

それを成し遂げた者が『????????』の素質がある。

ん？ 何だか今、変なノ????????イズが混じったような？

いや、気にする必要はないか。

僕は世界を守る事はできない。

だから、他人に任せる。

僕はアイズの英雄だ。

だから、他人の英雄にはなれないし、なるつもりはない。

だが、何故だろうか？ それでも、魂の奥底で違う輝きを放つものがある。  
これは何なのだろうか？

## 第十九話

僕は『星屑の庭』に着き、お母さんが迎えてくれた。

「あら？ ベル。仕事は終わったのかしら？」

「うん。あとは「ガネーシャ・ファミリア」に任せてる」

「そう。お疲れ様。上がる？」

「そうする」

リビングに来ると、露骨に落ち込んでいるリユースさんがいた。

アストレア様がどうすれば良いのか分からず、あわあわしている。

可愛い・・・じゃなくて、この状況をどうにかしないと。

「リユースさん」

「・・・ああ、ベル・・・すみません。こんな姿を見せてしまつて」

「いえ、大丈夫です。それより何があつたんですか？」

僕はこうなつた原因を知っているのに、何も知らないかのように振る舞っている。昔



は嘘をつくのが苦手だった。でも、神の相手をしているだけで、対策は『できてしまった』。

スキル『幻想』はそういった副次的効果がある。

それはまさに『幻想』という名の通り、『思い込み』。

事実が正誤関わらず、思い込みをすれば、『嘘』にはならない。

いわば、神の目を誤魔化すスキルでもある。

自分は決して神の人形ではないという意味表示だ。

いや、そんな事はどうでも良いか。

今はリューさんのことを考えなければならぬ。

「……」

「……話し辛い事ですか？」

「……すみません」

「謝らないでください。話した方が楽な事もありますが、無理して話す必要はありません」

僕はリューさんを安心させるために、リューさんの横に座り、頭を撫でる。リューさんはビクツとしたが、拒む様子は無いし、周りから止めるような行動も無い。その状態で話すことにした。

「大丈夫です。例え、何も話さなくても僕達は貴方の味方です。だから、安心して下さい」

その言葉にリューさんは僕の撫でてない方の手をそつと掴んだ。その手はとても冷たく、震えていた。だから、その手を僕の頬まで持つていき、確かな温もりをその手に与えた。

リューさんは少しずつ話し始める。

「貴方の手は……とても温かい。貴方と初めて会った時を思い出します」

僕とリューさんが初めて会った時——

あれは僕がお母さんを「アストレア・ファミリア」へと預けた日のことだ。

お母さんが『英雄の試練』を乗り越え、無事に生き返り、前世でお母さんとアストレア様が友人だったと聞いていたため、「アストレア・ファミリア」の方が良いと考えたのだ。……お母さんと離れるのは非常に心苦しかったが。

今にして思えば、もう心が身体に引つ張られていたのかもしれない。

そんな事はどうでも良いか。

とにかく、その件で「アストレア・ファミリア」の所に行った時のことだ。

お母さんがアストレア様と話している時、暇になった僕は帰るべきかと思っていた頃。

アリーゼさん達が話しかけて来た。詳しく言えば、アリーゼさんとリユーさんと輝夜さんの三人だ。

アリーゼさんは僕を抱え、頭を撫でていて、輝夜さんは僕の頬をツンツンと突っついてた。リユーさんは混ざりたい気持ちと止めなければならぬ気持ちの板挟みで困っていた様子がとても可愛らしかった。

しかし、どうやら止める方に気持ち傾き、エルフの潔癖症なんてなかった事のように僕をアリーゼさん達から奪った。

アリーゼさん達があつとした感じで見えていたが、肝心のリユーさんは頭に？を浮かべていた。僕も気づき、「あのっ、あのっ」と声に出すが、リユーさんは「落ちたら危ないですよ。大人しくしてください」と言った。

アリーゼさんは「リオン？ その子抱えているけど、大丈夫なの？」と聞いていたが、変わらずリユーさんは「大丈夫とは何ですか？」と小首を傾げていた。それに輝夜さんは「お前。かなりの潔癖症の筈だろ。その少年に触るのは大丈夫なのか？」と聞き、リユーさんはやつと気づいたのか、「そういえばそうですね。改めて言われてみると、全然不快では無い。むしろ、とても温かくて心地が良い」と答え、さらに僕を抱きしめた。ええ、もちろんのこと、他の団員は「あのリオンが!？」や「もしかして、神々の言う『シヨタコン』？」とか言っていた。後半は無いと信じたい。

まあ、そんなことがあったのだ。

そのため、リユーさんは事あるごとに僕に接触したがる。過度な事はしないが、それでも抱きついてくる。まあ、僕は子供で、全然気にしていなかったし、前世でも似たようなことあったし。

思わず僕も思い返したが、こうしてみると、中々におかしいものだ。

そして、今の現状も。リユーさんは触れている相手の心ーというより本質に近いかもしれないがーによつて反応が変わる。下心があったり、普通の人であつても、拒絶してしまいうらしい。……この時点で殆どの男性は彼女に触れられないよなあ。

逆にとても真つ白な心を持つ人は拒絶しないとのことだ。前世でも触れたのはアリーゼさん、シルさん、僕、あとは僕とアイズの娘ぐらいだったかな？ アイズはどうだったんだろう？ あまりそこから辺の組み合わせは見えないんだよなあ。

さてさて、ここまで都合二秒。前世で鍛え上げられた思考加速。とてもくだらない事に使われる。どうせ、戦闘中じゃあ、防御や回避は身体が勝手に行うしなあ。

おっと、また思考が関係無い方に行つてしまった。

とりあえず、今はリユーさんの迷いを無くさないと。答えは出せなくても、自分の行いに迷いを持たなければ良い。思考停止と捉えられるかもしれないが、『今』はダメだ。これが終わった後にいくらでも悩んで欲しい。ここで確立すれば、これ以上の結果は無

いわけだが。

まあ、やってみない事には変わらない。できるだけやってみよう。

さあ、貴方はどんな結果を出すかな？

## 第二十話

とりあえず、リユーさんの部屋に移動した。

リユーさんが「貴方だけに話したいことがある」と言ったからだ。

決して、やましい気持ちはないよ。本当だよ。

「すみません。戦闘の後なのに、こんな事で引き止めてしまつて」

「大丈夫です。それに『こんな事』ではありません。大事な事ですから」

「・・・ありがとうございます」

リユーさんはまだ、僕の手を掴んでいる。

「・・・単刀直入に聞きます。貴方の悩みは神エレンによるものですか？」

「・・・ツ!? 何故？」

「そして、『正義』とは何かを問われましたか？」

「ツ!? 何故、ベルが、それを？」

「僕も先程、神エレンに同じ事を問われました」

「ベルは・・・何と・・・答えたのですか？」

リユーさんは何かに縋るかのよう、僕に問う。

しかし、僕の返答はリューさんの期待を真つ向から裏切る事になる。

「答えてないです」

「・・・えっ?」

「正確には神エレンから今は聞かないと言われただけです」

「そう・・・ですか」

リューさんは再び項垂れる。

僕が支えるのは良い。しかし、依存対象になるのはダメだ。それは、リューさんのためにはならない。リューさん自身が納得の行く答えを出すしかない。

「リューさんは自分が思う『正義』が間違いだと思えますか? それを『悪』だと思えますか?」

「いえ! そんな事は無い! 私の『正義』は決して『悪』ではない! 私はそれを間違いだと思って・・・いなかった・・・はず」

「では、大丈夫です」

「えっ?」

「リューさんはもう分かっているじゃないですか。リューさんにはリューさんの『正義』があると」

「・・・!」

リユーさんはハツとした様子で僕を見る。

うんうん。良い調子かな？

「僕にだつて僕の『正義』があります。誰かにだつて誰かの『正義』があります。『正義』の在り方とは一つではありません」

「私の・・・私だけの『正義』がある」

「あゝ。それはちよつと違います」

「え？」

「リユーさんの『正義』はリユーさんのものですが、決して一人ではありません。リユーさんとリユーさんの『正義』を信じる人がいます。僕はもちろん。アリーゼさん達やアストレア様。もしかしたら、街の人達も貴方を信じているかもしれません」

「そうだ。『正義』が一人一人違うからといって、それをその人自身だけで掲げる必要はない。人は一人では生きられない。それは『英雄』でも変わらない。」

「だから、諦めないでください。でも、そうですね。リユーさんが折れたとしても、僕はリユーさんの『正義』を信じます」

「・・・・・・・・。ベル。貴方は自分の行動を少しは客観的に判断した方が良いでしょう」

「はい？」

「おや？ 予想していた返答とは全く違うベクトルの返答が来たぞ？ 客観的？ 一



応、気を付けているつもりだけど。

「貴方の言動や行動は沢山の女性を魅了させる。少し……いえ、かなり加減しないと本当に後ろから刺されますよ?」

「何の話ですか!?!」

えっ、何!?! 本当に怖い!? 前世から結構言われているから、一応、考えて行動している筈なんだけど……。

「(だから、私は貴方が……いえ、やめておきましょう) それよりもありがとう、べル。貴方のおかげで決断できました。私はもう迷いません」

「それは良かったです。では、皆の所に向かいますか? 心配しているでしょうし」  
「そうですね。行きましょうか」

そうして、僕達は皆がいるリビングへと向かった。

「あつ！ アストレア様！ ベルとリオンが戻ってきたわ！」

リビングに着くと、アリーゼさんがそう言う。

さつき、そう言った本人が言うのはなんだけど、本当に皆がいるんだ。とても仲間思いですね。リユーさん。見てください。貴方を心配する人達がこんなにもいるんです。貴方は一人じゃない。決して一人で抱え込まないで。

すると、真つ先にアストレア様が来た、

「ベル。ありがとう。リユーの相談に乗ってくれて。リユーも元気になったみたいで良かったわ」

「アストレア様……。心配をおかけしました」

リユーさんは頭を下げる。本当に生真面目だなあ。そういう時はねー

僕はこつそりリユーさんに耳打ちする。

「ベル？ これを言えば良いのですか？」

「うんうん。謝罪よりもそっちの方が良いと思います」

「分かりました。えっと、ありがとうございます……ごじます」

「……！ ええ、どういたしまして」

アストレア様が驚きながらも、微笑む。

あつ。アストレア様の微笑みに当てられて、何人かの「アストレア・ファミリア」の団員達が気絶した。

あらら。幹部達は気絶してないけど、大体が目を逸らしてる。まあ、僕も目を逸らし  
ているから、人の事を言えないんだけど。

さて、そろそろ帰れるかな。

と思った矢先のことだった。

お母さんが何を思ったのか急にある事を提案して来た。

「ねえ、ベル。今日、一緒に寝ましよう？」

「はい？」

「良かったわ。じゃあ、一緒にお風呂に入りましよう♪」

あつ、もしかして、今の肯定だと思われた？

「ちよつ、待って!!? お母さん!!? いくらなんでも、いきなりすぎっ!!?」

「だって、最近、全然甘えてくれないのだから。じゃあ、強引にするしかないじゃない

？」

「待つて!? その理屈はおかしい! ちよつ、助けて!? アストレア様!」

「あら、じゃあ、私も入ろうかしら」

追い討ちが来た! やめつ、やめて—————!!

そうして、二人の女性に隅々まで洗われ、揉みくちやにされた哀れな兎は次の日の朝、三人で寝ていた所をアイズに見られて、アイズも混ざり、結局、昼まで寝ていたとの事だ。

## 第二十一話

「昨日は助かったわ。ベル君」

「あはは・・・。お役に立てたのなら良かったです」

昨日リーリユーさんの悩みを解決し、お母さんとアストレア様に散々弄ばれ、そのまま寝てしまった。

起きた時、もう昼だったことに驚いたと同時に、何故か僕の体の上にアイズがいたのはかなり驚いた。そして、僕の右腕にはお母さんが、左腕にはアストレア様が抱きついていて、全く身動きを取ることもできず、アリーゼさんに助けて貰った。

：：というか、アストレア様もお母さんも僕が子供だからなのか、惜しみなく僕に正しい腕にだご胸を押し付けていた。どちらもそれなり・・・いや、かなりのモノを持っている。子供だからこの状況になっちゃったのか、そして、子供だから体が反応しなくて良かったと思った。

アストレア様って、『正義』を司る神の筈だよね？ これは良いのか？ 一応、僕は子供だから？ まあ、処女神のヘステイア様でもかなりアプローチが激しかったし、逆に

そういう神ほど、顕著に現れるのかな？

・・・そういうえば、エルフが一度燃えると面倒臭いとか聞いたことがある気がする。やっぱり、そういうのに縁遠い人ほど、溜まったものが一気に出るのだろうか？

すると、アストレア様がニッコリと微笑みながら言った。

「ベル君？ 何か変な事考えてる？」

「アストレア様って、恋したことないんですか？」

僕は聞かれた瞬間、一気に現在の思考を断ち切り、別の事に思考をシフトさせた。

危ない危ない。これに関しては『スキル』の効果は期待できない。こういう時は思考をシフトさせ、『嘘』というモノを無くす。ちなみにこれは前世のヘルメス様から教えてもらった。「これをすれば、スパイ作戦で神相手でもハニートラップができるぞー」というよく分からない事も言っていた。僕、男なんだけどなあ。

さて、アストレア様は僕の質問に対し、顔を赤くしている。しどろもどろながらもしつかり答えた。

「・・・あ、ある・・・わよ？／／／／」

「えっ、そうなんですか!？」

これには僕もびっくりせざるを得ない。リユーさんから「アストレア様はとても気高いお方です。有象無象の男なんかに靡くような方ではありません（ベルは違う・・・ど

ころか、とてもお気に入りになるでしょうけどね」とか聞いたから、てつきり本当にそういうのと無縁なんだと思っていたけど、やっぱり、アストレア様も女の子なんですわね。

「どうしたの、ベル？ 何だか、生暖かい目を向けられている気がするわ」

「いえ、気のせいですよ」

うん。何だか、『男に興味が無さすぎて、何の色恋沙汰も無かった自分の愛娘が急に恋する乙女の顔をし始めた』時のような感動がある。……だが、現実とは非情。親としては自分の愛娘に変な虫が付かないようにしたい……というのを建前にして、自分の愛娘が自分の下から離れていくのを許容できる筈がない!! という本音があるものだ。

妙に実感がこもり過ぎているベル。

「ちなみに、それは昔ですか？ それとも、現在進行形ですか？」

「な、なんで、そんなに聞いてくるの!？」

「気になるので！ 内容によっては(前世の)リユーさんに報告しなければならぬので！」

「どうしてそこでリユーが出てくるの!？」

うんうん。中々に焦ってますね。こういう初々しい反応を見ると、とても癒される。……別に昨日の仕返しして訳じゃないですよ？ ええ、別に何か思うところがあるとかそんなんじゃないですよ？

僕は誰に言い訳しているのだろうか？ まあ、良いや。そういうのを抜きにしても、個人的に興味はとももある。

「さあさあ、アストレア様。素直に白状した方が良いですよ」

「メーテリアー！ 助けてー！ ベル君がいじめるー！」

「あらあら、よしよし」

ついで、アストレア様はお母さんに泣きついた。

虐め過ぎただろうか？ というか、アストレア様。そっち方面に弱過ぎませんか？

さらりと流すと思っていたんだけど。

僕はお母さんに抱きつくアストレア様に近づき、謝る。

「ごめんなさい、アストレア様。つい、いじめちゃいました。とても可愛かったですよ？」

「くくく／＼／＼（そういうのがズルいのよ！）」

「あらあら、アストレア。顔真つ赤よ？」

お母さんに押搦われ、さらに顔を真つ赤にさせるアストレア様。

「親子揃ってドS・・・」

アストレア様がそう呟いたのを僕は偶然聞いていなかった。



「モグモグ」

アイズは相変わらず、じゃが丸くんを食べている。二年経っても、やっぱり小動物にしか見えない。

そして、こちらに全く意識を向けない。

アイズっていつもじゃが丸くんを食べてる時って何を考えているのだろうか？

まあ、僕には何も分からないけど。

「アイズ。そろそろ帰ろう。そういえば、何でここに来たの？」

「ん。一緒にアミッドの所に行こうと思って」

「アミツドさんに？ どうして？ 回復薬ホーシヨウの買い出し？」

僕の問題にアイズは首を横に振る。

「アミツドと散歩の約束をしたから、ベルも行こ？」

「女の子同士の約束に僕が入っても良いの？」

「ん。アミツドも喜んで歓迎してくれると思う」

「まあ、とりあえず、行ってみるだけ行ってみる。ダメだったら、先に帰る事にするよ」

「ん」

そして、僕達は「ディアンケヒト・ファミリア」の本拠地ホトキムへと向かった。

## 第二十二話

僕とアイズは『ディアンケヒト・フアミリア』の本拠地<sup>ホト</sup>である治療院に着いた。

「というか、アイズ。いつの間にアミッドさんと散歩の約束してたの?」

「昨日、ベルが私を置いて『仕事』に行っていた時、街で偶然会って、アミッドが疲れたような顔をしていたから、休息を取らせようと思って」

「う、うん」

何だか、前半の言葉にものすごい棘があるような……。気のせいにしておこう。それが良い。

それにしても、アイズが人を気遣えるようになるとは。僕、少し感動しています。

そんな事を考えていると、急にアイズがジト目で僕を見てきた。

アイズのジト目って中々に可愛いんだよな。前世の時とか、感情豊かになったお陰で様々な表情を見せてくれるようになった。その中でも、何処から学んで来たのか、ジト目というものを覚えてきた。最初は「ジトー」って言いながらやっていた様子を見て、可

愛すぎて死ぬかと思った。

「……私だって人を気遣うぐらいはするよ？」

「分かってるよ。アイズは優しいからね」

僕が頭を撫でて誤魔化すと、アイズはとても心地良さそうな顔で僕の手にしりしりと頬擦りをしてくる。

そういう所だよ！　そういう所が可愛すぎるんだよ！

想像してみろ諸君。9歳の少女が自分の手に頬擦りをするのだ。萌え死ぬに決まっているだろう！

すると、奥からアミッドさんが出てきた。とても複雑そうな顔で。

「……時間になって来てみれば、お二人は何をしているのですか？」

「あ、アミッドさん。数日ぶりですね」

「ん、アミッド。アミッドも混ざる？」

アミッドさんは僕の挨拶に「そうですね。寂しかったです」と答え、僕は「あはは……」。

すみません」と苦笑し、アイズの提案には頬を赤くしながら「け、結構です!」と返した。アミッドさんつて、この時からあまり変わらず、真面目だなあと思った。

アミッドさんは「コホン」と咳払いをし、話を進めた。

「それで、どうして、ベルさんがここにいらつしやるのでしょうか? 昨日の時点で、私とアイズさんの二人でだったと記憶しているのですが」

「ん。さつき、ベルも誘った。一緒に行く」

「えと、アミッドさん。僕が来るのが嫌でしたら、僕帰りますので」  
僕の言葉にアミッドさんは急いで否定する。

「い、いえ! 別に嫌というわけではありません! (むしろ、とても嬉しいのですが) よろしく願います」

「はい。よろしく願います。アミッドさん」

「じゃあ、行こっか」

「そうですね」

そうして、僕達は街へと出かけて行ったのだった。

その様子を見ていた女性がいた。

「あれは、ベル君？ あと、ヴァレンシュタインと『戦場の聖女』？ これからお出かけなのかしら？ フレイヤ様に一応報告しておこうかしら？」

その女性は「フレイヤ・ファミリア」の回復役の一人、ヘイズだった。

たまたま、神フレイヤに休息を取るように言われ、現在、私服でお出かけ中のヘイズ。三人の子供達の様子を見て、フレイヤ様に報告すべきか否かを迷っている。何故、迷

うのかというと、ベルが『フレイヤ様のお気に入り』であるのだが、何もフレイヤ様だけではない。

大体的な上級冒険者や女神に大人気なのだ。かく言う私もベル君の事が好きだ。

以前、アレンさんがベル君と模擬戦をした事によつて、『フレイヤ・ファミリア』の団員達が更に苛烈な戦いをするようになった。それに比例して、私達回復役ヒールの負担も倍増し、そろそろ倒れそうになった時、ベル君がやって来た。

その時、幹部以外の団員達は一齐にベル君に襲いかかったが、全員がベル君の手刀で気絶させられた。その時は既にレベル5になっていたが、それでも驚かざるを得なかった。襲いかかった団員達の中にはレベル4もいた。その団員ですら、手刀一撃で沈黙したのだ。それも、ベル君自身も団員達も一切の怪我をする事なく。

そして、ベル君が私の下にやって来た。とても心配そうな顔で私を見ながら、私に話しかけた。

「えと。大丈夫ですか、ヘイズさん？」

「は、はいー。大丈夫ですよー。どうしたのベル君？ フレイヤ様にご用事？」

貴方のせいですよ！ とは、流石に子供相手に言えなかった。

「あつ、いえ。フレイヤ様にヘイズさん達が大変そうだから、手伝ってあげてと言われまして」

「なるほど？ ベル君は回復魔法を使えるの？」

「まあ、一応。派生ではありますが・・・」

目眩がした。あんな戦闘能力を有していながら、派生と言えど回復魔法が使えるのだ。完全なオールラウンダー。正直、都市最強は团长じゃなくて、この子のような気がする。

「あつ！ とりあえず一週間程休んでいてください！ その間は皆さんの『戦闘の相手』も『回復』も『ご飯を作る』のも僕一人でやるので！」

「はいー？」

今、この子はなんて言った？ 私達の代わりをこの子が一人でこなすと？ 到底信じられない。こんな子供が私達ですら過労死しそうな仕事に加えて、団員達の相手もすると言ったのだ。

しかし、何故だろうか。荒唐無稽な話なのに、この子はさも当然かのように言うから、



本当にやつてしまいそうな気がする。

よつて、私は最初に一日だけ様子を見て、それによつて決めようと思つた。

・・・結論から言います。杞憂でした。

朝早くから起きて、膨大な量の朝食を作つていた。正直、全然見えなかつた。次々と料理が出されて、団員達はそれを食べていた。最初は「何故、あの兎のご飯を食べねばならんのだ」みたいな感じだつたのに、一度食べてしまえば、団員達は「美味しい!」「おかわり!」などと言つていた。

次は団員達との戦闘。多対一（もちろん一はベル君）で行つていた。ベル君には幹部達の攻撃ですら全く当たらず、無傷でいながら、団員達に気絶寸前まで追い込める体術で対応していた。ちなみにベル君は「すぐに気絶してしまつたら、訓練になりませんか」と笑いながら言つていた。本当に訳が分からない。

しかも、体術で行つているため、大多数が怪我らしい怪我はなかつたそれでも骨が折れている団員とかいたため、その団員には「大丈夫ですか?」と言いながら、回復魔法をかけていた。その団員は「あ、ありがとう」と戸惑いながらお礼を言つていた。私は思わず、ギョツとした。

回復されるのを当たり前だと思つている団員がお礼を言つていたのだ。その言葉にベル君は「良かったです!」と言つていた。

とても白い、純白の少年。他の回復役は街に出かけたり、部屋で休んだりせず、私と一緒にベル君の働きぶりを見ていた。やっている事は何十人分の仕事なのに、笑顔を絶やさず、何の苦もないように振る舞う彼の有り様はとても尊かった。純粹で健気でも真つ白な少年に私は惹かれて行った。

だから、私はベル君を甘やかしたい。ドロドロになるまで、自分から甘えてくれるように私はベル君を甘やかしたい。

最近は侍女長のヘルンも同じ気持ちらしい。彼女はフレイヤ様の感情等が流れ込んでいるため、ベル君への想いは人一倍だろう。

さて、ベル君？ お姉さん達を本気にさせちゃったんだから、責任、取ってもらいますよー？

## 第二十三話

ブルツ!

僕は不意に悪寒に襲われた。何だか、久しぶりに捕食されそうな兎の気分になってしまった。

僕は周りに意識を向けるが、感じるのはリヴェリアお姉ちゃんの『見守り』の視線やヘイズさんの……何だこれ? ちよつとよく分からない。好意? 庇護欲? ちよつと色々混ざり過ぎて、僕にはよく分からない。

というか、リヴェリアお姉ちゃんは何してるんですか? わざわざローブまで着て姿を隠している。いや、普通の格好じゃエルフの人達に捕まってしまうだろうけど。

まあ良いか。そこまで気にする事じゃない。『見張り』ではなく、『見守り』だから、視線は柔らかい。何というか母親が子を、姉が弟を見ている感じがする。前者はアイズで、後者は僕かな?

そうして、ずっと黙っているからか、アイズとアミッドさんが話しかけて来た。

「どうしたの、ベル？」

「どうかしましたか？ ベルさん？」

「ん？ ああいや、何でもないよ。気にする事じゃない」

「？ 分かった」

「アイズさん……妙に早く納得しましたね。まあ、私も同感ですが」

「ふふっ。それでどこに行くの？」

二人は僕の言葉に何の疑問も無く、引き下がってくれた。まあ、本当に気にしなくて良い事だし、知っても問題は無いと思うけど。

そして、僕は二人に行き先を尋ねると、二人は同時に答えた。

「じゃが丸くん」

「……アミッドさん？ もしかして相当疲れてる？」

ここで、アイズを入れないのは言わずもがな、アイズはどんな時でもじゃが丸をこよなく愛する……絶対にアミッドさん、アイズの言葉に釣られてしまった。そ

れほどまでアミッドさんは疲れているんだらうなあ。

僕の言葉にアミッドさんはニッコリしたまま、

「いえいえ、そんな事はありませんよ？ ええ、別に何でも。ええ、イヴイルス闇派閥の治療にも  
駆り出され、ただでさえ冒険者達の治療でも大変なのに！」

あ、なんかごめんさい。基本的にその人達を助けているのは僕なんです。

アミッドさんは表情を笑顔にしたまま、されど声は怒りを含みながら愚痴を言う。本  
当に申し訳ないです。

「でも、アミッド。イヴイルス闇派閥の捕獲をしているのベルだよ？」

ちよっ!? アイズ!? 何でそれを言うの!? 僕、怒られちゃうじゃん!

しかし、アミッドさんの口から出たのは僕にとって意外な言葉だった。

「分かってますよ、アイズさん。ベルさんは有名ですからね。私はベルさんを恨んで  
いる訳じゃないですよ？ むしろ、敵であっても救いの手を差し伸べるような『優しさ』

は美德であると思います。私が言いたいのは争いをするから怪我するという事です。争うことなく、平和であれば、私達の仕事も少なくなるのにといい事です」

「……本当にそうですよね」

うん。本当にそうだよね。争いがない平和な世界ならば、僕はどうしているのだろうか？ 家族と一緒に楽しく過ごしているのだろうか？ だけど、こういった世界だからこそ、僕は今ここにいて、アイズに会い、恋に落ち、英雄になった。だから、僕は『今まで』は否定しない。僕は『これから』を変えていくべきだと思う。

「………湿っぽい話になりましたね。話題を戻しましょう」

「うん。どこに行こっか」

「そうだね。服屋はどう？」

「定番ですね。私は良いと思います」

「私も……良いと思う」

そうして、僕達は服屋へと向かって行った。

そして、僕は今、二人の試着を終えるまでリヴェリアお姉ちゃんと待っている。

流石に一人じゃ暇だったので、リヴェリアお姉ちゃんを呼んで、話し相手になってもらった。

「そういえば、リヴェリアお姉ちゃんは服は買わないの？」

「私か？ 私は贈り物が多いからな。特にロキからの。だから、別に買おうしなくても服はあるんだ」

「あはは・・・でも、その贈り物の殆どって何か固い物ばかりだよな？」  
「ああ、そうだな。同胞達から貰うものは基本ローブかドレスだな」

リヴェリアお姉ちゃんはハイエルフだから、エルフの人達にとっては崇拜の対象となっている。だから、王族としての衣装がよく届いてくる。

うーん。そういうリヴェリアお姉ちゃんは美しいんだけど、もうちよつと『緩い姿』を見てみたいなあ。

「緩い姿か。たまには良いかもしれないな」

「えっ？ 心を読んだんですか？」

「何を言っている？ 普通に口に出していたぞ」

「・・・本当ですか？」

「ああ」

僕は何やってんだ!? 感情の制御ができなさすぎだろ！ あああああ！ 恥ずかし

い！



「全く。普段、何かおねだりしてほしいと思っただけでもお前は何も言わないからな。数少ないお前の要望だ。ちよつと買ってくる」

「待って!?! お姉ちゃん!?!」

ああ、リヴェリアお姉ちゃんも行っちゃった。

すると、丁度入れ違いでアイズ達が試着室から出てきた。

「ベル? リヴェリアが来てたの?」

「えつ、ああうん。でも、服を買いに行っちゃった」

「そう。私の服どう?」

アイズの服は袖なしの紅色に明るい赤のピン・ストライプ柄のまるでいつかの学園の時の幼児化事件の時の格好だ。うん。めっちゃ似合ってる。

「とても似合っているよ。まるで凜とした花のような姿だ」

「ん。ありがと」

おおよそ、9歳にかける褒め言葉ではない気がするが、何故かこれぐらい褒めないとい  
アイズが満足しないのだ。

アイズは少し頬を朱に染めながら、礼を述べると、次はアミッドさんが出てきた。

「えっと、どうでしょうか？」

アミッドさんは薄桃色のワンピース。髪はハイポジションでポニーテールにしてい  
る。清楚なイメージも合わさって、とても綺麗だ。12歳でこれは凄いな。ロリコンの  
人達が大喜びしそう。あつ。僕は違うよ？

「とても綺麗だと思います。まさに聖女のような美しさを持っていますね」

あつやば。つい、アイズと同じ感じで感想言っちゃった。

「~~~~！／／／」

ああー。アミッドさんが顔真っ赤になってる。12歳じゃまだあまり褒められ慣れ

てないか。

すると、続いてリヴェリアお姉ちゃんも来た。

いや、待つて待つて待つて!?! その格好はおかしくない? さつき緩い格好つて言つていたよね!?! 何でそんな完全な『デート服』なの?

リヴェリアお姉ちゃんの格好は完全なデート服とも言えるもので、両肩を露出させた瑠璃色の服に少し長めの翡翠色のスカート。

うん。めっちゃ大人の色香があつて、男を本気で魅了しにかかっているとも言える格好。正直、似合い過ぎてて直視できない!

「ベル。どうだ?」

「・・・まず、それを緩い格好と言えるのかはさて置き、とてもお似合いだと思います。思わず、見惚れました」

「ふふっ。そうか。ならば、着た甲斐があつたというものだ」

リヴェリアさんはクツクと笑い、僕の頭を撫でる。

ヤバイ。とても今更だけど、美少女、美女に囲まれてる。

精神保つかなあ?



## 第二十四話

そうして、充実した休日をおすごした。

そして、僕の『物語』は今日この日、閉じてしまうだろう。

だが、次の『物語』が幕を開ける。

さあ、『~~物語~~』を見に行こう。

?????????

僕は三人と別れ、夕焼け色に染まる街を歩いていた。

そして、僕は元廃教会へと辿り着き、扉を開ける。

そこにいたのは、

「ようやく来たか。待ちくたびれたぞ」

神エレボス。

「本当に『アイツ』の瞳と同じなんだな。雰囲気はまるで違うが」

ザルドさん。

「当たり前だ。ベルが『あんな奴』と同じな訳ないだろう」

アルフィア義母さん。

そこにいたのは迷宮都市オラリオの敵。

僕は三人と会う約束をしていた。

目的はただ一つ。

僕の『理想』と『幻想』の決定。

僕は今日この時をもって自分の魂の色を一つにする。

「……………エレボス様。見届ける準備はできていますか？」

「できてないって言ったら？」

「無理やりします」

「おいまて。そこは止めろよ」

僕とエレボス様でそんな馬鹿なことを言い合っていると、イライラした様子のアル  
フィア義母さんが。

「神エレボス。良い加減にしろ。無駄な事で時間を取らせるな。いつ、私達が気づか  
れるか分からないんだ。さっさとやるぞ」

と言うので、僕は大人しくやる事にする。あくまで、『僕は』だが。

「おーい。アルフィアアー？ ベルが俺と喋っている事に嫉妬しているのかー？」  
アルフィアさんを煽るエレボス様。凄いなー。ヘルメス様と同じくらい度胸があるなー。ザルドさんはもう目を背けてる。そんなに怖いのか。

「……」

「おーい。無視かー？ いやー。遅れてやって来た恋ごこー」【福ー】<sup>ゴス</sup>ー待て、言い過ぎた。謝る。反省はしないが」

「全く。ベル。早く始めてくれ」

「うん」

神様って何で痛い目を見ても止めようとしなのだろうか？ 本当にその神経の凶太さは凄い。

さて、これ以上長引くとアルフィア義母さんの怒りそうだから、早くやる事にしよう。

「【英雄王の名において世界に命ずる。英雄の器に正義を注げ。英雄の炉に悪をくべ



ろ」

対象は自分。見届け人として三人の参加。世界は僕に試練を与える為、世界の時は静止する。

「【英雄の試練】」

そして、僕の意識は闇へと落ちていった。

静止した世界の中で動く者が一人。

「始めるんだね。ベル」

その一人は目を閉じながら、愛する少年を思い浮かべる。

「待ってるよ。ベルが一体何処に辿り着くのか。帰ってきたら、私に教えてね。だから」

その一人は願う。

「ベルを支えてあげて、アル」

僕は目を覚ました。

周りを見渡してみてもそこには何も無い。

上も下も前も後ろも右も左も。何一つとして、ここには何も無い。

自分が立っているのかも分からない。

だが、ただ一つだけ分かる。

僕の目の前には誰かがいると。

何もなかったはずの空間から少しずつ光が現れてきた。

それは徐々に形を作っていく、ついには僕と全く同じ容姿をした人が二人現れた。

一人は黒竜の装備を纏い、歴戦の戦士としての風格がある。

もう一人は『雷霆の剣』と『炎の魔剣』を携えた道化の雰囲気がある。

言わずもがな、前世と前前世の自分だ。

そして、道化の如き英雄が最初に口を開いた。

「初めまして、『ベル・クラネル』。私は『アルゴノウト』。っていうか、同一人物に『初めまして』って可笑しくない？」

「それを言うなら、僕の方なんて名前を同じだからね？」

道化の言葉に少女の英雄ベル・クラネルが呆れながら言う。

「そりや、僕は転生と言つても、過去からのリスタートみたいなものだから、仕方ないのもあるんだけどさ？」

「まあ、そうしなければ『僕の願い』は叶わなかったから……」

少女の英雄は「それもそうだね」と苦笑する。

僕はそろそろ本題に入る事にした。

「それで？ どうして、君達がここにいるの？ もしかして、今回の試練は君達が相手なの？」

「いや？ 私達はただの介入者。本来ならば、私達と会わずに試練へと進む事になる」

「ここで介入しなかったら、とんでもない結末を産みそうだったからね」

「まあ、そうだね。僕は『確実に』アイズを救おうとして、他を疎かにするだろうね」「分かっているならば、話が早い。それは君の『本当の願い』ではないことは分かつて

いるのだろうか?」

「まあ、ね」

僕の『願い』はできるだけ早くアイズを救う事。『本当の願い』とは――

「簡単な話、世界は君に無理強いをするつもりは無いようだ。まあ、ある程度の拘束力はあるだろうけどね?」

「つまり、ある程度の条件をこなしてさえいれば、大体が自由なのか」

「そう言う事だな。しかし、君の『本当の願い』を叶えるのであれば、君は世界に縛られる。それが『ルール』であり、世界自身もどうにもならない事だ」

「その上で、僕はどちらの選択をするか……か」

「僕としては正直、どちらでも良い。君がやりたいようにやれば良いと思う。だけど、高潔を望む英雄 どうやら道化は何か思うことがあるらしいよ?」

そこで僕は先程からずっと目を閉じ黙っている道化を見た。

「アルゴノウト。君はどう思うんだい?」

少女の英雄は問いかける、そこでやっとアルゴノウトは口を開く。

「なあ、私は君達をどうやって区別すれば良いのだろうか？」

「……はあ？」

何言ってるんだ、この道化は。

流石は同一人物。見事に心の中が一致した。

「いや、さつきからずっと考えていてな。子供ベル、大人ベルにしようかなと思ったのだが、子供ベルの方が歳を取っているからどうなんだろうと思ってるな」

「まさか、自己紹介の時からずっと考えていたのか？」

「ん？ 何を当たり前のことを言っている。むしろ、それ以外に何を考えろと？」

この道化は……。まあ、こうであるからこそ『喜劇』を作り出せたと思えるが。

「じゃあ、アルゴノウトの中では答えは出てるの？」

「ああ、答えも何も、これしか無いだろう?」

そこで道化はまさに道化の如く僕達を驚かせた。

「全てを超えて見せれば良い」

「……はあ?」

本日、二度目の驚き。

「何を言ってるんだ。それができないからこそ、今ー誰ができないと決めたんだけ?」ーは?」

『英雄王』。いつからお前はそんなに『傲慢』になつたんだ?」

『傲慢』って、別になつてなー」では、何故、限界をそこだと決めつけたのだ? お前が『自分にできない事は絶対に不可能』だと言っているようなものだぞ?」ーツ!」

これには僕も驚いてしまう。

確かに、僕はいつの間にか思っていたのかもしれない。自分が最強となつて、これ以

上特別な何かはできないと。

「英雄は『綺麗事を成し遂げる』者だ。『綺麗事』は『夢』や『幻想』とも言っても良い。とにかく、それすなわち、『天秤』を破壊する者。選択肢なんて有つて無いような者。限界なんて何度でも超える者。

それを『英雄』と呼ぶのではないか？」

「——ッ！」

「ならば、全てを叶えてみせよう。アイズを救い、世界を救い、世界の『ルール』なんて超えて、『最後の英雄』となる。それは『僕達』の『原点』だろう？」

そうか、いつの間にか忘れていたのか。僕の『原点』——

『もし、英雄と呼ばれる資格があるとすれば——』

『剣を執つた者ではなく、盾をかざした者でもなく、癒しをもたらした者でもない』

『己を賭した者こそが、英雄と呼ばれるのだ』

『仲間を守れ。女を救え。己を賭けろ』

『折れても構わん、挫けても良い、大いに泣け。勝者は常に敗者の中にいる』



『願いを貫き、想いを叫ぶのだ。さすれば——』

『——それが、一番格好のいい英雄だ』

また、思い出す。

『他人に意思を委ねるな』

『これは——お前の物語だ』

うん。そうだね。お祖父ちゃん。

僕は忘れていたよ。

でも、大丈夫。

僕の願いは——『本当の願い』は——

『皆を救う英雄になる事』



## 第二十五話

心地良いような、何だか寒いような。

「ルーン！」

どうやら僕はうつ伏せになっているようだ。というか、上半身が裸になっている。

「べ——ん！」

さて、そろそろ起きなければ、僕を呼ぶ声がする。

「ベル君！」

僕は目を開け、背中に乗る神物を見た。

「神様?」

「全く、ステイタス更新中に寝るなんてね。そんなに疲れてたのかい?」

うん。間違いない。間違いない僕が知るへステイア様だ。

「すみません。それで、ステイタスはどうなつたんですか?」

「……すまないベル君。今日は口頭で言つてもいいかい?」

「?」 はい。構いませんけど」

一体どうしたのだろうか? 何か気になることでもあるのだろうか?

そして、僕は基本アビリティの値を聞き、『いつも通り』魔法もスキルも発現していない事を聞いた。

つまり、今の僕はレベル1で時間は大体アイズに会った後、リアリス・フレイゼ【憧憬一途】発現の時かな。でも、あの時はスキルの欄を消して、僕に用紙を渡してくれた筈だが。

まあいいか。神様はいつも僕の事を思つて行動してくれている。別に問題は無いだろう。

「じゃあ、神様。もう夕飯の支度しましょうか? ジャガ丸くんパーティーでも、流石

にそれだけじゃあ物足りないですよね？」

「うん、ベル君に任せるよ」

「はい」

そして、僕は懐かしいキッチンへと向かった。前世じゃあ、簡単な料理しか作れなかったけど、『経験』はしっかりと覚えている。材料を余す事なく使い、限らない美味しさを作る。

ヘスティアはどこか懐かしむような雰囲気を出しながらキッチンに向かうベルを見て、自分の記憶を思い返す。

「一体何なんだこれは？」

ベル・クラネル Lv. 1

『力』 I 77↓82

『耐久』 I 13

『器用』 I 93↓96

『敏捷』 H 148↓172

『魔力』 I 0

【魔法】

【ファイアボルト】

・速攻魔法

・付与魔法に変化可能

・昇華時、『神雷』と『聖火』を纏う

【ディア・アルゴノウト】

・召喚魔法

・速攻魔法

・『雷霆の剣』『炎の魔剣』を召喚

・追加詠唱式『笑おう！ 例えどんな苦難があろうとも！ 紡がれるは喜劇！ 暗黒

の世界を照らす希望の光！ 神々よご照覧あれ！ 私が、始まりの英雄だ！』

・『雷霆の剣』を『神雷の剣』、『炎の魔剣』を『聖火の魔剣』に昇華

・自動的に【英雄願望】の発動

【スキル】

ベル・クラネル

【原点回帰】

・【英雄の試練】アルゴノウト 【英雄願望】 使用可能

・【憧憬一途】リアリス・フレージェ 【眷属冒險譚】メモリア・フレージェ 【理想】 発現

・【ファイアボルト】 昇華可能

・【英雄願望】アルゴノウト 強化

【原点回帰】アルゴノウト：【幻想】

・自分の船理想に乗る者理想の者理想の数に依じて自分のステータス超高補正

・自分の船理想に乗る者理想にステータス超高補正

・絶望に屈さず、希望を掲げる限り効果持続

異常。

はつきり言わなくても分かるほどの異常事態。イレギュラー

正直、ベルが寝ていてくれて助かった。

これを見た時に尋ねられていたら、絶対に誤魔化せなかった。

「ベル君。君は一体、どうしたんだい？」

女神はたった一人の眷属子供の異常さに頭を抱えるしかなかった。



今、僕はダンジョンにいる。

【英雄の試練】が始まり、二日目。

さつき、前世と変わらず、メインストーリーでシルさんフレイヤ様と会った。

何故か、前世の時よりも押しが強かった。

確かに前世と比べてみると、魂の輝きは増したかもしれませんが、そんなに食い入るようには見られると困るんですがと言えるほど、押しが強かった。

今日の夜は酒場——『豊饒の女主人』に何う事を伝えると、やつと離してくれた。

朝から相当疲れてしまった。

とりあえず、夜ご飯の分のお金を稼がないと。『豊饒の女主人』で出される料理は味はとても美味しく、そして高い。値段と美味しさが釣り合っている酒場なのだ。

……今日の夜は確実に荒れる。そのためにも少しでもお金を稼がなければ。

……ちゃんとエイナアドバイザさんの言う事に従った範囲で。

とりあえず、今回の探索で分かったのは意外と『身体』と『精神』のズレが小さかった事だ。

ズレの解消で一日潰れる事を覚悟していたが、一時間くらいで終わった。

あと、何故か「ファイアボルト」や「英雄願望」<sup>アルゴノット</sup>を使える事ができた。

もしかして、神様はこれに疑問を持ったのかな？

今回の稼ぎは約一万ヴァリス。

階層の浅さと戦闘のスローペースから判断しても、相当な金額だと言えるだろう。前世じゃこれの半分以下だった筈だし。

夕刻。教会の隠し部屋へと戻った。

「神様ー？ ただいま帰りましたー！」

返事はない。

「まだ、バイトなのかな？」

すると、机の上に紙がある事に気づいた。その紙を取ってみると、

『すまないベル君。何日か部屋を留守にして、少し友神の所に行ってくる』  
置き手紙のようだった。

何日か留守に？

ガネーシャ様のパーティーって明日じゃなかったっけ？

それともヘファイストス様の所に行くのかな？

無理しなきゃいいけど。

僕は不安を押し殺して、『豊饒の女主人』へと向かった。

すつかり日は落ち、早朝の人気の無きとは打って変わって、酒場を中心に盛り上がっている。

前世は店を見つけるの苦労したなあー。

弦楽器や管楽器の演奏に心が躍り、道行く人々は足を進める。

そうして歩いていると、『豊饒の女主人』に辿り着いた。

そして、僕の中に入った。

「あつ！ ベルさん来てくれたんですね！」

シルさんは店に入った僕に気づき、僕の元に来た。

……その瞬間、沢山の男性冒険者が僕を睨んできた。

うっわー。すつごい帰りたい。

「来ましたよ。約束ですからね」

「はい。ありがとうございます。いらっしやいませ」

シルさんは澄んだ声を張り上げる。

「お客様一名入りまーす！」

（いつも通りだな）

酒場っていちいち言う事言う店だったかな？ と前世でも同じ疑問を持って、僕はシルさんにカウンター席に案内される。場所も前世と全く同じ隅っこだ。

僕は案内された席に座り、店主——ミアさんが話しかけてきた。

「アンタがシルのお客さんかい？ ははっ、冒険者のくせに可愛い顔してるねえ！」  
「あはは……」

前世と全く変わらない事を言われ、苦笑いを浮かべる僕。

「何でもアタシ達に悲鳴も上げさせるほど大食漢なんだそうじゃないか！　じゃんじゃん料理をだすから、じゃんじゃん金を使つてつてくれよお！」

「シルさん？」

僕は側にいるシルさんを見る。

「…………えへへ」

ああ、ダメだ。この人本当に変わらない。

「…………僕の「ファミリア」は貧乏ですから、ちよつとだけですよ」

「ふふ、ありがとうございます」

僕はカウンターに向き直り、パスタを頼んだ。酒は断った。の筈なのだが、醸造酒エールを置いた。

うん。前世もそうだったけど、何で聞いたの？

少年食事中……

「楽しんでますか？」

「はい。とても賑わっていて、良いお店ですね」

笑顔の絶えない酒場。それっただけで、とても良い店だ。僕も似たようなものを追い求めるから、凄いと思う。

そうして、シルさんと談笑していると、十数人規模の団体が店に入っ来て来た。

それは——「ロキ・ファミリア」。都市最大派閥の一つ。勿論その中にはアイズもいた。

今世の僕は「ロキ・ファミリア」の団員。今、こうした状況はとても寂しく思う。

だが、今の僕は「ヘスティア・ファミリア」の団員。神様を裏切ることにはできない。

そうしている内に「ロキ・ファミリア」の人達は騒ぎ出した。

僕はまだ残っているパスタを食べ始め、食べ終わると、一人の獣人の青年——ベートさんが大声を上げる。

「そうだ、アイズ！ お前のあの話を聞かせてやれよ！」





## 第二十六話

「そうだ、アイズ！ お前のあの話を聞かせてやれよ！」

「あの話……？」

「あれだって、帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！ 最後の一匹、お前が5階層で始末しただろ！？ そんなで、ほれ、あん時いたトマト野郎の！」

アイズはベートが何を言わんとしているのか、理解した。

「ミノタウロスって、17階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げ出していた？」

「それぞれ！ 奇跡みてえにどんどん上層に上っていきやがってよつ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！ こっちは帰りの途中で疲れていたつてのによ〜」

テイオネの確認にベートはジョツキを卓に叩きつけながら頷く。

ベートは酔っている影響か、次々に口が回る。

当然、白い少年の話題が出た。

何故かは分からない。でも、ふつつつと私の中で煮え滾る何かがあった。

これは、怒り？ あの白い少年を傷付けるような発言に対して？

どうして、私は一度しか会っていない白い少年にこうまで心を乱しているのだろうか？

これは、一体何？

リヴェリアが私の様子を見て、ベートを静かに非難する。

少し、心が軽くなったような気がする。

でも、『気がする』だけだ。

皆が彼を笑う。そして、取り残された私はついぞ、足元の愛剣に手にかけてようとした時、

『ダメですよ。そんな物騒な事をするのは』

ふと、そんな声が聞こえて来た気がした。

私は顔を上げ、声の主を探す。

すると、見つけた。カウンター席に座り、片方の目をこちらに向けている白髪赤瞳の

少年。

『僕は大丈夫です。ですが、もし、そこに居たくないのであれば、こっちに來ますか？』  
迷い子の様になっていた私にはその提案はありがたかった。

私は席を立ち、少年の下へと向かう。

「おい、アイズ！　って、アイズ？」

後ろから何か聞こえるが今の私に余裕はない。

私は追い続けるようにその少年近くに来た。

そして、私はこの子に問う。

「君の名前は？」

「僕はベル。ベル・クラネルです」

「ベル。うん、ベル。私はアイズ。アイズ・ヴァレンシユタイン。アイズって呼んで」

「よろしくお願いします、アイズさん」

酒場はワツと盛り上がる。

「あの【劍姫】に男だと!」「いやでも、今のやり取り明らかに初対面だぞ!」「まさか一目惚れなのか!?!」「というか、あのガキは一体誰だ!?!」と沢山の声が聞こえてくる。けれど、そんなのはどうでも良い。

「ベル」

「はい。どうかしましたか?」

「頭、撫でてでも……良い?」

「へっ? まあ、良いですけど。どうぞ?」

「ん、ありがとう」

私は差し出された頭を撫でる。

「おお、モフモフ! 癒される。ずっと触っていられる。思わず、抱きしめそうになると、

「アイズ。止まれ」

「あうっ」

私はリヴェリアに頭を叩かれた。いつの間にか、私の後ろに来ていたようだ。

僕は驚いている。

アイズの悲痛な表情を見て、思わず助け舟を出したが、まさか本当に来るとは思わなかった。

そのまま流れるように自己紹介を終え、アイズは僕の頭を撫でたいと言ってきた。アイズ、本当に頭を撫でるのが好きだね。

そして、アイズが少し身じろぎしたと思うと、どうやらアイズはリヴェリアお姉ちゃ  
——リヴェリアさんに叩かれたようだ。

「コホン。アイズ、その少年は誰なのだ？ お前の反応から察するに先程の話に出て  
きた少年だと思うのだが」

「うん。そうだよ。ベル・クラネルって言うの」

「あはは。初めまして、ベル・クラネルです」

「ふむ。こちらこそ初めまして、リヴェリア・リヨス・アールブだ。先程は済まなかつ  
た。身内の暴走を止めることができなかつた」

「私からもごめんなさい」

リヴェリアさんとアイズが謝ってきた。僕は慌てて頭を上げさせる。

「謝罪は受けとります。ですが、私は気にしていませんし、貴方達もあまり気にしなく  
て大丈夫ですよ？」

「すまない。ありがとう」

すると、奥からフィンさんが来た。  
なんか凄い顔が真つ赤で若干フラフラだけど、大丈夫なのかな？

「僕は【ロキ・ファミリア】の団長のフィン・デIMUMナ。僕からも、【ファミリア】の代表として謝る。団長でありながら、皆の暴走を止めるどころか、僕も君を笑ってしまった。本当にすまなかつた」

「ああ、はい。分かりましたけど、フィンさん。フラフラですけど、大丈夫ですか？」  
「あはは、ちよつと飲まされてね。でも、大丈夫だよ。ありがとう」

明らかにちよつとじゃないような。

すると、リヴェリアさんが大声で言った。

「ベート！ お前も謝れ」

すると、ベートさんが嘲笑の声で返す。

「はっ！ どうして俺が雑魚なんかに頭を下げなきゃいけないんだ？ 俺は事実を

言っただけだ！ 馬鹿にされるのはそいつが弱いからだだろうが！」

リヴェリアさんは頭を抱える。苦労人だなあ。お姉ちゃんもいつかはこうなるのだろうか？

僕はリヴェリアさんに声をかける。

「リヴェリアさん。僕は大丈夫ですよ。謝罪は貴方達から受け取っていますし、僕が弱いのも事実ですから」

「あのバカが本当にすまない」

すると、今度はアイズが話しかけてきた。

「ベル。今度、会おう？」

「え？ まあ、良いですよ」

アイズのこの発言に僕とアイズ以外が驚愕した。



「チツ！ おいつ！ トマト野郎！ テメエ調子に乗ってんじやねえぞ！」  
ベートさんはツカツカと僕の方へと来て、僕の胸ぐらを掴み上げる。

「ぐっ！」

「はっ！ テメエのような雑魚じゃあ、アイズと釣り合うわけがねえ！」

そして、ベートさんは僕を店の外へと放り投げ、ベートさん自身も店の外へ出た。  
僕は受け身を取り、すぐに大勢を立て直す。

そして、ベートさんは蹴りを放ってくる。

それを見ていた人達は皆が想像した。

少年が血祭りに上げられる姿を。

だが、アイズは何となく分かっていた。ベルの強さを。

「ッ！」

一瞬のぶつかり合いだった。

大勢の人はその動きに理解が出来なかつただろう。

理解できたのは第一級冒険者のみ。

ベルはベートの蹴りを当たるか当たらないかぐらいのギリギリで避け、そのままベートの鳩尾を殴り、雷を放出した。

「ガッ！」

ベートさんは地に伏し、ベルは立っていた。

現在のベルの心情としては

や、やってしまったあああああああああ！

やってしまった！ よりもよってアイズの前で力を見せてしまった。

まずいまずい。発動するか分からないけど、メモリア・フレイゼ【眷属冒険譚】！

世界の記録を塗り替える！

その様子を見ていた二人組がいた。

「ねえ、お姉ちゃん。あれって【メモリア・フレージ脊属冒險譚】だよね？」

「ええ、そうね。偶然中の偶然だったけど、やっと見つけたわ」

「私達を置いて行った罪は重いわよ？ 『お父様』？」

## 第二十七話

どうして？

どうして私達を置いて行つたの？

教えてよ。お母様、お父様。

暗闇で泣く二人の少女。

僕はその二人に何も声をかけられなかった。

置いて行つたのは僕だから。

何も言わなかったのは僕だから。

だから、僕はごめんとしか言うことができなかった。

「はっ!?!」

僕はベッドから飛び起きた。

「さっ……きの……夢は」

間違いない。あの二人の夢だ。

どういうことだ？

今まで一度も見なかったのに。

今に限って、見てしまった。

分からない。

分からないけど。

「起きないと……」

そして、僕は着替えて教会の隠し部屋から外に出た。

昨日の夜、酒場である事件を起こしてしまった。(僕、被害者だけど)

そして、誤魔化すために僕は【メモリア・フレージ眷属冒険譚】を使った。

効果としては、『記録の改竄』。

昨日、起こったことを丸々無かったことにした。

無かったことにしたというより、保存されている記録と移し替えると言った方が正しい。

本来ならば、僕はベートさんの言葉に耐えきれず、酒場を飛び出す。

しかし、今回はアイズを助けようと関わってしまった。

別に後悔がある訳ではない。

ただ、これには少し問題があり、ある一定の水準を満たす者は効かないという点だ。だから、

「やあ、ベル・クラネル。少し話を聞いても良いかい？」

第一級冒険者  
フィンさんとかにはすぐバレる。

僕は諦めて、彼と話をすることにした。

「分かりました。どこで話をするんですか？」

「んー。そうだね。『黄昏の館』で話をしよう」

「良いんですか？ これでも一応他派閥の団長ですよ？」

「君なら問題無いさ」

「……何処からそんな自信が出てくるんですか？」

「なーに。ただの勘さ」

親指でも疼くのかな？

僕はフィンさんに『黄昏の館』まで案内された。

「さて、自由に寛いでくれ」

「あつ、はい」

「ベル、こつちおいで」

「わ、分かりました」

アイズに手招きされて、アイズの横に座った。



すると、アイズが僕の髪を触り始めた。

「モフモフ」

「こら、アイズ。つて、声が聞こえていないか。すまないベル・クラネル。嫌でなければ、そのままにさせてやってくれ」

「はい。分かりました」

「ありがとうございます」

えっと、今この部屋にいるのはフィンさん、アイズさん、リヴェリアさん、ガレスさん、レフィーヤさんのみである。

「もしかして、今ここにいる人達が少なくとも【ロキ・ファミリア】の団員で僕のスキルの影響を受けていない方達ですか？」

「そういうことになるね」

フィンさんは柔らかに答える。

敵意は無さそうだ。むしろ、感謝しているような……。

「それで、話を聞きたいのは君の使ったスキルについてだ。もちろん、隠したければそれで良い。しかし、差し支えなければ、教えてほしい」

「あっはい。別にそこまで重要では無いので良いですよ」

少年説明中……

「なるほど、君のスキルのお陰で僕たちは救われたと言っても過言では無い」  
「あはは……」

そりやそうだ。

ベートさんの行動は「ロキ・ファミリア」として、あるまじき行動。

今回は僕が隠蔽したが、していなければ、「ロキ・ファミリア」の名声は落ちていたかもしれない。

結果的に僕に救われたと言えるだろう。

野望があるフィンさんにとっては尚更だ。

「そこで僕は君にお礼とお詫びを兼ねて、何かあげたいと思っている。お金でも武具でもなんでも言ってくれ。これは僕個人としてのお礼だから、ポケットマネーと相談することにならけどね」

フィンさんは笑いながら言う。

当たり前だ。これは誰にも知られてはいけないことだ。しかし、謝礼をしない訳にはいかず、あくまで個人としてということだ。

ならば、無下にするわけにはいかないだろう。

しかし、どうするか。

できれば、神様には秘密にしておきたいから、お金は遠慮したい。

武器が良いのだろうか、何故だろうか？ 猛烈に買ってはいけないような気がする。

おかしいな。ここには『雷霆の剣』も『炎の魔剣』も無いはずなのに。

なら、防具だろうか。黒竜の戦闘衣バトルクロスは「幻想」が無いから、出す事はできない。でもなあ、あまり過剰過ぎるのもどうなんだろう？

うんうんと悩んでいると、フィンさんが思い出したかのように話す。

「そうだ。君に提案したい事があってね。それを聞いてから、決めるのはどうだろう

？」

「えっと、はい。なんででしょうか？」

とても嫌な予感がするが、聞いてみよう。

「君に近々ある遠征に参加して欲しいと思ってね」

「はい？」

フィンさんのその言葉に僕は驚愕した。

「ってあれ？ 僕だけ？ みんなはうんうんと頷いている。  
普通ならば、ありえない提案。」

「えっと、僕が行っても邪魔なるんじゃない？」

聞いているのは戦闘能力ではなくて、連携の問題。

余所者の僕が参加しても士気を乱すだけでは？

「その点に関しては問題ない。君には51階層からの選抜隊から参加してもらおう。それまでは僕達が君を隠すさ」

なるほど、遠征において僕は『本来』はいない者として扱う。今、ここにいるメンバーで上手いこと他の団員達から隠すつもりらしい。

「そこまでして、僕を参加させたいのは何故ですか？」

「君の最低限の戦闘力はレベル1でありながら、レベル5に匹敵している。人と怪物<sup>モンスター</sup>を比べるのはお門違いだが、それでも冒険者ならば、怪物の方が闘いやすいだろう？ それに親指が疼くんだ。君を連れて行くべきだとね」

本当にこの人は頭が良過ぎる。完全に僕を見透かしている。『秘密』がある事を理解している。

「……分かりました。僕は前向きに検討しますが、神様と相談してから改めて答えます」

「ありがとう。あと、さっきのは決まったかい？」

「ああ、はい。戦闘衣バトル・クロスをお願いします」

「分かった。後で一緒に行くでしょう」

こうして、僕は戦闘衣バトル・クロスを頼むことにした。

あと、

「フィン。私も行きたい」

「……アイズが？別に良いけど。どうしたんだい？」

「私もベルに何かあげたい」

アイズの様子にリヴェリアさんとガレスさんとフィンさんは驚いた。

というか、レフィーヤさんがさっきから何も言わないんだけど。

……ずっと見られているから怖いんだけど！

そして、アイズさんもついてくることになった。

そして、話し合いが終わり、『黄昏の館』を出て、少し離れたところで、

「むぐっ！」

黒ローブを着た誰かが僕の口を塞ぎ、路地裏へと引き込んだ。

一体、誰……が……。

待て。待て。待て待て待て！

なんでここにいる！　なんで二人が！

なんで、『アリアドネ』と『アイルズ』がいるんだ！

「やっと見つけた。『お父様』」

「随分と探しましたわ。『お父様』」

「お、お父様？ 僕は自分より年上の女の子の子供を持った覚えは無いんだけど？」

「ふーん。しらばつくれるの？ 私たちは見てたよ。お父様が【眷属メモリア・フレージェ冒険譚】を使った所を」

「それ以上しらばつくれるのであれば、『ここのお母様』にお父様の黒歴史、バラしますよ？」

あつやばい。だめだ。逃げられる無い。大人しくするしか無いか。

「はあ、全く。どうして二人がいるの？」

「……」

「二人とも？」

「う、うわああああああん!!」

二人は僕に泣きながら、僕に抱きついた。

待つて待つて、身長は君達の方が高いから、その位置じゃ首が！



「どうして？ それは私達のセリフです！ どうして、私達を置いて行ったのですか！？」

「寂しかったよ！ お父様〜！」

「……ごめんね。二人とも。僕は願いを叶えるためにここに来たんだ」

「それは分かっています！ でも、私達も連れて行ってくれても良かったじゃないですか！」

「もう置いてかないでよ〜！」

「全く、ここにいるという事は『僕と同じ方法』で来たの？」

「うん」

「じゃあ、もう置いていかないよ。第一、もう魂が繋がっちゃったから、置いて行きたくても勝手にこっちに来ちゃうけどね」

僕は二人を撫でながら、そう言う。

そして、僕は二人に問う。

「それにしても、よくフレイヤ様が協力してくれたね」

「真摯に頼み込んで二人でオツタルさんと戦うことになって、勝ったから、協力しても

「らいました」

フレイヤ様。どうやら僕との『約束』を守ってくれたようですな。

フレイヤ様とした『約束』——

『もし、娘達が僕を追いかけたいと願った時、その真価を計り、お眼鏡に叶う事があれば、僕と同じ特訓をさせてあげてください』

『分かったわ。でも、近いうちにきつと約束は果たされるわよ?』

『それならそれで。僕の都合で二人を置いて行くんです。選択肢は残しておきます』

『貴方は本当に優しいわね』

『僕はただのエゴイストですよ』

『それでも、貴方はとても尊いわ』

『ありがとうございます』

——なんてことがあった。

本当に二人は来たんだね。

全く、これじゃ親離れはできなさそうだなあ。

僕はそれでも嬉しいけどね。

## 第二十八話

二人が泣き止んだことを確認すると、僕は二人に尋ねた。

「アリアドネ、アイルズ。二人はこれからどうするの？」

「お父様と一緒にいる」

「……つまりは「ヘステイア・ファミア」の本拠地ホムに来るっていう認識で良いのかな？」

「うん」

そうですか。まあ、今は神様もないし、数日泊めるのは良いかな？

「分かった。じゃあ、一緒に行こうか」

「うん！」

二人は元気に頷き、僕の横にきた。どうやら、身を隠すのをやめたいらしい。

アリアドネの金髪青目。

アイルズの銀髪赤目。

久しぶりに見た二人の姿はとも見違えるほどに美しくなっていた。

アイズと比べても遜色はない。

道ゆく人々は二人に視線が釘付けになっている。

正直、不埒な視線から愛娘を守ってやりたいが、二人やアイズに過保護過ぎだと怒られているため、何もしない。

子に親離れできないと思っている親ほど子離れできないものだ。

それが嬉しいのだから。

僕は本当に久しぶりに談笑しながら家へと帰った。

翌日――

朝、僕は起きた。

ん？ 全然動けないっていうか、暗い。

それに温かいし、柔らかい。

僕は訳もわからず、とりあえず、目の前あるだろう何かに触れる

「んっ」

すると、アリアドネの艶かしい声が聞こえる。

それによつて僕の意識は一気に覚醒。

自身の極限の体術を用いて、その場所から離れた。

「なっ、なんで。二人とも僕の上に!?!」

「うん。おはようございます、お父様。朝から私の体を求めるなんて欲求不満です

か？」

「私には触ってくれないの？」

「欲求不満じゃないし、触りません！」

全く、二人の方が欲求不満なんじゃないのか？

二人ともネグリジエを着て、僕に抱きついていたということだ。

二人とも16歳なら、もう少し慎みを持ってくれ。切実に。

「はあ、僕は朝食を作ってくるから、その間に着替えてね」

「はーい」

そして、僕はキッチンへと向かい、朝食の準備をする。

朝食を食べ終えて、ダンジョン探索に行こうとした時、僕は気づいた。

「そういえば、二人とも【ステイタス】って今どんな感じなの？」

「えっと、私もアイルズもレベル10です。これが最新の【ステイタス】です」

僕は二人の【ステイタス】を書いた用紙を受け取り、その凄さに瞠目した。

アリアドネ・クラネル Lv. 10

『力』SSS 1892

『耐久』SSS 1752



『器用』 SSS 1935

『敏捷』 SSS 1875

『魔力』 SSS 1924

精霊 S 剣聖 S 魔聖 S 英雄 A 神聖 S

## 【魔法】

【精霊の園】  
フェアリーダンス

・ 範囲内の味方の体力、精神力を持続的に回復させる

・ 範囲内の相手の体力、精神力を持続的に奪う

・ 範囲の広さと干渉する力の大きさは魔力値に依存

・ 詠唱式『この地に眠る同胞よ。我らに力を貸し与え給え』

## 【精霊の奇跡】

・ 防護魔法

・ 致死攻撃の無効化

・ 無効化回数は自身のレベルに依存

## 【アストライア】

・ 召喚魔法

・ 速攻魔法

・ 双剣『アストライア』を召喚

【スキル】

【英雄王の娘】

・ 早熟する

・ 家族と魂を繋ぐ

・ 家族が死ぬまで不老不死

【双<sup>ツインスター</sup>星】

・ 対象者と共にいる時、ステータス超高補正

・ 対象者との連携力向上

・ 対象者のステータスを知ることができる

アイルズ・クラネル Lv. 10

『力』SSS 1756

『耐久』SSS 1783

『器用』SSS 1998

『敏捷』 SSS 1942

『魔力』 SSS 2185

精霊 S 劍聖 S 魔聖 S 英雄 A 神聖 S

## 【魔法】

## 【ジ・オリジン】

・破壊魔法

・破壊範囲の制御は魔力値依存

・詠唱式『森羅万象に願う。我が扱うは万物の根源。我が仇の全てを破壊せよ』

## 【精霊の奇跡】

・強化魔法

・一定時間、器の強制昇華

・効果は自身のレベルに依存

## 【ディザスター】

・召喚魔法

・速攻魔法

・双剣『ディザスター』を召喚

## 【スキル】

【英雄王の娘】

・早熟する

・家族と魂を繋ぐ

・家族が死ぬまで不老不死

【双  
ツインスター  
星】

・対象者と共にいる時、ステイタス超高補正

・対象者との連携力向上

・対象者のステイタスを知ることができる

……ちよつと頭が痛い。

以前とは比べ物にならない。

なんだこれは。チートレベルだ。

発展アビリティもおかしい。

精霊以外、聞いた事も無い。

でも、まあ、二人がここまで成長した事は純粹に喜ぶべきか。

僕は二人に頭を撫でながら、褒める。

「よく頑張ったね。二人とも」

「……ッ！ はいっ！ ありがとうございます、お父様！」

二人は嬉しそうに目を細めて、僕の手を受け入れる。

すると、アリアドネが気づいたかのように声を上げる。

「私、お父様の「ステイタス」を見てみたいです！」

「僕の方？」

「はい！ 今のお父様はレベルだと理解していますが、それでも見てみたいです」

「別に良いけど、今の僕の「ステイタス」を書いた用紙が無いんだよね」

「そうなの？」

「うん。神様が僕の「ステイタス」を口頭で伝えたから、多分、秘密があると思うんだけど。……そういえば、二人って【ヒエログリフ神聖文字】読めたよね？」

「えっ？ そうですね。読めますよ」

「じゃあ、僕の背中から直接確認して、確か、今の神様は『ロック鍵』を知らないはずだから。見れると思う」

「分かりました。では、失礼しますね」

そう言つて、アリアドネは僕のインナーを肩まで上げて、「ステイタス」を確認する。

「ッ！ お姉ちゃん。これは！」

「ええ、ハステイア様が隠したくなるのも無理はないですね」

「どうかしたの？」

「すみません！ 今、紙に写しますね」

そして、アイルズが僕に渡してくれた用紙を見ると、

ベル・クラネル L.V. 1

『力』 I 82

『耐久』 I 13

『器用』 I 96

『敏捷』 H 172

『魔力』 I 0

【魔法】

【ファイアボルト】

・速攻魔法

・付与魔法に変化可能

・昇華時、『神雷』と『聖火』を纏う

【ディア・アルゴノウト】

・召喚魔法

・速攻魔法

・『雷霆の剣』『炎の魔剣』を召喚

・追加詠唱式『笑おう！ 例えどんな苦難があろうとも！ 紡がれるは喜劇！ 暗黒

の世界を照らす希望の光！ 神々よご照覧あれ！ 私が、始まりの英雄だ！』

・『雷霆の剣』を『神雷の剣』、『炎の魔剣』を『聖火の魔剣』に昇華

・自動的に【英雄願望】<sup>アルゴノウト</sup>の発動

【スキル】

【原点回帰】<sup>ベル・クラネル</sup>・【英雄の試練】<sup>アルゴノウト</sup>【英雄願望】使用可能

・リアリス・フレーゼ【憧憬一途】メモリア・フレーゼ【眷属冒險譚】【理想】発現

・【ファイアボルト】昇華可能

・アルゴノウト【英雄願望】強化

【原点回帰】アルゴノウト幻想

・理想自分の船同調に乗る者の数に応じて自分のステイタス超高補正

・理想自分の船同調に乗る者にステイタス超高補正

・絶望に屈さず、希望を掲げる限り効果持続

何だ……これは。

これが今の僕の「ステイタス」……なのか？

ははっ。そりやそうだ。神様も隠したくなる。僕でもこれは隠したくなる。

すみません、神様。

次、神様が帰ってきたら、僕の正体とこの世界についてお伝えします。



僕達は今、ダンジョンに來ている。

自分の本当の「ステイタス」を知ったからこそ、これは動かなければならないと思っ  
た。

そして、今は17階層にいる。

そろそろ、階層主ゴライアスが出てくるだろう。

肩慣らしだ。

一分で終わらせる。

そして、『嘆きの大壁』から階層主ゴライアスが現れた。

ゴライアスは小さな敵に咆哮する。

僕は歩き出す。そして、歌を紡ぐ。笑いながら、声高々に。

『笑おう！ 例えどんな苦難があろうとも！ 紡がれるは喜劇！ 暗黒の世界を照

らす希望の光！ 神々よご照覧あれ！ 私が、始まりの英雄だ！」

「【ディア・アルゴノウト】！」

ゴオオン！ ゴオオン！ ゴオオン！

グランド・ベル  
大鐘楼の鐘が鳴る。

昇華し、高次元の雷と炎を纏う剣には光が集約される。

さて、行くぞ。

ゴライアス  
階層主の攻撃を掻い潜り、的確にダメージを与えていく。斬撃のダメージは少ないが、剣に纏つてある『神雷』と『聖火』が大きなダメージを与えている。

時間にして1分。

僕は距離を取り、二つの剣を最上段に構えた。

そして、僕は『英雄の一撃』を繰り出し、

膨大な光が消える頃には、

ゴライアス  
階層主は魔石も残さず、消えていた。

「「凄いな」

何が凄いのか。アリアドネとアイルズは自分達の言葉がよく分からなかった。私達でも階層主を一撃で葬る事はできる。

しかし、お父様の一撃はそんな安いものじゃない。まさに『英雄の一撃』。私達ではとても表現できないその一撃は遥かに重いものだった。

## 第二十九話

階層主ゴライアスの討伐後、僕達は地上へと帰還した。

二人に換金を任せて、僕はギルドの外で待っていると、

「ベル？」

「アイズさん？」

アイズに会った。

あつ、やばいでしょう。僕達の娘二人をアイズに会わせるのはまずい。

僕はすぐさま、二人に念話を飛ばした。

『二人とも、そのままギルドの中において』

『？ どうしたの？ お父様』

『・・・今、アイズといるんだ』

『えっ？ お母様と？』

『・・・会っちゃダメなの？』

『ダメという事はないけど、その代わり関係は隠さなければいけないよ？』

『じゃあ、お母様の目の前でお父様の恋人のフリをしても良いって事？』

『いや、なんでそっち方面？ 普通に僕が弟で二人が僕の姉で良いと思うんだけど』

『お父様が弟。それも良いかも』

『そうですね。私達はお父様と行動する以上、何度も遭遇することになるでしょうし、今のうちに会っていた方が良いかもしれません』

『問題は二人の容姿だよなあ』

『思いつきり、お母様に似ていますからね』

『一応、精霊だし』

『その精霊の力を使って、上手く容姿を変えられない？』

『無理。まだ、そこまでできません』

『そっかあ。まあ、良いよ。二人ともおいで。でも！ しつかり設定は守ってね』

『はーい』

この会話、僅か一秒。

魂が昇華した人達にとつては造作もない事なのだ。

さて、アイズの方に意識を向けようか。

「アイズさんはどうしてここに？ ダンジョン帰りですか？」

僕の問いにアイズさんは首を横に振る。

「えっと、ちよつと用事があつて。ベルはダンジョン帰りなの？」

「はい、そうですよ。今、仲間の二人が換金に行つていたので、僕はここで待つています」

「そうなんだ」

「おや？ 噂をすればなんとやらですね。来たみたいですよ」

あくまで自然体を装い、あたかも偶然のように二人が来た。

アリアドネの方から口を開いた。

「ベル。お待たせしました。換金は終わりましたよ。つと、もしかして、お話の途中でしたか？」

アリアドネはアイズの方へ向き、確認を取る。

アイズはアリアドネに驚きながらも、答える。

「ん。いや、大丈夫です。えっと、貴方は？」

「これは失礼しました。【劍姫】様。私はアリアドネ・クラネルと申します。こちらは妹のアイルズ・クラネルです」

「よろしく願います。アイルズ・クラネルです」

「こちらこそ、よろしく願います。アイズ・ヴァレンシユタインです。えっと、アイズって呼んでください」

うんうん。どうやら、大丈夫のようだ。

すると、アイズが僕に尋ねてきた。

「えっと、ベル。クラネルってことはもしかして・・・」

「ああ、はい。二人は僕の姉です。確か、二人ともアイズさんと同じ歳ですよ」

「はい。弟がお世話になりました。姉として、感謝を申し上げます」

「あつ、いえ。どちらかと言うと、こっちの方がお世話になったので」

「どうやら、馴染めたみたいだ。」

良かった。『今ここにいるアイズ』は二人の母親ではないにしろ、関係が良くないのは見たくないのだ。

でも、そろそろ日も暮れる。

アイズにも用事があるみたいだし、会話は終わらせないと。

と思ったのだが、三人が仲良く談笑をしている所を見ると、そんな気も薄れてしまうものである。



流石に日も暮れ、心配になって見に来たのかりヴェリアさんが来た。

リヴェリアさんはアリアドネやアイルズに驚いていたが、「すまないな」と言つて、アイズを引つ張り、『黄昏の館』へと帰つていった。

帰り際に、アイズが「今度は二人きりが良いな」という発言にリヴェリアさんは「もつときちんと教育すべきだったか」と呟き、アリアドネとアイルズは「この時からお母様はお母様だったんですねえ」と意味の分からない事を言つていた。

「さて、帰ろうか。二人とも。夕食を準備しようか」

「あつ、私も手伝います」

「私も」

「ありがとう。三人で用意しようか」

「はいー！」

僕達は夕飯の献立を考えながら、帰宅したのであった。

「なあ、アイズ。感じたか？」

「うん。あの二人から精霊の気配がした」

「確か、あの二人はベル・クラネルの姉だったよな？」

「うん。私もそう聞いたし、事実、似ていた気がする」

「だが、ベル・クラネルからは精霊の気配はしないと？」

「うん。もしかしたら、上手く隠しているのかもしれないけど」

「もし、精霊だとして、それも人の形を作り、今まで生きていたとするならば、あの強

さも頷ける」

「うん。そうだね……」

「どうしたアイズ？ 随分と浮かない顔だな」

リヴェリアは私の顔を見て、そう聞いてくる。

「そう思う？」

「ああ、とても残念そうな顔をしている。もしや、あの少年に惚れたのか？」

「分からない。でも、別れる時、すごく寂しくなって、ベルと離れるのが一瞬耐えきれなかった」

「ふーむ」

リヴェリア自体、恋愛経験はないため、これだと断定はできないが、殆どの確率でこれは『恋』だと思う。

なるほど、そうだとしたら、あの少年に感謝しなくてはな。

『人形姫』とも呼ばれるアイズがあんなに感情豊かになっているのだから。

強さも申し分ない。彼ならば、アイズの側にずっといてくれるだろう。

まあ、まだ、少年がアイズに好意を持っているのか定かではないが。しかし、興味は持っているだろう。

でなければ、殆ど初対面の相手に自分の頭を触られるのを許容できるわけがない。美の女神とかなら話は別だろうが。

それに私もどこか彼に惹かれている気がする。

彼の親しみを帯びた視線はどことなく安心感を与えてくれる。

家族として接されているような気分だ。

「ファミリア」も種族も違うのにな。

全く不快さを感じさせない彼の態度にはおそろくだが、万人が魅了される筈だ。

頑張るんだぞ。アイズ。敵は多そうだな。

保護者は娘の未来がどうか幸福であるようにと願う。

ー さて、そろそろ良いでしょうか

ー 遊びはお終い

ー 次からは本当の試練

ー これまでにならないほどの難易度の高さ

ー 彼はどうするでしょうか？

## 第三十話

「ベル・クラネル。準備は良いですか？」

「レフィーヤさん？」

気がつくのと、いつの間にか『黄昏の館』に居た。

もしかして、時間が飛んだのか？

だが、一応時間が飛んだ分の『記憶』——というか『記録』はあるみたいだ。ふむ。アイズが24階層に冒険者依頼<sup>クエスト</sup>で向かったと。

それで、ベートさん、レフィーヤさん、フィルヴィスさんと一緒にそこまで行く事になるのか。

なるほど。それなら、できるだけ急がなければ。

ただ、僕は三人と一緒に行くことはできないが。

「はい。大丈夫です」

「それは良かったです。その戦闘衣バトル・ユニフォームも似合っていますよ」  
「ありがとうございます」

僕の戦闘衣バトル・ユニフォームは真っ黒だ。どちらかというところ『遠征』にも備えて、気配を消す方に重点を置いている。

「では、行きましょう」

「はい」

僕は急いで24階層の食料庫パントリーへ向かった。

僕は今、18階層にいる。三人はここで情報集めをするみたいだが、僕は先に進む事にした。

レフィーヤさんとフィルヴィスさんはともかく、ベートさんは僕の言う事を聞く気がしないから。

——19階層

——20階層

——21階層

——22階層

——23階層

そして、24階層

「さて、当てもなく探す訳にはいかない」

だが、単<sup>ソ</sup>独<sup>ロ</sup>に長い思考与えるほど、ダンジョンは甘くない。

「うっわ。なんて夥しい数のモンスター」



通路で行列を作っていたモンスター達は僕の気配に気づき、一斉にやってきた。

「悪いけど、手加減するつもりは毛頭ない。【ディア・アルゴノウト】」

僕は『雷霆の剣』と『炎の魔剣』を召喚し、双剣を横に薙いだ。

剣から発せられる雷と炎は悉くモンスターを殲滅させた。

もちろん魔石を回収できるほどの余裕はないので魔石ごとだ。

「さて、モンスターの流れに逆らっていくべきかな。アスフィさんなら、そんな決断を取っていいそうだし」

僕は「ファイアボルト」を唱え、身に纏い、身体能力を上げた。

僕が到着するまでなんとか生きててくれ。

僕は通路に蔓延るモンスター達を駆逐しながら、北の食料庫パントリーへと向かった。

しばらくすると、急に景色が変わった。

先程のモンスターの大群と同じぐらい気持ち悪いほどの緑肉の壁。

生きているかのように鼓動するその壁は植物とも言えるかもしれない。

僕は炎の魔剣を振って、その壁を焼いた。

後続もいることだし、再生能力を超えるほどの火力で焼き続けていれば、三人も分かるだろう。

待ってろ。

絶対に皆を死なせない！

僕は駆け出した。

分かれ道を的確に選びながら、走っていると、魔力の流れを感じた。

これは、魔剣か？

アイズが魔剣を使わない。

つまり、「ヘルメス・ファミリア」の団員達か。

どうやら、アイズと分断されたみたいだ。

アイズがああ赤髪ケリィの怪人チャイに負ける事がないのは知っている。

問題は「ヘルメス・ファミリア」の方だ。

この事件で沢山の犠牲者を出す事になる。

それは絶対に避けなければならない。

食人花を打ち破りながら、食料庫パントリーの大空洞に入った

「ヘルメス・ファミリア」を追いかける。

どうやら闇派閥イツイルスの残党達との戦いが始まったらしい。

僕は跳躍し、闇派閥イツイルスの残党達を殺さないギリギリの威力で双剣を振った。

急な乱入者に驚く「ヘルメス・ファミリア」の団員達。

危ないかった。もう少し遅れていたら、自爆されるところだった。

「大丈夫ですか？ 皆さん」

「あ、貴方は？」

皆が驚く中、アスフイさんが対応する。

「話は後です。今は僕が貴方達の助っ人である事だけ理解してください」

「……分かりました」

「ありがとうございます。イヴイルス闇派閥の残党は全員気絶させました。自爆の心配はありません。後で心強い援軍を来ますし、食人花なら、貴方達でも対処できると思います。僕はその白髪の男を受け持ちます」

僕は一方的にそう言うと、「ファイアボルト」を再び纏い直し、白髪の男へと向かった。

「お、おいっ！ って行っちゃった。アスフィ。あいつの事知ってるか？」  
「いえ、知りません。ですが、確実に私より強い。【剣姫】と並ぶかもしれません」

アスファイは持ち前の賢さで白髪赤目の少年の戦闘能力を分析した。  
そして、団員達に指揮をする。

「全員、しっかりと生き残りなさい！ 年下の少年にこれ以上庇われるわけにはいきません！」

『おおおおおおおおおおおっつっ！』

アスファイはいつもならない発破をかけた。

彼の顔と言葉が私たちに希望を与えている。

ならば、それを使わずして何が【万能者】<sup>ベルセウス</sup>か。

私は飛翔靴<sup>タラリア</sup>を起動させ、食人花の大群に対応した。

僕は一気に白髪の怪人——いや、ヴエンデツタ【白髮鬼】オリヴァス・アクトに肉薄した。

そして、『雷霆の剣』を振った。

雷を纏う斬撃が相手に襲う。

その攻撃を防御しながら、オリヴァス・アクトは僕に問う。

「ぐっ！ 貴様何者だ！」

「ただのレベル1の助っ人です」

「そんな訳あるか！ 私に傷をつけられる奴がレベル1な訳ないだろ！ それに何故、身体の傷が再生しない！ この身体は『彼女』に愛されているはずなのに！」

別に嘘は言っていないが、まあ、僕も言われたら信じないか。

「はあ、貴方達の言う『彼女』がそんな高尚な存在な訳ないでしょうに」

「ッ！ 貴様っ！ 『彼女』を知っているのか!? あははっ！ なるほど！ 貴様が私達と同じなら貴様の話も分かってきたぞ！」

何を言っているのだろうかこの人は？

貴方達と一緒にしないでほしいのだが。

「そんな訳ないでしょう。たしかに僕は貴方達の言う『彼女』のことを知っていますが、僕は『怪人』でもなければ、貴方達のような『狂信者』でもない」

そして、僕は詠唱を開始する。

「笑おう！ 例えどんな苦難があろうとも！ 紡がれるは喜劇！ 暗黒の世界を照らす希望の光！ 神々よご照覧あれ！ 私が、始まりの英雄だ！」

「ぐっ、貴様っ！」

僕はオリヴァス・アクトを蹴飛ばして、引き離し、魔法を行使する。

「【ディア・アルゴノウト】！」

その言葉を皮切りに大鐘楼グラントベルが鳴る。

ゴオオン！ ゴオオン！ ゴオオン！

ある所では、希望を照らし

「この鐘の音は！」

「ああ、力が湧いてくるような感じがするぞ！」

「今だ！ 全力で押し返せ！」

また、ある所では、道標アリアドネを示し。

「なんだこの音は？」

「チツ！ おい！ こいつら倒して早く行くぞ！」

「……（兄さん）」

またまた、ある所では、さらなる決意を産んだ。

「なんだ！ 何が起こっている！ ぐっ！」



「この音は、とても温かい。ベル、待ってて、すぐ終わらせるから」  
「舐めるなア！ 『アリア』 アアアア！」

味方には希望を、敵には絶望を与えるこの鐘の音はまさに英雄の如きのもだった。

「くそつ。いでよ！ 『巨大花』<sup>ヴィスクム</sup>！ その餓鬼を殺せえええ！」

大主柱に寄生していたモンスターの内、一体が蠢き、震え、毒々しい花卉を僕へと向ける。食人花とは比べ物にならない大きさのモンスターは例え、上級冒険者であっても戦慄せざるを得ない。

しかし、それは正史でのお話だ。

ここには誰がいる？

完全な盤外<sup>イレギュラー</sup>の英雄。

白き光を纏うその少年によって上級冒険者は誰一人として、絶望しなかった。

それどころか、その怪物に向かって、誰もが向かって行った。

僕は『並行蓄力』を続けながら、オリヴァス・アクトと対峙する。  
ベートさん達も来て、巨大花は皆が押さえつけてくれているから、僕はこいつに集中する事ができる。

「くそっ！ 何故だ！ 何故私が！ こんな餓鬼にいいい！」

「こんな事をしているからでは？」

僕は徐々に力と速さを加えながら、オリヴァス・アクトを追い詰めて行く。

そして、さらなる希望の登場だ。

突然、バントリ食料庫の一角が強大な風で吹き飛んだ。

そこから、赤髪の怪人が血を流しながら飛んでくる。

そして、吹き飛ばした本人は、

「お待ちせ。皆」

「【劍姫】！」

「アイズ！」

荒れ狂う風を纏って、皆と合流した。

「ぐっ！ 例え、【劍姫】が来ようとも、貴様がそれで巨大花を倒す間にお前だけは殺す！」

「何を勘違いしているんですか？ 僕の【英雄願望】は巨大花を倒すためのものではありませんよ？」

「なんだとっ!?!」

「巨大花は僕がいなくてもあの人達で倒せます。僕は貴方の介入を許さなければ良い」

「くそっ！ 舐めるなアアアア！」

オリヴァス・アクトの攻撃は更に苛烈になる。

しかし、僕はそれ以上の力で抑え込む。

そうして、一方的な戦闘を繰り広げていると、アイズが巨大花を一撃で葬ったようだ。ならば、そろそろ良いだろう。

僕はこの部屋を確実に焼却するためにある人の力を借りることにした。

「レフィーヤさん！」「レア・ラーヴァテイン」をお願いします！」  
「はい！」

そうして、レフィーヤさんは詠唱を開始する。

それを知った怪人達は止めるために食人花を使いながら、動くがオリヴァス・アクトは僕が、赤髪の怪人はアイズが。食人花は「ヘルメス・ファミリア」とベートさんとフィルヴィスさんが対応する。

そして、レフィーヤさんの詠唱の時間を稼ぎ続けて、数分。

「ベル・クラネル！ 打ちます！」

「分かりました！ これで終わりです」

そして、放った。

「【レア・ラーヴァテイン】！」

『『神雷の剣』！』『聖火の魔剣』！』

レフイーヤさんの「レア・ラーヴァテイン」は部屋中の食人花を悉く一掃し、僕の一撃はモンスターが寄生している大主柱をモンスターと一緒に滅した。

こうして、最初の試練は幕を下ろした。

## 第三十一話

そして、僕は目が覚める。

今度は59階層への遠征だそうだ。

今は安全階層セーフティポイントの50階層で休んでいる。

僕は他の団員から身を隠さなければならなかったため、フィンさんの天幕にお邪魔している。

ちなみに、51階層からの進攻に参加する選抜メンバーには僕の存在は教えられている。

とりあえず、僕は周辺を探索しながら、少し根拠地ベースキャンプから離れた。

そして、アリアドネとアイルズと合流した。

「二人とも、道中大丈夫だった?」

「大丈夫ですよ。これでもレベル10ですからね」

「でも、心配してくれるのは嬉しい」

二人は無傷でここまで来たようだ。お父さんとしては娘がとても成長していて感激です。

「予定通り、私達は根拠地の護衛ですか？」

「うん。二人は精霊だから、この先に行かせるのは不味いからね」

「分かった。お父様も気を付けてね」

「ありがとう。アイルズ。お父さん頑張るからね」

僕は二人の頭を撫でて、テントへと戻った。

そこまでの道で何やら騒がしい大型の天幕があった。

ラウルさんやリヴェリアさんの声が聞こえる。

もしかして、リヴェリアさんがラウルさん達の緊張をほぐしに行ったのかな？  
すると、リヴェリアさんがもう用が終わったのか、天幕から出てきた。

「おや？ ベル・クラネルか。どうしたんだ？ こんな所で」

「少し、体の状態を確認しながら、散歩ですかね」

「そうか。ほどほどにしておけよ？　明日は大変だからな。まあ、心配はないだろうが」

「いえいえ、ありがとうございます。誰かから心配されるといのは嬉しいですからね」

「そうだな。アイズにも分かってほしいものだが……」

「あはは……」

リヴェリアさんの悩ましそうな顔を見て、僕は苦笑する。

この時のアイズはかなりの戦闘狂。

近頃は大分落ち着いてきたように思うが、それでも特攻する癖は直っていない。今は椿さんと話しているようだけど、色んな人から話を聞いて、自覚し、受け入れられたら、それもまた『強くなる』という事だろう。



日は昇らず、暮れもしない迷宮の奥深くで、時計の針だけが明朝の到来を告げる。

陣地に数多く立つ天幕が階層の薄闇と燐光に包まれる中、少女の手の中にある葉と樹の意匠が刻まれたエルフの銀時計が、ぱちんと蓋を締められた。

劍が、杖が、大双刃が、湾刀が、銀靴が、長杖が、大戦斧が、槍が。

輝きを放つ数々の武器が、多くの冒険者達に見つめられる。

本営に立つ道化師トリックスターの団旗もまた滑稽な笑みを浮かべ見守る最中、小人族バルウムの首領は口を開いた。

「――出発する」

静かな号令とともに、フィンさん率いる【ロキ・ファミア】精鋭パーティは野営地を発つ。

前衛にはベートさんとティオナさん、中衛にはアイズとティオネさん、フィンさん。後衛にはリヴェリアさんとガレスさん。各配置にはサポーターが二名ずついる。僕と椿さんは中衛。これが今回の隊列となる。

前衛は何かぎやーぎやーと言い争っている。

ガレスさんはラウルさんを大声で張り飛ばしている。

意外だったのはレフィーヤさんが落ち着いている事だ。

レフィーヤさんがよく言っている『大木の心』をまさに実行している。その様子にリヴェリアさんは満足そうだ。

「さて、ここからは無駄口はなしだ。総員、戦闘準備」

やがて灰の大森林を抜け、現れた大穴にフィンさんが声を発する。

階層西端の壁面に空いた大穴をパーティ一同は静かに武器を構えながら、見下ろす。長槍を携えるフィンさんは、告げた。

「——行け。ベート、ティオナ」

発進する。

ベートさんとテイオナさんは風になって、急斜面を駆け降りる。

彼らの後に僕達は続き、未到達領域への進攻はここに開始された。

比較的順調に51階層を突破した。

しかし、問題はここからだ。階層無視の竜の砲撃がある。58階層から砲撃『ヴァル  
ガング・ドラゴン』という大紅竜による狙撃。まさに本当の地獄だ。

下からの狙撃を避けながら、そんな事を思い出す。

フィンさんの指示により、リヴェリアさんは防護魔法を用意している。

久しぶりにこの光景を見た。正直、レベル10を超えてから、何とも思わなくなつたが、現在ランクアップを果たし、レベル2となつた僕にとつてはかなり怖い。一応、「ファイアボルト」を体に纏っている事で炎に対する耐性はしつかり上がっているが、それでも致命傷は避けられないだろう。

そんな事を考えていると通路の横穴から太糸の束がラウルさんに迫っていた。

ガレスさんが叫ぶもラウルさんは間に合わない。

しかし、一人の少女が後ろからラウルさんを突き飛ばした。だが、その少女は太糸に腕を絡め取られ、引き剥がされた。

「レファイヤー!?!」

テイオネさんの叫声が響く最中、レファイヤーさんを横穴に引きずり込むのは『デフォルミス・スパイダー』の太糸であつた。

巨大蜘蛛のモンスターはレファイヤーさんを捕食しようとした時、地面からの砲撃に焼かれた。

糸に釣られて宙に浮いていたレファイヤーさんはそのまま階層に空いた大穴に、そのま

ま落下した。

不味い！

そう思ったのと、僕が動き出したのは同時だった。

「フィンさん！ 僕が行きます！」

「頼む！ ベル！」

フィンさんの声に押され、僕は縦穴の壁面を蹴って、直下に疾走する。

『——【ヴェール・ブレス】!!』

落下するレフィーヤさんと僕の全身を包み込む温かな緑光の衣はリヴェリアさんの  
防護魔法。

そして、

「【ファイアボルト】!!」

付与魔法をレフイーヤさんにかけて、炎に対する耐性を上げる。  
そのまま、レフイーヤさんをお姫様抱っこし、

「【ディア・アルゴノウト】！」

僕は自分の足下に『炎の魔剣』を召喚し、それを浮かせ、足場にした。  
それと同時に大紅竜から砲撃が放たれる。

こちらに向かってくる大火球を『炎の魔剣』で防御。熱が来ないように、『炎の魔剣』で完全に吸収した。

「ベル・クラネル！ 飛ワイヴァーン竜が来ます！」

『竜の壺』の横穴から多くの竜が翼を打って飛翔してくる『イル・ワイヴァーン』。  
全く、少しは手加減してほしい。

僕は召喚待機にしていた『雷霆の剣』を召喚し、雷を放出させる。

雷が次々とモンスターに衝突し、『アアアアアアアアアアッ!?!』と絶叫を上げるモンスター達。

『雷霆の剣』で飛竜達を墜落させ、『炎の魔剣』で大紅竜の砲撃を防御する。

このまま下に行けるかと思つたが、次第に処理しきれなくなっている。

双剣の操作に手一杯の僕は唯一の対処法である詠唱ができない。

すると、そんな僕の焦りを感じたのか、レフィーヤさんは口を開く。

「ベル・クラネル！ 私を壁まで投げ飛ばしなさい！ 『並行詠唱』で殲滅します！

貴方はできるだけ私にモンスターを近づけさせないでください！」

「でも！」

「大丈夫です！ 私を信じてください！ 『兄さん』！」

『兄さん』。それを僕に呼ぶのはただ一人。

僕は思わず口角を上げてしまった。

「分かった！ では、頼むぞ！ 『フィーナ』！」

「はい！」

僕はレフィーヤを壁へと投げ飛ばし、双剣は手に戻した。

そして、詠唱を開始する。笑顔で声高々に。

「笑おう！ たとえどんな苦難があろうとも！ 紡がれるは喜劇！ 暗黒の世界を照らす希望の光！ 神々よご覧あれ！ 私が、始まりの英雄だ！」

レフィーヤは着壁した後、下方へと走り出し、詠唱を開始する。

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり。狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】！」

そして、古代の兄妹は魔法を放つ。

「【ディア・アルゴノウト】！」

「【アルクス・レイ】！」

僕の魔法は双剣を昇華させ、【英雄願望】<sup>アルゴノウト</sup>の一秒蓄力<sup>チャージ</sup>で、十字に斬撃を放ち、飛竜<sup>ワイグアーン</sup>の群れを殲滅する。



レフィーヤの魔法はその奥にいる飛竜ワイヴァーンの『強化種』へと、向かい、その『魔石』を貰った。

「やるじゃないか！ フィーナ！」

「そつちこそ！ アル兄さん！」

古代ではまともな連携なんてできなかつた（主にアルゴノウトが弱いのが原因だが）。しかし、兄妹の絆は初めての連携もびつたりにする。

僕はレフィーヤに向かう竜達の砲撃を全弾防ぎつつ切り落とし、レフィーヤは魔法を完成させ一気に殲滅する。

そして、僕はレフィーヤを再びお姫様抱っこし、レフィーヤに広範囲殲滅魔法の詠唱させる。

そして、僕達は深層域58階層に着地し、レフィーヤの魔法が火を吹く。

「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!!」

レフィーヤの【妖精追奏スキャル】の底上げされた広域砲撃に、小型、中型、大型の様々な深

層モンスター達は焼き尽くされていった。

「ロキ・ファミリア」の最高到達階層の58階層。

僕達は何とか下まで着くことができた。

「フィーナ。精神力はどれくらい残っている？」

「まだまだありますよ。少なくとも目の前の七体の砲ヴァルガンク・ドラゴンを倒すぐらいは

「それは良い。ならば、本隊に攻撃がいかないようにこっちで引きつけよう」

「はい！」

そして、僕は再び「英雄願望」アルゴノウトを発動。

ゴオオン！ ゴオオン！ ゴオオン！ ゴオオン！

大鐘楼が巨大な『ルーム』に鳴り響く。

僕はレフィーヤの前に立ち、降りかかる砲撃を切り裂く。

この位置を維持して、双剣と魔法による遠隔攻撃を行う。

僕の『神雷』と『聖火』は竜の装甲すらも貫く。

レフィーヤの魔法も竜の装甲を貫き、魔石を砕く。

そうして、砲ヴァルガンク・ドラゴンを殲滅し終えた頃、57階層との連絡階段から芋虫型新種がなだれ

込んでくる。

「ちよつと休憩させて欲しいかなーなんて」

「無駄口を叩かないでください！ 兄さん」

「ちよつと当たり強すぎない!? ファイーナさん?」

「口よりも手と足を動かしてください！ 芋虫型は魔力に引つ張られるんですから！ 私を守ってください！」

「兄だから、もちろんだとも！ ただ、ちよつと疲れたというか」

「くくくつ！ じゃあ、後でアイズさんに膝枕してあげるよう頼みますから、頑張ってください！」

「よっしやー！ やる気が出たあああー！」

レフィーヤは焦りと羞恥から顔を真っ赤にさせ、僕は疲れを感じさせないどころか全快の時の力でもンスターの大群に突つ込もうとした——その直後。

「【ワイン・フィンブルヴェトル】！」

大吹雪の魔法が階層真北より放たれた。

芋虫型のモンスター達は悉くが氷漬けになった。

そして、氷像と化したモンスター達を矢のように飛んできた金色アの光イと炎雷スの光スが全て打ち砕いた。

すると、モンスター達は長い産出幕間インターバルに入ったのか周囲は全然動かない。

こうして、僕達と本隊は合流した。

アイズ達女性陣はレフィーヤを、古参の三人は僕を労った。

「パーティが二分されたが、58階層を攻略できたか……幸先が良いのか悪いのか」

「多分、良い方だと思いますよ」

「いや、良くはないだろう」

リヴェリアさんの言葉に答えた僕の言葉にフィンさんは苦笑しながら、答える。

そういえば、気になっていることがある。

そう思い、僕はレフィーヤの元へ向かう。

そして、小声で話しかける。

「フイーナ。いつから私がアルゴノウトだと気づいていたんだ？」

「兄さんがスキルを使った時からです」

「え？ まじで？」

「はい。というか、私がスキルの影響を受けていなかったことに疑問を持たなかったんですか？」

「全然。凄いなあって思ってた」

「全く。兄さんは昔から兄さんですね」

「そうやって、僕達は笑い合っている頃、  
遠くの方では、」

「……ベル、レフイーヤ、仲良くなった？」

「どうやらそのようだな。しかし、いくら、二人で窮地を脱したとはいえ、近すぎる気もするが」

「アイズ、このままじゃ、ベルが取られるんじゃないかい？」

アイズが笑い合っている二人を見て小さく呟き、それを聞いたリヴェリアが分析し、

フィンはアイズを揶揄う。

「……ベルはそんなんじゃないもん」

アイズがそう言つて、プイツと顔を背けた。

その様子が可笑しくて、リヴェリアはクスクスと笑つた。

アイズはそんなリヴェリアを見て、顔を真っ赤にしてぽかぽかとリヴェリアを叩く。

その様子を見て、パーティーには和んだ空気が流れた。

## 第三十二話

無事、合流を果たした僕達は少し休憩を挟み、59階層へと足を進める。

「ゼウス・ファミリア」が残した記録では59階層以下は『氷河の領域』。

しかし、寒いどころか蒸し暑い。

連絡路の階段を降り終えた僕達の視界に広がったのは。

氷河もなく、冰山もなく、蒼水の流れもない。

瞳に映るのは、不気味な植物と草木が群生する、変わり果てた59階層の景気だった。

最初に思い浮かぶのは24階層の食料庫<sup>パントリー</sup>。

そんな光景にアイズやベートさんは気を引き締めて、サポーター達は狼狽える。

フィンさんの「前進」という言葉に僕達は動き出した。

やがて、密林は消えて、視界は一気に広がった。

しかし、密林の代わりに出てきたのは夥しい量の芋虫型と食人花のモンスター。

そんな吐き気を催すほどの怪物の大群が囲むのは、巨大植物の下半身を持つ、女体型

だった。

「『宝玉』の女体型モンスターか」

「寄生したのは……『タイタン・アルム』、なのか？」

頬に皺を寄せるガレスさんの横で、リヴェリアさんがとあるモンスターの名を口にす  
る。

確か、深層域に棲息する巨大植物のモンスターだったはず。同胞も冒険者も手当たり  
次第捕食する『死体の王花』。

僕達は気づいてしまった。今自分達が踏んでいる灰色の大地は、全てモンスターの死  
骸なのだ。

そして、今、怪物の下半身に、天女と見紛う上半身を持つ巨大生物が59階層の中心  
で産声を上げた。

誰もが正体不明の存在に戦慄する中、僕とアイズだけはその正体を知っている。

『アリア——アリア!! それにジュピターも!』

アイズを見て『アリア』と、僕を——正確には僕の持つ『雷霆の剣』を——見て『ジュ



ピター』と呼ぶ。

アイズは震える唇を開き、その正体の名を呟く。

「『精霊』……!?!」

団員達はアイズが言った『精霊』という言葉に各々の反応を示す。

皆が『彼女』に視線を向けながら、『彼女』は笑いながら僕とアイズに向かって呼びかける。

『アリア、ジユピター!!』

『会イタカツタ、会イタカツタ!!』

『貴方達モ、一緒ニ成リマシヨウ!?!』

『貴方達ヲ、食ベサセテ?』

そして、『穢れた精霊』は三日月の笑みを浮かべた。

次の瞬間、『魔石』を献上していた芋虫型と食人花が、『彼女』の意思を乗せて、僕達に向かつて来た。

「総員、戦闘準備!!」

誰よりも早く上がるフィンさんの号令

僕達はフィンさんの指示に合わせて、行動を開始する。

女体型は僕とアイズを完全に狙って攻撃をしてくる。アイズへの攻撃はティオナさん達が迎撃する。

まあ、流石に僕を援護するような人はいないため、僕は双剣を振り、焼き払う。

フィンさんは統率者の仮面が罅割れ、今にも剥落しようとしている。そんな状況と共に起きた事が僕以外の全員が驚愕した。

『火ヨ、来タレ——』

呪文うたが奏でられる。

巨大な下半身のもとに展開される広大な魔法マジックサークル円。

禍々しい紋様と立ち昇る紅の魔力光が、女体型の全身を包み込んだ。

僕は『超長文詠唱』による「ファイアーストーム」だと判断し、詠唱を止めるために動き出す。

フィンさんがリヴェリアさんに結界を張るように叫び、団員に詠唱を止めるように命令するが、『魔剣』の同時射撃もレフィーヤの魔法も女体型には一切傷が付かなかった。

『ディア・アルゴノウト』は間に合わない！

そう断じた僕は、直ぐに『英雄願望アルゴノウト』を発動し、『雷霆の剣』に光を収束させる。

『猛ヨ猛ヨ猛ヨ炎ノ渦ヨ紅蓮ノ壁ヨ業火ノ咆哮ヨ突風ノ力ヲ借り世界ヲ閉ザセ燃エ  
ル空燃エル大地燃エル海燃エル泉燃エル山燃エル命全テヲ焦土ト変エ怒リト嘆キキノ

号砲ヲ我が愛セシ英雄カレの命トキノ代償ヲ——』

『舞い踊れ大氣の精よ、光の主よ。森の守り手と契りを結び、大地の歌をもつて我らを包め。我等を囲え』

女体型とリヴェリアさんの同時詠唱。

この調子じゃ20秒しか蓄力チャージできない！ それに！  
全く的に近づけない。

一体一体が大した事は無くても量が多すぎる。その上で詠唱を続けながらも無数の触手でモンスターすらも巻き込んで薙ぎ払う。

『【代行者ノ名ニオイテ命ヅル与エラレシ我が名ハ火精サラムンダー靈炎ノ化身炎ノ女王オウ——】

くそ！ 間に合わない！

僕は攻撃を諦め、仲間を守る方を選択する。

「——総員、リヴェリアの結果まで下がれ!!」

フィンさんは趨勢を見極め、退避を命じる。最前線にいた僕は「ファイアボルト」を唱え、一気にリヴェリアさんの元まで下がった。

「大いなる森光の障壁となつて我等を守れ——我が名はアールヴ！」

リヴェリアさんは最硬の防護魔法が行使した。

「ヴィア・シルヘイム！！」

リヴェリアの足元に展開されていた翡翠色の魔法円マジックサークルが光輝を放ち、そのままドーム状の緑光領域へと変貌した。術者を含め14名の冒険者を全て包み込む。

物理・魔法攻撃を全て遮断する『結界魔法』の展開——それとほぼ、同時。詠唱を終えた女体型は、『魔法』を発動させる。

『ファイアーストーム』

世界が紅に染まった。

火炎の精霊を彷彿させる、極大の炎嵐。

灼熱の世界と隔絶される僕達は障壁の外の光景に立ち竦む中。

ピキツ、ピキツ、と。

今まで傷一つ付くことがなかった最強魔導士の結界魔法に、亀裂が生じる。

フィンさんはガレスさんに命令し、僕も動く。

ガレスさんはリヴェリアさんの背後に躍り出る。

僕はその横に立ち、結界が割れた瞬間、リヴェリアさんの前に立てるように準備した。

そして、次の瞬間、リヴェリアさんの結界魔法が甲高い音を立てて砕け散った。

リヴェリアさんが紅蓮の濁流に呑み込まれる前に、僕はリヴェリアさんの前に出て、

30秒蓄力した『雷霆の剣』を地面に突き刺し雷を放出し、結界の如く展開する。

「ベルツ！」

「兄さん！」

アイズ、リヴェリアさん、レフィーヤさんが僕を心配する声を出す。



だが、立たなければならぬ。

立たなければ、守る事もできない。

立て！ 立つんだ！ ベル・クラネル！

そんな自分への発破すらも絶望へと落とすかのように、更なる詠唱が。

『【地ヨ、唸レ——】』

女体型は微笑みながら詠唱を始める。

展開される黒の魔法<sup>マジックサークル</sup>円。先程とは異なる漆黒の魔力光。

魔法執行直後の硬直を介さず再詠唱に入った怪物に僕達は凍りつく。

『【来タレ来タレ来タレ大地ノ殻ヨ黒鉄ノ宝閃<sup>ヒカリ</sup>ヨ星ノ鉄槌ヨ開闢ノ契約ヲモツテ反転セヨ空ヲ焼ケ地ヲ砕ケ橋ヲ架ケ天地<sup>ヒトツ</sup>ト為レ降りソソグ天空ノ斧破壊ノ厄災——】』

詠唱量が落ち、すぐに砲撃は撃ち出される。

『【代行者ノ名ニオイテ命ジル与エラレシ我ガ名ハ地精霊<sup>ノイム</sup>大地ノ化身<sup>ノオウ</sup>大地ノ女王——】』



—』

僕は何もできずにその歌を聞いていた。

『メテオ・スウォーム』

魔法<sup>マジックサークル</sup>円の輝きが直上に打ち上がり、階層天域が闇と光に包まれる。

膨大な『魔力』が収束し、次には黒光の隕石群が姿を現した。

「ラウル達を守れッ!」

フィンさんの叫びに僕は双剣を支えにして立ち上がり、パーティの真ん中まで移動し、今ある精神力<sup>マインド</sup>を総動員し、魔法を使う。

「【ファイアボルト】 オ!!」

無詠唱で出された炎雷はパーティ全員を包み込み、残った炎雷はパーティの頭上に壁

となつて展開する。

くそっ！ 全部防げない！ 少しでもダメージを減らさないと！  
そんな僕の思いも皆も等しく吹き飛ばされた。

立て。

立て！

立て！！

立つんだ！！

今ここで立たなければ、『英雄』ではない！

今ここで吠えなければ、『英雄』ではない！

今ここで進まなければ、『英雄』になんてなれはしない！！

僕はまだ生きている！

僕の手足は繋がっている！

ならば、立てるだろう！

そうだろう！

ベル・クラネル！

絶大な破壊を齎した女体型は『魔力』を再蓄積する。リチャージ

その光景は皆の闘争心を風前の灯火と化させるのは充分だった。

ベートもテイオナもテイオネもレファイヤーもラウル達サポーターも。

そして、アイズもリヴェリアもガレスも。

しかし。

しかしだ。

それでも立つ者はここにいる。

この光景を見ても尚、立ち上がる者が二人いた。

ベルとフィンだ。

ベルはボロボロの身体に鞭を打って、立ち上がる。

フィンは汚れた顔を右腕で乱暴に拭い、立ち上がる。

そして、ベルは双剣を召喚し、フィンは地に転がっている長槍を拾い上げ、遙か前方、  
禍々しい精霊達と対峙した。

ベルは剣を、フィンは槍を地面に突き立てる。

そして、フィンは言った。

「あの怪物を、モンスター討つ」

瞠目する冒険者達を、横顔を向けて見やりながら、

「君達に『勇氣』を問おう。その目には、何が見えている？」

「恐怖か、絶望か、破滅か？ 僕の目には倒すべき敵、そして勝機しか見えていない。  
——ベル。君はどうだい？」

フィンさんは横にいる僕に尋ねてくる。

僕は確固たる意志を持って、笑いを浮かべ答える。

「僕達が怪物に勝利する『英雄譚』が」

僕はそう言い、詠唱を開始する。

「【笑おう！ たとえどんな苦難があろうとも！ 紡がれるは喜劇！ 暗黒の世界を

照らす希望の光！ 神々よご照覧あれ！ 私が、始まりの英雄だ！」

「【ディア・アルゴノウト】！」

僕は『神雷の剣』と『聖火の魔剣』を持ち、【英雄願望】<sup>アルゴノウト</sup>の発動。

ゴオオン！ ゴオオン！ ゴオオン！ ゴオオン！

大鐘楼<sup>グランドベル</sup>を鳴らす。

さらに――

「【ファイアボルト】」

神雷と聖火を身に纏い、背中から翼を作り出す。

異端児<sup>ゼノス</sup>のレイさんの羽とアスフィさんの飛翔靴<sup>タラリア</sup>を参考にした物だ。

そして、少し浮き、滑空して、最高速で女体型へ向かう。

それを見ていたパーティは一人ずつ確かに立ち上がった。

その様子を見たフィンは苦笑しながら、

「退路などもとより不要だ。何より、彼が道を切り開いている。君達は彼に背を向けて逃げるかい？」

そう発破をかける。

その発言は皆の闘争心に先程の業火にも負けない炎を産んだ。

「言われんでも分かつとるわい！」

「少年に守られて終わるわけがない！」

「——負けてられつかッツ!!」

「……上等じゃない！」

『『冒険』……しなきゃね!』

「私は……ベルの隣に立つ！」

「兄さんには……負けられません！」

各々が叫び、更なる決意を胸に秘める。

その様子にラウル達サポーターは涙がこぼれ落ちそうになる。

「斧を寄越せええ!!」

ドワーフの激声にサポーターが大戦斧《グランドアックス》をぶつけるように手渡す。

「お前達、私を守れ!!」

『はいっ!!』

そして、傷付いた体で杖を構え、リヴェリアは翡翠の魔法円マジックサークルを展開する。

あらゆる行動を捨て詠唱のみに専心する都市最強の魔導士に、ラウル達も声を揃え従った。

「……いいものを見た。手前も一助となろう」

椿は太刀を構え、戦列に参加する。

冒険者達の最終決戦ラストバトルが幕を開けた。

僕は芋虫型や食人花を斬り伏せながら、道を開ける。

そして、後ろから「ヘル・魔ファイネガス」法を使ったフィンさんが来た。

好戦欲を引き出し、能力を大幅に上昇させたフィンさんと更に迫り来るモンスター達を虐殺していく。

『「火ヨ、来タレ——」』

女体型は魔法を行使しようと詠唱するが、フィンさんの槍の投擲によりイグニス・ファトウス魔力暴発を発生させた。



流石はフィンさん！

しかし、女体型はすぐに傷を塞ぎ、詠唱する。

すると、レフィーヤが『並行詠唱』しながら、追いついてきた。

「どうか——力を貸し与えてほしい」——「エルフ・リング」

『突キ進メ雷鳴ノ槍代行者タル我方名ハ雷精<sup>トニトルス</sup>靈雷ノ女王<sup>オウ</sup>——』

「短文詠唱?!」

一瞬で用意された砲台にテイオナさんが驚倒する。

僕は詠唱式から察して、『神雷の剣』で防御しようとしたが、背後からの歌を聞いて、このまま走る事に決めた。

「——【盾となれ、破邪の聖杯<sup>さかすま</sup>】!!」

レフィーヤは敵の短文詠唱を超える超短文詠唱をもって、友の『魔法』を発動させる。

『サンダー・レイ』

「【ディオ・グレイル】!!」

間髪入れず、聖なる白盾と雷の大鳴が衝突した。

「行け！ フィーナ！」

「レフィーヤアツ?!」

「踏ん張れええええええ——ッ!!」

「——ッ!!」

そして、二つの『魔法』は相殺され、障壁に張り付いていたティオナさんとティオネさんは当然のように吹き飛び、魔法は行使していたレフィーヤも凄まじい勢いで真後ろに飛ぶ。

しかし、僕たちは振り返らずに前へ進む。

女体型との距離は50Mメートルを切ろうとしていた。

そして、美しき声で紡がれた王族ハイエルフの魔法が炸裂する。

「レア・ラーヴァテイン」!!」

無数の炎柱が生まれ、女体型の鉄壁の装甲を焼け落とした。

その炎と熱気に押され、更に加速する。

残り30M<sup>メートル</sup>。

女体型は甲高い声を上げ、地面から夥しい緑槍が打ち出された。

その壁に対し、ベートさんとフィンさんが渾身の刺突を繰り返す。

しかし、突き破れない。

突撃の勢いが止まる。戦況が覆される。

そんな考えが頭をよぎるが、背後から高速回転する大刃が飛んできて、緑壁にぶち当たった。

ガレスさん!

ガレスさんは僕達を追い抜かし、壁へと突っ込んだ。

「なんじゃあつ、口だけかお主ら!」

ガレスさんは獯猛に口を吊り上げ、食い込んだ《グラント・アックス》を引き抜き、も

う一度破壊の一撃を叩き込む。

ガレスさんの攻撃によって亀裂が入った壁にベートさんとフィンさんも更なる攻撃を叩き込む。

「そんな訳あるかあ！」

「ふっ。そんなはずないだろう？」

そして、壁に穴が空いた。

「行け！ ベル！」

「行きやがれ！ アイズ！」

僕とアイズは三人が開けてくれた穴に突っ込む。

残り10M<sup>メドル</sup>。

『——アリア！ ジュピター——！』

女体型は最初のように二つの名を呼ぶ。

しかし、最初と違うのは声が悲痛になっている所だろう。  
もうすぐだ。

もうすぐで『君』を救える。

「アイズッ！」

「うんッ！ 【吹き荒れろ】——」

『——イヤア！ 【閃光ヨ駆ケ抜ケヨ闇ヲ切り裂ケ代行者タル我が名ハ光精靈光ノ化身光ノ女王——】』

「ベル、アイズ……」

リヴェリアさんが眩く。

「やれい」

ガレスさんが瞳を細める。

「いけえー!!」

ティオナさんとティオネさんが吠える。

「ブチかませ」

ベートが告げる。

「頼んだよ」

フィンさんが笑う。

「兄さん、お姉様」

レフイーヤはその光景に『古代』を思い返す。

そして、

「ハアア！」

「リル・ラフアーガ」

『「ライト・バースト」』

1分蓄力した神の炎雷と神風、精霊の光がぶつかり合った。

いや、僕達は白の閃光を消し飛ばし、突き進んだ。

そして、三つの剣は女体型を貫き、次の瞬間、巨体は爆砕した。

魔石を貫かれ、灰となった女体型の体は僕の炎雷とアイズの風によって吹き飛んだ。

その最中、不意に声が聞こえてきた気がした。

『ありがとう。私を救ってくれて』

僕はその言葉を聞き、意識が落ちた。

## 第三十三話

目の前が真っ暗だ。

僕は意識が覚醒すると、真っ暗な空間にいた。

ここは何処だろうか。

とりあえず、体は動かせるみたいだから、歩いてみよう。



どれくらい歩いただろうか？

数秒？ 数分？ 数時間？ 数日？ 数ヶ月？ 数年？

最早、そんな事も分からないぐらい僕の体感は狂っていた。

それでも、僕は歩みを止めない。

これが試練だと分かっているからだ。

これは僕の精神面における試練。

真つ暗で、一人で、ただ歩く事だけの試練。

今の僕にとつては全然辛くないのだが、何せずつと歩いているのだ。

流石に暇になってきた。

そこで、僕はちよつと昔を思い出す事にした。

ちよつと昔と言っても、転生のちよつと前のことだが。

今にして思えば、あの時の僕は何処かおかしかった。

たまたまアイズの願いを聞いた僕が、たまたま転生する方法を見つけ、たまたまフレイヤ様にそれが見つかって、たまたま特訓をさせてくれて、特訓が終わると同時にたまたま転生する時間だった。

こうしてみると、中々に踊らされている気分になる。

そして、この試練によって、アリアドネ、アイルズ、フィーナと会うことができた。どうやら、フィーナはアリアドネ達と同じように試練の世界に生まれた存在ではないらしい。本人から、僕と同じ世界から来ていると言っていた。

ただまあ、「前世も前前世も兄さんと一緒でしたよ？」と言われたのはかなり驚いたが。

その上、「アリアドネちゃんとアイルズちゃんは貴方達に置いてかれて寂しかったようですよ？」と言われた。

その発言と試練の時に見た夢の内容。

それらから、完全な『黒幕』を発見する事ができた。

それに、今のこの状況。

僕と魂が繋がったアリアドネ、アイルズ、レフィーヤは僕の所に来ていない。

この世界に干渉できるのは僕含めて二人のみ。

そして、僕が「ロキ・ファミリア」の団員である事。

他派閥間の恋愛は禁止されている事。

つまり、僕をここまで来させたのは――

『アイズ』、君だったんだね。

「おめでとう、ベル。【英雄の試練】は突破できたよ」

そこには僕が知っている9歳のアイズが笑顔でいた。いつもの無表情さは無く、前世でも見た表情の豊かさ。

ああ、そうか。

君はずっと僕の側にいたんだね。

全く、そんなに遠回しな手段じゃなくて、別に直接的に言えば良かったのに。

「君は僕を疑似的に神に至らせるために、これを企てたんだね？」

「うん。そうだよ。これは私の我儘。ずっと貴方と一緒に生きていたいから。私はほぼ完全に精霊になったから、寿命という概念からは外れたけど、ベルは人間だから」

ああ、全く。僕の妻は本当に可愛い。

本当に可愛いから、何でも許してしまうんだ。

「確かに疑似的に神に至れば、僕は死ぬ事は無いし、年を取ることもない。となれば、あの二人の発展アビリティも何となく予想がつく」

「ふふつ。娘達の発展アビリティの『神聖』は神に近づくという効果。当然、私も持っているし、精霊ってだけじゃ問題はあつたから」

「だから、さつき『ほぼ完全』って言ったんだね。ってことは、僕も試練突破したら、発現しているのかなあ。というか、そもそも【魔法】も【スキル】も既に結構変わって

いたけど」

アイズは「ふふっ」と笑う。

そういえば、

「今、この状況って、エレボス様達に見えるの？」

「一応ね。何なら、今呼び出す？」

「お願い」

「はい」

アイズは軽く指を振ると、僕から見て、右側に三人が現れた。三人は急に見ていた風景に自分達が来たから、驚いている。

「驚いた。まさか、このような空間があるとは」

「ああ、そうだな。俺も初めて見たぞ」

「神である俺すら知らない物って何だよ……」

アルフィア義母さんはあまり開くことのない両目をしっかりと開けて、驚きを口にす  
る。

ザルドさんはこの空間なら周囲を気にせず戦えそうだとか言ってる。

エレボス様はどうやら疲れたようだ。しかし、僕に聞かなければならない事があるた  
め、すぐに顔を引き締める。

「試練の様子は見させてもらった。最早、お前は英雄である事に疑いはない。よつて  
聞こう。英雄、お前の『正義』とはなんだ？」

僕は何も悩む事はなく、即答する。

「僕の『正義』は『理想』。『夢』も『綺麗事』も『幻想』も、全てを實現してみせる『英  
雄』。僕は家族を、仲間を、大切だと思つた人達を、皆を救う『英雄』になりたい」

「たとえ、偽善者だと罵られても？」

「はい。僕は偽善を善にし、不可能を可能にし、『理想』を成し遂げる事が、自分の『正  
義』です」

僕はハッキリとそう答えた。

アイズは僕の考えにうんうんと頷く。

エレボス様はクツクツクと笑っている。

それをアルフィア義母さんが諫める。

「おい、エレボス。笑いすぎだ」

「クツクツク。いや、すまない。嬉しかっただけさ。喜べ、二人とも。彼は『本物』だ。

『本物の英雄』だ」

「お前に言われなくとも、分かっている」

「あつはつは！ やはり、『アイツ』とは全然似ていない！」

「何度言わせるつもりだ、ザルド。ベルはメーテリアに似ているんだ。あんな屑の一片もベルに入っているわけないだろう」

アルフィア義母さん……。本当に僕のお父さんが嫌いなんだね……。

まあ、僕も会った事もない父を庇う事はできないし、そもそも良い話を全然聞かないんだよなあ。

「おっと、そろそろ俺達は戻るとしよう。お前の真価は理解した。次はオラリオの真価を計りに行く。ではな、英雄。次は戦場で会おう」

「受けて立ちます。あっそうだ。僕達が勝ったら、後できっついお仕置きが来ると思っていて下さいね？」

「……非常に嫌な予感がするが、まあ良い」

そうして、この空間からエレボス様が消えた。

「よし、ベル！ 戦場では俺と戦え！ 試練でお前が戦っている時からウズウズしていたんだ。約束だ」

「あつ、うん。ザルドさんは本当に変わらないね……」

ザルドさんが消えた。

「ベル」

「どうしたの？ お義母さん」

「私とも戦うぞ」



「はい？」

「私を差し置いて、ザルドがお前と戦うのは気に食わないんだ」

「お義母さん……」

「だから、私に勝って、私を奪ってくれよ？ 私の英雄？」

「……ッ！／＼／＼」

アルフィア義母さんは最後に僕の耳元で囁き、消えた。

この前の仕返しかな？ 思わず反応しちゃった。

そして、僕は赤くなった顔を戻しながら、アイズと向き合う。

いつの間にか、アイズの姿は前世のような少し大人びた女性にまで成長していた。

「アイズ」

「なに？」

「さつきはああ言ったけど、それでも僕は『アイズの英雄』を辞めるつもりはないからね？」

「ふふつ、分かってるよ。貴方は私が欲しいんだもんね？」

「……あまり、そういうのをさらっと言わないで」

「ふふつ、ごめんね。でも、可愛いよ、ベル」  
「ムー」

僕は再び顔を赤くしながら、唸る。  
すると、アイズは僕を抱きしめた。

「アイズ？」

「貴方は一人じゃないよ。たくさんの方が貴方を愛してくれる。だから、大丈夫だよ」

「……ねえ、アイズ」

「ん？ どうしたの？」

「もしかして、今世で自分に好意を向けている人達ってさ、アイズが結構関係しているんじゃない？」

そう言った瞬間、アイズは体をピクツとさせた。  
確定だな。これ。

「な、何の事か分からないわ？」

「そうかそうか。正直に言ってくれたら、あつちに帰った時に甘えさせてあげようと思つたのに」

「全部、私がそうなるように企てました!」

「素直でよろしい」

まあ別に、洗脳とかじゃなくて、そうなりやすいイベントを作っただけで、見事にその選択肢を取つたのは僕なんだけどね。

「それに、娘達と妹を連れてきたのもアイズでしょ?」

「そうね。三人は特にベルの事を好いていたし、ベルにとつても良いかなあつて思つて」

「まあ、良かったけどさ。わざわざ、三人を悲しませて、こつちに来るように仕向けたのは、やつたのは僕じゃなくても罪悪感が……」

「ふふつ。貴方があつちに戻つたら、もれなく娘達は来るわよ? レフィは今、学区の筈だからいないと思うけど」

「妹に会うのはまた別の機会にとつておくよ。そろそろ戻ろうか。僕達が戻らないと世界は止まったままだし」

「そうね。じゃあ、またねベル」  
「またな、アイズ」

そうして、僕達もこの空間から出たのであった。

## 第三十四話

そうして、僕は現実世界で目を覚ました。

「あつ、起きた？」

「うん。今、どういう状況なの？　アイズ。僕がおぶられている気がするんだけど」  
「その通りだよ」

起きたら教会・・・ではなく、アイズにおぶられていた。  
アイズの様子から察するに僕は「英雄の試練」が終わった後も、眠っていたようだ。  
だから、様子を見ていたアイズが僕を運んでくれているみたいだ。

「お父様起きましたか？　随分とお疲れだったようで」  
「よしよし」

二人とも……。僕が小さくなったからってここぞとばかりに撫でてくる。僕も疲れ  
ているから、体が動かさず、抵抗もできない。抵抗できても、アイズに抑え込まれるだろ  
うけど。

「こういうの、良いね。久しぶりに親子が揃ったよ」

「見た目的に逆に見えるだろうけどね」

「お母様とお父様が私の子供。そういうのも良いですね！」  
「来世に期待してくれ」

アリアドネの興奮に僕は何とも言えない気持ちで答える。

「ごめん、アイズ。もうちょつと寝る」

「うん、良いよ。『黄昏の館』に着いたら、起こすから」

「うみゆ、ありやと」

僕は眠気でもう呂律が回らず、意識はまた闇へと落ちる。

温かな風に包まれて。

アイズは自分の愛しい人が再び寝たのを確認すると、「風」エアリエルを起動させ、包み込む。その様子を見た愛しい娘達が微笑を浮かべながら、私に話しかける。

「お母様は本当にお父様が大事なんですね」

「私もおんぶしたい」

「良いわよ？ どっちがおんぶしたい？」

「じゃあ、アイルズからどうぞ？」

「ありがとうございます。お姉ちゃん」

どうやら、決まったようなので、私は風を操り、ベルを浮かし、アイルズの背中へと持っていく。

「ふふっ。可愛いね、お父様」

「じゃあ、アリアドネ。私をおんぶして」

「えっ？ はい、分かりました。どうぞ？」

私はしゃがんだアリアドネの背中に乗り、頭を撫でる。

「んっ、ありがとうございます。よしよし」

「ありがとうございます。お母様」

ああ、温かいなあ。これは寝ちやいそう。

「私も少し寝るから、『黄昏の館』に着く前に起こして」



「はい、分かりました。では、しばらくお眠りください」  
「うん・・・すう」

そうして、私も微睡む事にした。

うーん。

何やら、騒がしい。

そろそろ起きないと。

僕はそう思い、目を擦りながら開けると、

「ベルとアイズを返すんだ！ 誘拐犯め！」

「私達は誘拐犯じゃありません！ 私達は二人の娘ですから、正当な権利です！」

「何が娘だ！ 二人はまだ子供だぞ！」

「ああもう！ この人話通じない！」

な、何が起きているんだ？

起きたら、目の前でリヴェリアお姉ちゃんとアリアドネが喧嘩していた。

そして、アリアドネの背中ではアイズがすうすう寝ている。

この喧騒でも寝ていられるのか・・・凄いな。

「二人とも、『落ち着いて』」

「ッ！」

恒例の少量の殺気を混ぜた声で落ち着かせる。

二人は僕の声に反応し、肩で息をしながらこつちを向く。

「お、お父様！ それは心臓に悪すぎると仰ったでしょう!？」  
「べ、ベル！ 私が悪かったから、それは辞めてくれ！」

あれ？ 過剰すぎない？

僕はそう思いながら、周りを見渡すと、武器に手を掛けかけたフィンさんとガレスさん。眠りから覚めて、びっくりしているアイズ。笑い転げているロキ様。そして、ちよつと震えて僕を背負っているアイルズ。

あつ、やばい。ちよつとやり過ぎちゃった。

「ごめんね、アイルズ。ちよつと下ろしてもらっていい？」

「は、はい」

アイルズは僕が下りやすいようにしゃがんでくれた。

ああ、うん。ごめんねアイルズ。よしよし。

アイルズの頭を撫でると、アイルズは「あう〜」と言って、涙目で僕に抱きつく。  
あつ、ちよつと力強い。レベル5で良かった。

「それで、一体どうしたの？」

「あ、えつとですわねー」

愛娘説明中……

「あー、なるほど。アリアドネとアイルズが寝ている僕とアイズを背負っていたから、二人が僕達を誘拐したとリヴェリアさんが勘違いした、と？」

「す、すまなかつた。少し、冷静ではなかつた」

「いえ、私の説明不足でもありました。こちらこそ、すみませんでした」

リヴェリアさんは僕やアイズが絡むと少々ーいや、かなり暴走する。アリアドネも普段はしっかり者だけど、たまにやらかすからね。二人ともそういう所が可愛いのだけど。

「まあ、事情を理解できたのなら良かった。そういえば、二人は【ロキ・ファミリア】に入るの？」

「えつと、入れてくださるのなら嬉しいのですが……」

アリアドネはチラツとロキ様を見る。

「ん？ 自分はええと思うで？ フィンはどうや？」

「僕も歓迎しよう。ベルとアイズの娘なら尚更だ」

どうやら、ロキ様とフィンさんは歓迎的なようだ。

良かった。

あつそうだ。

「ロキ様。アリアドネとアイルズの改コンバージョン宗と一緒に僕とアイズのステイタス更新もお

願います」

「ん？ ええけど、ダンジョンに行ってきたんか？」

「いえ、【英雄の試練】を・・・」

僕はそう言いかけた瞬間、ロキ様は僕を抱えて、応接室を飛び出し、部屋へと連れ込んだ。

「えと、あの？」

「……」

ロキ様は無言で僕の服をめくり、ステイタス更新を始める。

怖い怖い怖い！

えっ何、いったい何？

そして、ステイタス更新を終えたロキ様はプルプル震えだした。

「えっと、ロキ様？」

「な」

「な？」

「なんじゃこりゃあああああああああああああ!!!」

ロキ様の叫び声が『黄昏の館』中に響いた。

ベル・クラネル L.V. 5

『力』 SSS 1892

『耐久』 SSS 1984

『器用』 SSS 1867

『敏捷』 SSS 2063

『魔力』 SSS 2236

幸運 D 純粹 E 英雄 S 昇華 S 神聖 S

【魔法】

【ファイアボルト】

・速攻魔法

・付与魔法に変化可能

・昇華時、『神雷』と『聖火』を纏う

【ディア・アルゴノウト】

・召喚魔法

・速攻魔法

・『雷霆の剣』『炎の魔剣』を召喚

・追加詠唱式『笑おう！ 例えどんな苦難があろうとも！

紡がれるは喜劇！

暗黒

の世界を照らす希望の光！ 神々よご照覧あれ！ 私が、始まりの英雄だ！

・『雷霆の剣』を『神雷の剣』、『炎の魔剣』を『聖火の魔剣』に昇華

・自動的に【英雄願望】の発動

【スキル】

ベル・クラネル

【原点回帰】

・【英雄の試練】【英雄願望】アルゴノクト 使用可能

・【憧憬一途】リアリス・フレイゼ 【眷属冒険譚】メモリア・フレイゼ 【理想】発現

・【ファイアボルト】 昇華可能

・【英雄願望】アルゴノクト 強化

【原点回帰】アルゴノクト 幻想

・自分の船理想に乗る者の数に応じて自分のステータス超高補正

・自分の船理想に乗る者同調にステータス超高補正

・絶望に屈さず、希望を掲げる限り効果持続

【精霊の救い手】

・身体組成を高次元へと昇華可能

・魂において思考、行動可能



## 第三十五話

「だ、大丈夫ですか？ ロキ様」

「大丈夫なわけあるかい!? なんや、この「ステイタス」!? もはや、原型留めてないで!」

「い、色々あったので……」

「その『色々』を話すんや!」

「えと、あのですね」

と、とりあえず、エレボス様達の事は言わずに前世の追体験をしてきた事を言えば良  
いかな?

少年説明中……

「——というわけです」

「ベルたん……。ヤバすぎるで、それ。『前世』で起きた大事件をレベル1、2で解決して来たって。逆にランクアップしてないのがおかしいとも言えるんやけど」

「あつ、多分それはあくまで【英雄の試練】の中での『偉業』だからだと思えます。本来は【英雄の試練】を達成する事自体が『偉業』になりますが、僕自身に掛けた【英雄の試練】は少し特殊なので、『偉業』を達成するための設定にそもそもしていないからだと思います」

「なるほどなあ。というか、あの三人の【ステイタス】の更新したくないんやけど」

「諦めて頑張ってください。アイズはともかく、アリアドネとアイルズは前よりまともなっているはずなので、多分、大丈夫ですよ？」

「なんで、最後に疑問系になるねん！ めっちゃ不安になるやないか！」

あつはつはつは。アリアドネとアイルズの【ステイタス】は僕に引っ張られて低下しているはずだから、この前確認したようなチート染みた【ステイタス】ではなくなっている。だからというわけではないが、まだマシだろう。

「すまんなく、ベルたん。アイズたんを呼んでくれへん？」

「分かりました」

僕は部屋を出て、先程の応接室に戻る。

「アイズ。ロキ様が、部屋まで来いって」

「ん。分かった。行ってくるね、皆」

アイズが部屋を出て、僕は椅子に座る。

「さっき、何かあったのかい？」

「ああ、いや、ちよつと僕の【ステイタス】で……」

フィンさんに尋ねられた僕は新しい【ステイタス】を写した用紙を机の上に置いた。それをフィンさんが取って見ると、急に笑い出した。そんなに面白い？

「あつはつは！なるほど、これは確かにロキが叫びたくなる気持ちも分かる」  
「どうしたのだ、フィン？ 私にも見せろ」

リヴェリアお姉ちゃんはフィンさんから用紙を奪い取り、その内容を見ると、「ふつ」と言つて微笑を浮かべる。

リヴェリアお姉ちゃんも？

「ベル。どうやら、私達の様子があまりよく分かつていないようだな」

「うん。全然分からない。僕の「ステイタス」に何か面白いことでもあった？」

フィンさんは僕の問いに笑いながら答える。

「ベル。分かつてないのかい？ 要するに君はほぼ不老不死のようなもの。全盛期までは成長するだろうから、現時点では不老とは言えないから、『ほぼ』なんだけどね。まあ、それは置いといて、要するに僕達は『君が死ぬ』事がないと「ステイタス」上で証明されたからね。安心したんだ。リヴェリアは僕以上だと思うけどね」

フィンさんの最後の言葉にリヴェリアお姉ちゃんは「うつ」と言い、顔を赤くする。

「コホン。冒険者は『冒険』とは切っても切り離せないものだ。『冒険』とは常に危険を伴う。だからこそ、お前が必ず帰ってくる事ができるような存在になつてくれて、安心しているんだ。……ただし！ だからといって、無茶をしても良い訳じゃないぞ！ お前も一人の少年で普通の心を持っている。だから、自分の命を顧みない行動だけはやめてくれよ？」

「うん。お姉ちゃん、ありがとう」

「よしよし。お前は良い子だな」

リヴェリアお姉ちゃんは僕の頭を撫でる。

やっぱり家族は温かい。

ずっとこのままでもいい。

だから、皆。

僕の前からいなくならないでね？

アイズはロキの部屋に着き、扉をノックする。

「アイズです」

「入ってええよ」

「失礼します」

私はいつも以上に丁寧な言い方で入った。

「そんじゃ、服脱いでそこに座ってな」

「変な事したら【エアリエル】します」

「それ、洒落になつたらんで!？」



そして、ロキは頭を押さえて「なんやねんこれ？ ヤバすぎるやろ」と何度も呟きながら、私に用紙を渡してくる。  
 私はその用紙を確認すると、

アイズ・クラネル L.V. 5

『力』SSS 2082

『耐久』SSS 2158

『器用』SSS 2047

『敏捷』SSS 2156

『魔力』SSS 2349

精霊S 聖風S 英雄S 神聖S 劍神S

《魔法》

【エアリエル】

・付与魔法

・風属性

・第一詠唱式『テンベスト聖なる風よ』



・第二詠唱式『白く輝け』クラネル

・第二詠唱式により出力増大

・第二詠唱式により神聖性を付与

【精霊の奇跡】

・回復魔法

・【エアリエル】発動時、効果上昇

・詠唱式『母なる風よ、どうか私に力を貸して』

・自分が愛する者の為に使用する時、蘇生魔法に変化可能

《スキル》

【精霊姫】

・怪物種に対しアビリティ超高補正

・自身の愛する者の為に戦う時アビリティ超高補正

・自身の愛する者と魂を繋ぐ

【英雄王妃】

・早熟する

・想いが強くなる程効果上昇

・自身が最も愛する者という時想いはさらに強くなる

【神姫】

- ・身体組成を高次元へと変化可能
- ・魂において思考、行動可能
- ・『ベル・クラネル』と魂が混ざる程、存在が昇華する。

## 第三十六話

アイズのステイタス更新とアリアドネ、アイルズの『改宗』コンバージョンを終えた。

アリアドネとアイルズは僕の『器』に引つ張られているため、レベルは5となつてい  
る。

正直、二人にはとても申し訳ない気持ちなつたが、二人は「これでお父様と隣で戦う  
ことができます！」と言つていたのを聞き、僕は嬉しくなつた。

そして、ある日『眼晶』オウルズからアルフィア義母さんの思念伝達が来た。

その報告としてはレベル9になつたという報告だ。

貴方は一体どこを目指しているんですか？

本気でそういう気持ちになつた。

もう正直、ラスボスは『神獣の触手』デルビユネよりもアルフィア義母さんじゃないか？

レベル差が4もあるって……。ほぼ勝てる可能性ないじゃん。

うーん。一応、アルフィア義母さんと連絡しているのは皆には秘密……。まあ、アイ

ズ、アリアドネ、アイズにはバレているけど。ここにはいないけど、多分レフィにも。隠し事が全くできないなく。

4人共、大体の言うことは聞いてくれるからバレる心配はないから別に困らない。僕は自室のベッドに腰掛け、ため息を吐く。

「ふう。それにしても、アイズの「ステイタス」を見た時は驚いた」

アイズの真名が『アイズ・ヴァレンシユタイン』から『アイズ・クラネル』に変わっていた。他にも、あまりにも普通すぎる「ステイタス」。

アイズは自身の『器』を制御している。

僕は似たようなことができるが、流石にアイズのような自然さを出すことはできない。

精霊ならではという事だろう。

神格化が始まったばかりの僕ではまだできない。

【精霊の救い手】も全然使う事ができない。

ポフツ。

僕は勢いよくベッドに倒れ込む。

「でも、時間はたっぷりある。ゆっくり慣らしていこう。こういう類の物は焦ると取り返しがつかなくなるからね」

「うん。ベルは自分のペースでやれば良いと思うよ」

「・・・なんでアイズがいるの？」

「一緒にいたいから」

僕の問いにいつの間にか僕の隣で寝そべっているアイズはさも当たり前前かのようにそう答える。

「そういえば、聞きたいことがあったんだった。」

「アイズ、最近結構僕にべったりだったよね？ 何かあったの？ リヴェリアお姉ちゃんにも我慢しろって言われたし」

「えっとね。私が我慢できなくなっちゃったの」

「我慢？ 何に？」

アイズは顔を真っ赤にさせて、ブツブツと呟くように言う。

「……い……く」

「はい？」

「……性欲」

「……はい？」

ま、待て待て待て。君、今9歳だよな？ えっ？ その歳で性欲を持つちゃってるの？ 僕でもそれらしいものはまだ持っていないのにな？

ああ、いや、待て。アイズの言う『性欲』は人間の方じゃないのか。

言ってしまうえば、『魂の一体化』。

魂の方に思考が行くようになった現在に置いて、欲というのは体ではなく、魂に置けるものに引つ張られていく。

人間の三大欲求の一つ『性欲』は魂で言えば、『魂の一体化』すなわち、『魂から混ざる』という事。

これは本能とほぼ同義で理性では制御できにくい。

なるほど、だから、アイズは僕にべったりだったのか。

それどころか、僕に接触する事で魂が少しずつ混ざっていったから、【英雄の試練】に

介入できたのか。

ああ、こうやって一つずつ整理していくと、絡まった真実が解かれていく。

『魂が魂を求めろ』。それに抗えないアイズは僕と混じりたいと言っているのだ。

正直、僕にとって問題はない。別に『そういう行為』をするわけではないし、僕の方から『魂の領域』を明け渡せば良いだけの話だ。

「おいで、アイズ」

「……うん」

僕がアイズを呼ぶとアイズは僕に抱きついてくる。

顔を僕の胸にうずめて、スリスリしている。ちよつとくすぐつたい。肉体的にも精神的にも。

僕はアイズを抱きしめ、さらに『魂の領域』を共有させる。

すると、アイズはさらに僕の体を強く抱きしめる。

さて、読書の諸君は少し置いていかれているだろうから、少し解説を挟むとしよう。

『魂の領域』というのは、各々が持つ魂が存在する領域の事だ。分かりやすく言うならば、海に浮かぶ島だ。普通の人はその島だけで世界が完結しているが、僕達はその島の

外側を知っているため、船を作り海を渡ることができ、そのような感じだ。

神ならば、そこら辺をもう少し細かく説明できそうだが、僕には難しい。とにかく、魂の領域において思考と行動できるようになるとその領域を弄ることができ。

『魂の一体化』とは『魂の領域』を共有する事だ。

本来は島同士がぶつかり合うことはない。互いを傷つけないために壁が作られている。

しかし、島が隣り合えば、領域は拡大する。

そこからはまさに運命共同体とも言えるだろう。

だが、何らかの原因でその島々が離れてしまった場合、その島は伸びたゴムのように戻ろうとしたがる。

だから、アイズは前世から今世にかけて離れてしまった魂を戻そうとしているのだろう。アイズは僕が記憶を持っている事を知っていたから。

そして、アイズが僕を求め出した最大の切っ掛けは2年前の僕の泥酔事件。今、こうして『魂の領域』の共有をしているから気づいたが、僕はあの時、アイズを求めていた。

僕は泥酔したことにより、本能が現れた。

家族に甘えたい欲求とアイズと混じりたい欲求。

だから、僕が最初にアイズを求めてしまった。だから、アイズは抑えが効かなくなり



始めた。

全く、発展アビリティ『純粋』が機能しないのも領ける。言い方は変だが、『器』は『魂』に逆らえない。魂の欲求は器の干渉では止まらない。止められるのは同じく魂の理性。領域を共有すれば、しばらくは落ち着くだろう。

すると、アイズが抱きしめる力を緩めた。

どうやら、領域の共有は終わったみたいだ。

「……ありがとう、ベル。もう落ち着いたよ」

「それは良かった。我慢できなくなったら、ちゃんと言うんだよ？　溜まりに溜まって、襲われるのは勘弁してほしいから」

「……そんな事しないもん」

アイズは僕の言葉に頬を膨らませながら、プイツと顔を背ける。僕はその様子に思わず微笑を浮かべる。

「さて、もう夜も遅い。そろそろ、部屋に戻ったら？」

「んー。いや、今日はベルと一緒に寝る」

「もう、共有は終わったよね？」

「単純に一緒に寝たいの」

僕ははあーとため息を吐き、やれやれと思いつながらベッドのスペースを開ける。アイズは。パアツと顔を明るくして、僕の横に潜り込む。

僕はアイズの頭を撫でながら、目を閉じる。

こんな日も良いなあ。

## 第三十七話

翌日――

あつ、そういえば、まだ僕アルフィア義母さんにお母さんが生き返った事言つてない。  
………まいつか。

僕はそんなことは頭の片隅に追いやつた。

さて、それよりも、だ。

今、僕達はダンジョンに來ている。

メンバーは僕、アイズ、アリアドネ、アイルズだ。

目的は娘2人の『調整』と妻の『本当の実力の確認』の二つだ。

……改めて妻つて呼ぶの凄く恥ずかしい。

コホン、娘2人の『調整』は早く終わった。

そもそも、ズレが起きるのは『器』と『精神』があつていないから起きるのだ。

しかし、『器』は僕とほぼ同じで、『精神』というより『魂』は僕と繋がっている影響

で、少し僕寄りになっている。

よって、元々ズレはあまり無かったのだ。

そして、もう一つの目的であるアイズの実力なのだが、ざっとまとめると以下の通りだ。

・ 詠唱式、魔法名を言わずに【魔法】の行使可能

・ 物理法則の無視可能

・ 魂の直接干渉可能

の3つである。頭おかしい。

最初の1つはまあいいや。

だけど、下2つはもうおかしい。

これってつまり、『あらゆる物理的障害を無視して回避不可能の即死攻撃』ができるって事でしょ？

えっ、頭おかしくない？

貴方は一体何処を指摘しているんですか？

まあ、良いや。でも、どうしようかな。する事なくなつた。

とりあえず、今日は27階層まで降りてみようか。

はい。こちら、37階層の『深層』にいるベル・クラネルです。  
えっ？ 27階層までって話はどうしたのかって？

……階層主<sup>アシフェイス・バエナ</sup>瞬殺しちゃった。

僕の魔剣とアイズの風とアリアドネの剣とイルズの破壊魔法で。

それぞれ一撃入れたら、倒しちゃった。

思わず呆然としてしまった。

で、あまりにも味気なかったため、深層まで降りちやったというわけです。

正直言おう、ここまで降りてきても全く問題ない。

アリアドネの領域魔法で僕達は持続的に体力と精神力の回復し、逆にモンスターたちそれらを奪われて動きが遅くなっている。それどころか、『スカル・シープ』のような隠密型すらも領域魔法の前では丸裸。

アイルズは領域の中に存在する全てを破壊する事ができる。つまり、わざわざ体を破壊しなくても、モンスターの体内にある魔石のみを破壊する事ができる。

正直、2人だけでも充分だ。

アリアドネが回復と探知を担い、アイルズは片っ端から破壊すれば良いのだから。

それなのにそこに僕とアイズもいる。

僕の双魔剣もアイズの風もどちらも深層のモンスターを一撃で倒せるだけの力を持っている。

うん。これ、『闘技場』<sup>コロシヤム</sup>でも余裕そう。実際に試そうと思わないが。

いやー。深層って暗かった印象しかないけど、アリアドネのおかげで結構明るい。1

8階層の『迷宮の楽園』<sup>アンダーリゾート</sup>に負けてない。

ちゃんと周囲の警戒はしてるんだよ？ でもさ、もはやただの作業になりつつある

よ。

僕は『神雷の剣』で『スパルトイ』を粉々にしながら、そう思う。

うーん。確かここら辺って推奨はアビリティD以上のレベル4だったかな？ パーティを組む事前提として。

で、僕達は全員レベル5でアビリティはSSS。

……あつ、ダメだこれ。オーバーすぎる。

よし、そろそろ荷物も一杯だし帰ろう！

別にこのままだと階層主<sup>ウダイオス</sup>まで瞬殺しそうとかそんなんじゃないぞ！

決して、現実逃避ではないぞ！

そして、僕はまだまだ暴れ足りないようなアリアドネとアイルズを引つ張つて地上へと帰還した。

ちなみに誰が速く地上まで着けるか勝負した。本気で。

しかし、僕は忘れていた。

アイズチートの存在を。

アイズはあらゆる物理法則を無視できる。

それ即ち、天井すらもすり抜けてしまうという事だ。

アイズは「風」エアリエルを発動し、真つ直ぐ上に飛んでいった。

僕は「フアアアポルト」を付与し、浮かせた『神雷の剣』に乗って、雷の如く走った。

アリアドネは領域魔法を展開し、無限持久力を持った状態で最速で走った。

アイルズは魔法で自分をレベルを二段階昇華させて走った。

だが、アイズは直線で戻っていくのに対し、僕達は階段を使わなければ上に上がれない。



結局、アイズに勝つことはできず、アイズにじゃが丸君を奢る事になったのだ。

ギルドで換金を済ませて、じゃが丸君を買った僕達は現在『星屑の館』にいる。  
アストレア様が迎えてくれた。

「いらつしやい、2人とも。そちらのお二人さんは？」

「初めまして、アストレア様。私の名前はアリアドネです。よろしくお願ひします」

「私はアイルズです。アリアドネの妹です。よろしくお願ひします」

3人は自己紹介をしている時、僕は先に中に入り、リビングにいた人達に挨拶する。

「こんにちはリユウさん、アリーゼさん、輝夜さん、お母さん」

「あつ！ ベル！ こつちに来なさい！ 一緒に喋りましょう！」

「こんにちは、ベル。……アリーゼ、少し落ち着きなさい」

「……ベルか、アリーゼではなく私の所に来い」

「ふふつ。ベルはモテモテね」

僕は最近、アリーゼさんに対して身の危険を感じ始めてきたので、輝夜さんの方に  
行つた。

輝夜さんの隣に座つたが、輝夜さんは僕を掴み自分の膝に乗せた。

いや、あの、何してるんですか？

僕は振り向いて輝夜さんの顔を見る。

すると、輝夜さんと目が合つて、輝夜さんはクスクスと笑う。

「ごめんあそばせ。ベルよ、身の危険を感じてアリーゼから離れたのは賢明だが、私の

元に来るのは下策だぞ？ 私もお前を狙っているのだからな」

輝夜さんはそういうと、舌舐めずりする。

あつ、獲物を狙う目つきだ。この人もアリーゼさんと同類だ！

そう、アリーゼさん——そして、今気づいた輝夜さん——は事あるごとに僕に迫ってくる。いや、僕としては嬉しいし、本当に来るなら断る気もないけど、なんか若干、いやかなり怖いんだけど!?

ちなみにであるが、僕が望むのは『恋人』ではなく『家族』。僕を好きな人を今世では拒むつもりはない。アイズには許可は貰ってるし——というか大体アイズが誘導したし、責任は取る——でも、流石にアイズ以外に『恋人』を作る気はないので、最初から『家族』として迎える。

一応、これに関しては僕が見る限り、僕に好意を持っている人達——タグに載っている人達——には伝えて置いた。そのせいなのか、いつも以上にアプローチが激しい。そして、どうやら今、輝夜さんも追加されたようだ。

なんだかなあ。お祖父ちゃんが言ってた『ハーレム』みたいなもの——というか、まるつきりそれだけ——なんだけど、『男の浪漫』というものが、今でもよく分からない。うーん。お祖母ちゃんにバレたらどうしようかな？ よし！ お祖父ちゃんを生贄

に捧げよう！ 縛って、目の前に届けたら許してくれるでしょ！

いやー、あの柱むしら、前世でアイズに余計な知識を放り込んだから、僕にとってはかなりの要注意神物なんだよね。

ちなみに余計な知識というのは『浮気』に関してである。僕がアステリオスと特訓しているだけで『浮気』なんだと。ヘルメス様も悪ノリして「いやー、とても良い『殺し愛』だなー！」なんて言うから、より疑惑が加速した。

お陰でアイズが闇堕ち、ヤンデレになる所だった。

ああ、うん。もう、あれはヤメテホシイ。

僕は今までで一番最悪だった事件を思い返ししながら、輝夜さんにナデナデされていた。

## 第三十八話

「輝夜さん。そろそろ離してくれませんか？」

「嫌です。しばらく大人しくして置いて下さいませ」

と言われても、そろそろ僕の羞恥心の限界が……。

正直、同じレベル5と言っても、アビリティ合計値や技術は僕が上だから、抜け出す事はできる。

しかし、あまり拒絶はしたくないため、大人しく離されるのを待つか、誰かに奪われるのを待つしか無いのである。

アリーゼさんは流石に痺れを切らしたのか、輝夜さんから僕をひよいつと奪った。

ほら、こんな風に。しかし、もちろん事態は好転しない。それどころか、むしろ悪い方に加速している。

アリーゼさんは僕をギュッと抱きしめ、スンスンと僕の匂いを嗅いでいる。輝夜さ

んは何か物足りなさそうな顔をして仕方ないかため息を吐いている。

いや、あの、アリーゼさん妙なスイッチ入ってませんか？ 僕の匂いなんて嗅いでも……。発展<sup>純</sup>アビリティ<sup>粹</sup>の効果が無臭なので、何も感じない筈なのだが……。

「ん？ アリーゼさん。何してるんですか？」

「ベル成分補給」

なんじゃそりゃ。

あれ？ 体の奥がムズムズするような？

あつ、やばい。なんか僕の表面じゃなくて、奥深くを嗅ぎ取ろうとしているような気がする。

アリーゼさん待つて待つて待つて!! それ以上はダメ! やばい、僕の体に徐々に快楽が……。この人まさか、僕に対する特攻性を持つ「スキル」でも入手したんじゃ無いだろうな!!

あ、ちよつと意識が朦朧と……。

そして、僕が意識を飛ばしそうになると、直前にリユースさんが救助してくれた。

これはこれで妙に苦しい。快楽で気絶しそうになった瞬間に意識が戻されると、『焦

らしプレイ』とも言えるもので、マジできつつい。

僕はまだ火照った顔を冷ましながら、アリーゼさんに問う。

「はあつ、はあつ、アリーゼツ、さんつ。一体、僕に何したんですか？」

「ご、ごめんねベル。思わずスキルを使っちゃった」

「どんなスキルを得たんですか……」

「え、えつと、あはは……」

「それは私が説明しましょう」

「ちよつと、リオン!？」

アリーゼさんが中々に説明を渋るので、リューさんが説明してくれるようだ。

リューさんから聞いたのは昨日アリーゼさんの「ステイタス」更新をしたときに発現した【スキル】についてだ。

そのスキルとは【ラビットフアア白兔情熱】なるものらしい。

名前でもうすでにツツコミどころ満載だが、効果もおかしい。

効果は白兔への愛の大きさに応じてアビリティ超高補正だそうだ。

おい待て、何故『白兔』限定なんだ。

いや、僕の事なんだろうけど、『恩恵』にまで白兔扱いされるのか僕は。

いや、そんな事はどうでも良いが、問題なのはアリーゼさんの僕への愛がすでにヤバい域に達している気がする。

リユーさん曰く、一人で階層主を瞬殺ウダイオスしたそうだ。

頭痛が痛い……。前世のアイズ以上にヤバい。一体どれだけ補正が働いたんだ……。

うん。どんどん僕の周りが化け物染みて行く。

しかも、大体が僕が関わっている。

うん。言い訳のしようもない。

正直、闇派閥達イウイルスが不憫になってきた。

もはや、茶番と化している戦い。

そこにあるのは約束された戦い。

役者は出揃った。

明日はオラリオオ史上最大の喜劇の幕が上がる。

主役はベル？

いいや違う。

主役は皆だ。

さあ、笑ってやろうぜ。



逃げ惑う人々は無く、泣き叫ぶ人々も無く。

今、ここには英雄の器のみが現れている。

ベル、アルフィア、ザルド。

世界最強の冒険者達は『正義』と『悪』の戦いを始める。

今、僕は完全装備だ。

『神雷の剣』と『聖火の魔剣』に【英雄の試練】にてフィンさんとアイズから貰ったバトルクロス戦闘衣。

僕の目の前にはアルフィア義母さんとザルドさんがいる。

僕達は互いを見つめ合いながら、一定の距離を空けて佇んでいる。

そして、大鐘楼が鳴った。

ザルドさんが最初に動いた。

僕はザルドさんの黒い大剣を神雷の剣をもって受け流す。

僕はすかさず聖火の魔剣を振り下ろすが、ザルドさんは黒い大剣を素早く引き戻し、僕の攻撃を受け止める。

流石はレベル8。レベル3つ分の間は中々埋められない。

しかし、それだけでは終わらない。

「ゴスベル福音」

アルフィア義母さんから放たれる音の嵐は僕を切り裂こうと迫ってくる。

僕は勘と予測でそれを斬る。

うっわ。シレンアイウム・エノン【静寂の園】を使ってないから、とてつもない威力だ。僕、レベル5だから、

当たれば簡単に消し飛ぶ。まあ、当たらないが。

しかし、そちらの方に意識を割いたため、隙ができ、ザルドさんはそれを見逃さない。

瞬間、黒い光が僕の前を横切った。

無論、横切ったのはザルドさんの黒い大剣。

ギリギリ避けたのは良いものの、全く攻撃が見えなかつた。

やっばり毒はもう無くなっているようだ。

動きのキレが凄まじい。もはや、視界は使い物にならない。

ならば、視界は使われない。

僕は目を閉じて、視覚に通っている神経を視覚以外の四感に回した。

よって、四感は強化され、僕はさらに集中する。

怒涛の斬撃と無慈悲な音の嵐。

僕は触覚と聴覚をフルに使い、その全てをいなす。

いや、いなせていない。僕の防御と回避を掻い潜った攻撃は悉く僕の体に傷をつける。

それにアルフィア義母さんが「ジエノス・アンジェラス」の詠唱を始めている。

このままでは負けるだろう。しかし、これで諦めるような人間ではない。

さあ、始めよう。これから紡がれるのは喜劇だ。

「笑おう！ 例えどんな苦難があろうとも！」

「箱庭に愛されし我が運命よ砕け散れ。私は貴様を憎んでいる！」

「父神よ、許せ、神々の晩餐をも平らげること」

僕とザルドさんは『並行詠唱』で斬り結び続ける。

集まるのは膨大な魔力。

都市一帯を全て無に帰す程の力の集合。

さすがにそれは不味いので、僕は『聖火の魔剣』を地面に突き刺し、周囲に聖火の結界を張る。

名前を付けるとするなら……そうだな。

へスティア様の神殿から名前を取って——『アルゴ・アエデス英雄の神殿』——なんてのはどうだろう。僕は『神雷の剣』を両手で構えて、力を収束させる。

「紡がれるは喜劇！ 暗黒の世界を照らす希望の光！」

「代償はここに。罪の証をもって万物を滅す」すべて

「貪れ獄炎の舌」えんじく

僕達は離れ、『最後の一撃』に全てを注ぎ込む。

「神々よご照覧あれ！ 私が始まりの英雄だ！」

「哭け、聖鐘楼」

「喰らえ、灼熱の牙！」

そして、その「魔法」は完成した。

「【ディア・アルゴノウト】」

「【ジェノス・アンジェラス】」

「【レーア・アムブロシア】」

僕は『瞬間収束』モイメント・チャージによって1秒で5分ぶんのチャージを行つた。その代わり、体力と精神力を全て持っていられるが。

神雷を纏う斬撃が。

全てを滅ぼす音の嵐が。

灼熱の如き斬撃が。

三つの『最後の一撃』は3人の中央でぶつかり、絶大な光と音が周囲を包み込んだ。

視界が元に戻り、そこに立っていたのはただ一人。

そう、ベルだ。

ベルが立っていた。

ベルはフラフラになりながらもすっかり立ち、右手に持つ『神雷の剣』を天高く空に掲げた。

その瞬間、うおおおおおおお！ と歓声が上がった。

その歓声を聞き、ベルは気絶した。

ベルは意識を落とす最後に何か柔らかい所に捕まったような、そんな気がした。

## 第三十九話

僕の気絶後、事態は急激に収束へと向かった。

「アストレア・ファミリア」はヴィトーさんを捕らえ、「ロキ・ファミリア」はヴァレッツタさんイヴイルスを捕らえた。

他の闇派閥の構成員も「ガネーシャ・ファミリア」、「フレイヤ・ファミリア」、「アルテミス・ファミリア」等々、捕らえた。

自爆の危険性はアイルズの「ジ・オリジン魔」によって消え去った。アイルズの魔法は領域内においてどんな場所でもどんな規模なのか自由に決めて破壊することができる。そして、アイルズの領域は都市全体。つまり、都市内では全ての火炎石は破壊される。ついでに、装備者には破壊が及ぶことはない。全員無傷である。

まあ、ようは完全無欠の勝利で終わった。

あと、ここだけの話、エレボス様がたくさんの男神様達黒歴史にエレンを弄られ続けているようです。特にヘルメス様が一番弄っているとの事だ。



うん。楽しそうによかったです。(遠い目)  
とりあえず、僕が気絶していた間の出来事はこんなものでいいだろう。  
ということ——

「宴会やで——————!!!」  
「「「「「イエ————————イ!!!!!!」  
「!!!!!!」  
「  
「  
「

ロキ様の声を皮切りにたくさんの人達が騒ぎ出す。

場所は『豊穡の女主人』。元「フレイヤ・ファミリア」の団長であるミアさんが経営している店。店員はシルさんもといフレイヤ様やアーニヤさん、何故かお手伝いをしているリユーさん。

いや、なんでウエイトレス<sup>そっ</sup>側？

そう思い、リユーさんに尋ねると、

「シルに捕まりました……。一応、臨時という形で仕事しています。途中からは普通に参加するつもりです」

との事だ。凶らずとも前世と同じで酒場の店員になったリユーさん。お疲れ様です。シルさんに捕まったら、絶対離してくれないので頑張ってください。

ちなみに今酒場にいるメンバーは、

僕、アイズ、リヴェリアお姉ちゃん、メーテリアお母さん、アルファイアお義母さん、リアドネ、アイルズ、ロキ様、フィンさん、ガレスさん、アストレア様、アリーゼさん、リユーさん、輝夜さん、ライラさん、アミッドさん、ヘルンさん、ヘイズさん、オツタルさん、アレンさん、ヘディンさん、ヘグニさん、アルフリッグさん、ドヴァリンさん、

ベーリンググさん、グレルルさん、シルさん、アーデイさん、シャクテイさん、ガネーシャ様、ヘルメス様、アスファイさん、エレボス様、ザルド叔父さん、ヴィトーさん、ヴァレッタさん。

こんな感じだ。後から何人か来るらしいが、今はこんなものだ。

ザルド叔父さんとオツタルさんとガレスさんは飲み比べをしている。ザルド叔父さんとガレスさんは分かるんだけど、オツタルさんもそういうタイプだったんだ……。樽ごと持ち上げ、一気飲みのみしている。ちなみに飲んでいるのはドワーフの火酒。めっちゃキツイやつである。

「アストレア・ファミリア」の人たちはリユーさんのウエイトレス姿を見て、弄っている。リユーさんの真っ赤になった顔が可愛い。あつ、リユーさんが羞恥に耐えきれなくなつてアストレア様に泣きついた。アストレア様がリユーさんの頭を撫でていると、アリーゼさん達も次々とアストレア様に抱きついていく。アストレア様は仕方のない子達ねと言いながらそれを受け入れていた。

「フレイヤ・ファミリア」の男性達はミアさんの料理を次々と食べている。オツタルさんが絶賛していたため、「フレイヤ・ファミリア」の幹部達も興味があつたようで、特にガリバー兄弟達は美味しい美味いと言いながら猛烈な速度で食べている。

フィンさんはヴァレッタさんに捕まり、勝負を持ちかけられている。勝負の内容とし

てはチエスで、負けた方は明日の書類仕事をするとのことだ。だけど、僕はフィンさんがそういう遊戯で負けたところを見たことがない。ヴァレッタさんもよく諦めないよな。

ガネーシャ様が「俺が、ガネーシャだ！」と言うとヘルメス様が大笑いし、ロキ様に「うっさいわ！ ボケー」と蹴りをかまされている。それをシャクテイさんがやれやれといった表情で見ている。ガネーシャ様つて、真面目な時は真面目なのに、どうしていつもただのうるさい神にしかならないんだろう？

エレボス様はヴィトーさんと何やら話し合っているようだ。どちらも楽しそうだし、険悪でないなら良いんだけど。というか、さつきヴィトーさんに会った時、何やら陶醉したような表情で見られたんだけど。大丈夫？ 何か変なスイッチ入ってない？

アミツドさん、ヘルンさん、ヘイズさん、アスファイさんはいわゆる苦労人の集まりで若干暗い雰囲気だ。愚痴の言い合いになっている気がする。この四人はこれからこうして集まることがあるのだろうか。

各々が楽しんでいる中、僕は――

「おかあしやくん。えへへ〜」

絶賛、酔わされていた。

「よしよし。ベル、こっちにおいで」

メーテリアお母さんが腕を広げて僕を呼ぶ。

僕はそれに誘われて覚束ない足取りでメーテリアお母さんの元へと向かう。無事に着くと、メーテリアお母さんは僕を抱っこして、自分の膝に乗せて、ギューツと抱きしめる。

どうしてこうなったのかというと、

「ベルさん。お疲れ様です。こちらをどうぞ」

そう言って、シルさんが僕に飲み物を渡してくれた。

それが酒なのは一目瞭然だったが、だからといって飲めないわけではなく、並大抵のお酒ならば、僕の発展<sup>純</sup>アビリティ<sup>粹</sup>で酔わない。

そう、僕は油断していたのだ。

それがどれだけキツイお酒で、僕は並大抵のお酒しか無効できないという事を分かつ

ていなかったのだ。

よって、僕はシルさんの——いや、多分アイズ達も含めての——思惑通りに酔ってしまっただ。

『英雄達の大宴会』はまだまだ始まったばかりである。

## 第四十話

宴会が始まってまだ30分も経っていないが、ベルは酔わされている。それはもう、絶対酔いが醒めず、かつ絶対寝ることのないレベルで酔わされている。ちなみにその状況を作り出せるアルコールの度数を考えたのはアイズである。魂が繋がっていることを良いことにベルの耐性を研究し、絶妙な技術を以て、特製『酒酔白兔』を作った。

ぶつちやけ、技術の無駄遣いである。

さて、飢えた狼女に酔わされた哀れな白兔少年は——

「お母ちゃん！ あのね！ ベル、頑張ったんだよ！ 好きな女の子ができて、その子を守る英雄になれたんだよ！」

「よく頑張ったわね。私は貴方の事を誇りに思うわ」

幼児<sup>前世</sup>退行していた。

前世の記憶が表に出ているベルは前世の時に考えていた『いつか、お母さんに会えることができたと言おうと思っていた事』を言っているのである。

メーテリアはベルの頭を撫でながら、ベルを労う。

メーテリア自身ベルの前世は「英雄の試練」の影響で知ってはいるが、しかし知っているだけであつて、経験しているわけではないのだ。今までのベルの苦勞は計り知れないということしか分からない。だからこそ思うのだ。今世では苦勞以上の幸福を得て欲しいと。

それはアイズ達も同じ気持ちである。

決して、酔つたベルが見たかっただけではないのだ。

そういえば、とメーテリアはベルに質問があつたことを思い出して、今も自身の胸に顔をうずめている我が子に尋ねた。

「ベル。姉さんが付けてるネックレスってベルがあげたの？」

「ーッ!? ゴホツゴホツ！」

メーテリアの何気ない問いに、静かに酒を飲んでいたアルフィアはむせて、周りの女



性陣達の雰囲気はピシツという音が聞こえそうなくらいの冷気を纏っている。そんな事は意に介さず、ベルはその空気にさらなる爆弾を乗せていく。

ベルは記憶の奥底を手繰り寄せながら、思い出したかのように大声で言うのだ。

「うん！ そうだよ！ 二年前にね！ アルフィアと別れる時、寂しそうだったから連絡手段としてあげたの！」

「~~~~ツ?!?!?」

ベルの唐突な呼び捨てと若干の黒歴史を暴露されたことによる羞恥によって顔を真っ赤にするアルフィア。

メーテリアは私も呼び捨てにされてみたいわ、とか、姉さんはずるいわなんて考えていて、後で頼んでみようかしらと小声で言っていたのを普段なら気づくはずだが動揺のしすぎで隣にいたアルフィアは全く聞こえなかった。

次はアイズがやって来た。

「ねえねえベル。私のところにもおいで」

「わっ!? アイズ? あれ? 小さくなったの? あつても精霊だもんね。身体はあ

る程度は変えられるよね」

「うーん。やっぱり記憶は前世寄りになってる？ まあいつか。おいで、ベル。ギューツとしてあげるから」

「えへへ。アイズ。愛してるよ」

ベルはアイズに抱きつき、愛の言葉を囁く。

アイズはベルの言葉に頬を少し朱に染めて、ベルを強く抱きしめる。

「ねえねえアイズ。アイズは僕のこと好き？」

「うん、好きだよ。ずっとずっと、そしてこれからも」

「えへへ」

ベルはアイズの言葉に満足したかのように顔を緩ませ、さらにアイズの体に身を擦り寄せる。

アイズとしては前世で恋人だった時はベルはよく甘えてくれたが、結婚してからは甘やかす方に力を入れていた。そして、アイズ自身もそれに甘えていた為、特に不満はなかったのだが、ある日気づいたのだ。気づいたというより教えてもらったという方が正

しいのだが。

ベルの祖母の当たるヘラ様。

ベルと私が結婚した後、ゼウス様と一緒に祝福に来てくれた。その時、ゼウス様が妙にボコボコだった様子を除けば、貴婦人のような神様だった。

ヘラ様はゼウス様と夫婦だった為、色々嫁としての作法というものを教えてもらった。ただ、浮気性に対するお仕置き方法とかは明らかにいらなかったと思う。当時の私はそれに振り回されて、危うくベルにあんな事抑やこんな事監禁をしそうだった。

正直、ベルが私の事を一日中愛してくれなければ止まらなかつただろう。まあ、次の日には腰が砕けてベッドからまともに動けなかつたけど。というか、ベルは平気だったのよね。発情兎トというか野獣トというかベルは本当に底なしだった。何がとは言わなないけど。

うーん。まあそんな事があつてか、ベルはヘラ様に対して若干恐怖心を抱いている。唯一大丈夫だったのはベルの母と義母の話だけだった。その話だけはベルはヘラ様の話を素直に聞いていた。その話の後はよく窓の外を見て物思いに耽トっていた。その様子にどこことなく寂しさを感じたのは気のせいではないだろう。

だから、私はベルに言ったのだ。

『小さい時からベルがいてくれたら良かったのに』と。

私の思惑通り、ベルは私の為に過去に遡る方法を模索した。その為にフレイヤ様の所に行つたのは少し思うところがあつたが、フレイヤ様は特にベルに何もしなかつたので、目を瞑ることにした。

そう、ベルが過去を遡つたのは私がそう仕向けたから。アリアドネやアイルズ、レフイーヤも過去を遡つたのも私が誘導した。そして、皆がベルの『恋人』ではなく、『家族』を望むのも私がそう誘導したからだ。

全てはベルの為に。『私の英雄』でいてくれたベルに幸福であつて欲しいから。私に縛られて欲しくないから。

ベル、今世は貴方が望むままに生きて。貴方には幸福になる権利がある。

## 第四十一話

ベルが酔わされ、一時間後。

ここで新たな人員が参加する。

「えつと、大丈夫ですか？ ベル」

フィーナことレフィーヤと。

「あらあら。かなり酔わされてますね」

アリシアと。

「私がここに来ても良いのだろうか？」

フィルヴィスだった。

エルフ三人娘の登場にベルは驚愕する。

アリシアは『黄昏の館』でよく会うし、フィルヴィスはともかく、レフィーヤがここにいることはおかしい。

何故ならば、本来レフィーヤはこの時期には『学区』にいるはずで、前世の記憶持ちでも『学区』からここに来れるはずがないのだ。

レフィーヤは、ああ、と頬を掻きながら苦笑し、ベルに衝撃の事実を伝える。

「やめちゃいました。『学区』」

「はい？」

何を言っているのだろうかこの娘は。やめた？ 『学区』を？ どうして？  
レフィーヤは慌てて訂正を入れる。

「正確には卒業したんですけど、ほぼ無理やりなんですよね。成績優秀だからこそ、そこら辺を融通してもらえたというか」

レフィーヤはベルに近づき隣に座る。今のレフィーヤはほぼ大人の姿で、見た目に似合わない色香を纏っている。

あつ、やばい。レフィーヤがいつの間にか、リヴェリアお姉ちゃんに似てきている！  
流石は《九魔姫》ナインヘルの後継者！

僕は少し酔いが覚めてきたのにレフィーヤの雰囲気当てられて、また頭がボーっと始めてきた。

「あつ、うつ」

「あれ？ ベル、大丈夫ですか？」

そんな事を気にしないレフィーヤはさらにベルに近づき、自身の額をベルの額に合わせる。

「うゆっ!?!」

「なんですかその声は……？ うーん、熱は無いようですね」

お酒などにより女性に対する耐性がダダ下がり中のベル。そんなベルに美しい

女性が急接近したらどうなるだろうか？ 勿論、オーバーヒートを起こすに決まってる。

「きゅ〜」

「あ、あれっ!?! ベルっ!?! 急に倒れて、やっぱり病気が!?!」

ベルは顔を真っ赤にして倒れて、レフィーヤは慌てふためく。倒れたベルを膝枕しようとする女性達が争い続け、男性達は我関せずを貫いていた。まさに地獄絵図だった。

ちなみにベルの膝枕権を得たのはアルフィアだった。



ベルは目を覚まし、酔いが完全に覚めた頃。

「うっ、うっくん？　ここは？」

「起きたか、ベル」

「アルフィアお義母さん？　あれ、レフィーヤは？」

「ああ、あのエルフならあそこだ」

ベルはアルフィアの膝枕から起き、アルフィアが指し示す場所を見ると、リヴェリアに説教されているレフィーヤの姿だった。

あつ、なんか懐かしい光景。いやいやいやいや、なんで説教されてるの、レフィーヤ？

その疑問にはアルフィアの隣にいたメーテリアが答えてくれた。

「レフィーヤちゃんね、ベルを気絶させちゃったから、ちよつと自分を見つめ直せつてお説教されてるのよ」

はい？ 自分を見つめ直させて？ というか、僕気絶したの？ レフィーヤのせいで？ 何があつたのか全然覚えてない。ただ、思い出そうとすると思い出すなという警鐘が鳴り続ける。よし、やめよう！

そういえば、と思考を無理やり切り替えて僕はリヴェリアお姉ちゃんを止めに行く。

「お姉ちゃんお姉ちゃん。もうそろそろやめたら？ せつかくの宴会だよ？」

「……ふむ。それもそうだな」

「ふえ〜ん。にいさ〜ん」

リヴェリアお姉ちゃんの説教から解放されたレフィーヤは僕に抱き付いてくる。子供の状態だと潰されてしまうので、体を16歳ぐらいまで成長させてレフィーヤを受け止める。

レフィーヤは僕の胸に顔をスリスリしている。

全く、本当に甘えん坊だねレフィーヤ。

僕はそんな事を思いながら、レフィーヤの頭を撫でる。

レフィーヤは本当に幸せそうな顔で僕の手を受け入れる。

レフィーヤにも辛い目に遭わせてしまった。でも、それでも僕を好いてくれるなら、僕はそれを受け入れよう。なにせ、君は僕の妹であり、僕の好敵手ライバルなのだから。

……どうやら、レフィーヤは寝てしまったらしい。

アリシアさんにレフィーヤを預けた、僕は子供の姿に戻る。

「本当に姿形を変えられるのですね」

「あはは……。でも、体を成長させると疲れるんですよ。それこそ、アイズは慣れてるので疲れるとかは無いそうですけど」

「私はまだ子供で良いと思いますよ。可愛らしいですし、無理に大人になる必要は無いと思います」

「そうですね。あと10年もすれば、それなりに成長しますから、それを待ちましかね」

アリシアさんは「失礼します」とレフィーヤさんを連れて行った。

僕にとってアリシアさんはある意味対等人だと思っている。

そりゃ勿論、彼女の方が年上だし、普通は対等とかは無いんだけど、僕の性格を分かってくれているからか、彼女は僕に対して適度な距離感で接してくれる。

別に遠いとかそういう意味ではなくて、僕は見た目は子供なのだけど、中身は立派な大人な訳だから、風呂とかではよく女湯の方に連れてかれるが、僕はみんなの身体を見る事はできない。だから、精神的に疲れるのだけど、アリシアさんはそんな僕の様子を察してか、薄くはあるけど確かな服を着て、僕の体を洗ってくれるようになった。まあ、エルフの習慣みたいなものを関わっていると思うけど……。

あれ？　だとしたら、リヴェリアお姉ちゃんはずっと奔放過ぎない？　あの人が一番僕を女湯に連れて行ってる気がする。まあ、母性的なもので接しているのかもしれないけど。

エルフって、やっぱりよく分からない。

## 第四十二話

「さーて！　そろそろ皆あつたまつて来たかー？　じゃあ始めちやうでー！　名付けて『ドキツ☆美少女、美女だらけの大冒険。ベルを一番満足させられるのは誰だ！！』ポロリもあるかも』決定戦！」

まーた訳わからない催しを始めたよ。うちの主神様は。ベルは溜め息を吐き、アルフィアに抱き付く。

「どうした？　ベル」

「お義母さんに甘えたい年頃だから」

「そ、そうか。それより、ベル。何やら、凄い睨まれているように感じるのだが」  
「気のせい気のせい」

いや、本当に気のせいになりたい。正直、現時点で一番安心できるのはアルフィア義母さんの所だけである。

さっきのロキ様の言葉で目の色を変えた女性達が、一斉にこつちを向いたのだ。思わず身の危険を感じ、アルフィア義母さんの後ろへと逃げた。

アルフィアは自分の後ろに飛んできたベルを撫でつつ、ベルと自分に向ける冷や汗を感じる。

そんな様子を知ってか知らずか、ロキは更なる爆弾を投下していく。

「ルールは『住民に迷惑かけない事』！ 危険じゃないなら、なんでもええ！ それじゃ、開始ッ！」

開始の合図と同時に、アルフィア以外のベル、sハーレムとベルは動き出す。

深夜の逃走劇が今始まった！

????????????

ベルは逃げる。オラリオの上空を駆け抜けて。

「ロキ様め！ こうなること分かっててやりましたね!? ああもう！ ストツパーが誰も機能してない！」

ベルは「ファイアボルト」で付与した脚で空を走る。その後ろを各々の方法で追いかける女性。

「待ちなさいーい兄さーいん！」

妖精の羽を作り出し、空を飛ぶレフイーヤ。

「すみません、ベル。捕まえさせてもらいます！」

【ルミノスウインド】を体に纏い、同じく空を飛びリユー。

「最近甘えてくれなかったからな。今回は本気で行くぞ」

魔法円マジックサークルを空に展開し、どうやってかそれを足場にするリヴェリア。

見事な妖精三人娘である。

ねえ待って!? 貴方達そんな事できたっけ!? 全然記憶にないんだけど!?

ベルは雷霆の剣を召喚し、雷の力でさらにスピードを上げ——ようとしたその時、

「させると思う?」

下の方から暴風が吹き荒れる。ついでに剣は粒子レベルに分解され、

【ステイタス】の大半を封じられた。

こんな事ができるのは——

「——アイズ!」

下を確認すると、建物の屋根の上でこちらに手を振るアイズがいた。

よく見ると、何かを呟いているようだ。



『そのままが良いの？ 落ちちやうよ？』

その言葉を理解すると同時に体は地面に引っ張られる。

【ファイアボルト】の付与が切れ、空中に浮かべなくなったのだ。

「ちゃっかり【ステイタス】まで封印して！ 全く抜かりない！」

ベルは落下中に、数十パターンの逃走方法を頭の中でシミュレートする。その中で最も逃走成功の確率の高い方法を選択する。

それでもほぼ一桁なんだよなあ!?

ベルは内心で悪態を吐きながら、とりあえずステイタスの一部を無理やり解放する。解放できたのは『アビリティ』のみ。【魔法】と【スキル】は強固過ぎて無理だった。ベルはなんとか取り戻した身体能力で地面に着地する。

「そう簡単に」

「逃げられるとは」

「思わない事だな」

ベルを囲むように、レフイーヤ、リユー、リヴェリアも着地する。ついでに近くの建物の屋根上にはアイズがいる。

絶対絶命な状況。しかし、ベルはそんな状況でも何度も潜り抜けて来た。その絶大な『幸運』によって。

自身の向けられる五つの視線を感知し、状況打開する一声を上げる。

「エルピス！」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん！」

ベルの声に聖火ウエストの如き赤い髪をしたアルテミスの姿をした者が現れる。

「エルピス！　今まで何処にいたのか凄い疑問ではあるけど、とりあえずこの場を頼むよー！」

「任せてくれベル。私はずっと君と旅をして来たんだ。アイズには劣るかもしれないが、私も君の片割れとして君を守ってみせるよ！」

ベルはその場をエルピスに任せて、走り去る。当然、四人もベルを追いかけようと動き出す。そうは問屋が下ろさなかつた。

エルピスは自身の周りに金色の粒子飛び交う炎の領域を展開し、四人の行手を阻む。

「さて、諸君。これでも私は亜神なんだ。そう簡単に通れるとは思わない事だ」

まさに『神らしい』雰囲気を纏い、『聖火』と『月』の力を顕現させるエルピス。

今、この時。『英雄達の大宴会』の最初の戦いが始まった。

??????????????

ベルは街中を駆け抜ける。そして、ベル、sハーレム達もそれに追従するように街中を走る。

「さーて、ベル！ 捕まえさせてもらおうわよ！」

「団長殿。最初から派手に動きすぎだ。後で倒れるぞ」

「問題ないわ！ だって、私は天才美少女のアーリーゼ・ローヴェルだもの！ キラッ

☆

「ほらっ！ アリーゼ、輝夜！ 早く行くよ！ ベルに逃げられちゃう！」  
「アーデイ！ 待って！」

ベルは後ろから聞こえて来る声を聞かなかったことにしたくなった。

現在後ろを追いかけるのはアリーゼ、輝夜、アーデイの三人。会話には参加していなかったが、他にもアミッド、ヘイズ、アリアドネがいた。

回復役が出揃っていやがる！

普段の言葉使いが乱れるほど、状況が怖すぎる。まるで、ダンジョンの深層で生活できそうなメンバーである。

このメンバー相手では絶対逃げ切れないため、もう一つの『オクルス幸運』を引き寄せる。  
ベルは懐から『オクルス眼晶』を引っ張り出す。

「義母さん！」

ベルがそう言った瞬間、チリンと軽い鐘の音がした。

その鐘の音と共に、アルフィアが現れる。

「ここは私に任せろ、ベル」

「うん！ お願ひ！」

ベルはそのまま走ってその場から消える。

やがて、アリーゼ達がアルフィアの前に着く。

「さて、小娘共。ここを通りたくば、私を倒してから行け」

「……レベル9。悪いけど、押し通らせてもらうわ」

「その意気だ。簡単には終わってくれるなよ？」

エルピス達とはまた違った場所で二つ目の戦いが始まる。



## 第四十三話

——エルピス side——

「ハアツ！」

リユーが『アルヴス・ルミナ』をエルピスに向かって振る。しかし、エルピスは全く動かずに微笑んでいた。

「なっ!?! 当たらない!?!」

そう、リユーの得物はエルピスの身体をすり抜けた。それはまるで雲を掴むかのよう

「そう驚く事じゃないよ。『陽炎』<sup>かげろう</sup>というものをしっているかい？ 原理なんて一から

説明するのは面倒だから、単純な例を出そうか。そうだね、『焚き火』とかはどうかな？

焚き火の上はよく空間がゆらゆら揺れている様に見えるだろう？ あれと同じさ。

私が扱う『聖火』は広い目で見れば『火』と同じ。それによつて、私の位置を君達に誤認させているのさ。まあ、そんなに強い訳じゃない。そもそも『火』というか『熱』がなければ成立しない物だからね。だから——」

「そもそも、『火』を吹き飛ばせば良い——よね？」

アイズは風を剣の周りに超高速で回転させ、エルピスに迫る。

エルピスはアイズの言葉に正解だと示すようにその場から離れ、迎撃態勢を取る。

アイズはエルピスの迎撃の気配から、今踏み込むのは危険と判断し、エルピスとリヴェリアの間に立つ。

リューとアイズは挟撃の位置にて、エルピスの行動に警戒する。リヴェリアとレフィーヤはいつでも援護に入れるように、既に支援魔法の詠唱を済ませた。

エルピスはその様子を見て、余裕に構える。

「あつ」とエルピスはそういえばと思ひ出したかのように声を出す。



「このままじや街に被害を出してしまうし、君達も本気を出せないか。ならば、決戦に  
 相応しい戦場フィールドにご招待しよう。『私の世界』へ」

「「「なっ!?!」」」

そして、この街から5人の気配が消えた。

????????????

——ベルside——

アイズに封印された「ステイタス」の状態で街を走る。  
 すると、突如5人の気配がこの街から消えた事に気づいた。

「もしかして、エルピスの仕業? いつの間に、そんな芸当ができるように……。びつ  
 くりだよ。本当にいつできるようになったんだか」

エルピス——オリンピアの一件以来、話す事ができなかつた。何らかの奇跡によつて

生まれた『ヘステイア・ナイフ』の擬人。いや、ある意味『擬神』かな？  
僕は苦笑しながら街中を走る。

「森羅万象に願う。我が扱うは万物の根源。我が仇あだの全てを破壊せよ」  
「ッ!?! アイルズ!?!」

僕の前後左右上下にて空間が歪んだ。《ジ・オリジン》の発動予兆だ。

僕はすぐさま上の『歪み』だけを手刀で破壊し、近くの建物の屋根へと跳躍する。すると、その包囲網から抜け出した瞬間、空間が破裂した。大した音は鳴らなかったが、それは破裂した空間が小さいだけで、空間が破裂した時点で相当な破壊力を持っている。

屋根に足をつくると、目の前にいるアイルズに目を向ける。

アイルズは白黒の双剣ディザスターを装備し、赤い瞳からは紅い光が迸っている。アイルズの《精霊の奇跡》による器の強制昇華は、春姫さんの《ウチデノコツチ》とは違い、その効果は瞳に表れる。小さい強化から大きい強化にかけて、光は濃い紅あかになっていく。

今のアイルズは僕が知る限りの最高の強化をしている筈だ。

そして、アイルズが強化できる最高のレベルは――

「行くよ。お父様」

「良いよ、僕がいけない間成長した君の姿を僕に見せてくれ」

アイルズはその紅い眼光すらも置いていくほどの速さで僕に迫る。そして、確な防御をしていなかった僕の体に十字を刻みつける。

その速さはいぞレベル10へと迫る。

そう、アイルズの最高強化はレベル5つ分。レベル5のアイルズが最高強化をすれば、レベル10と同等になる。

本来、そこまでの強化をすれば、『器』と『精神』こころがバラバラになり、むしろ強化前よりも弱くなる。

しかし、忘れてはいけない。アイルズはもともとレベル10なのだ。今は『僕』という存在に引つ張られてレベル5になっているだけなのだ。つまり、『強化』というよりは『回帰』なのだ。レベル10のアビリティをアイルズが使いこなせない訳がない。

僕の負けは必至。レベル1つ分ならまだしも、レベル5つ分も差があるのだ。これで勝てる方がどうかしてるだろう。

……だから、どうした？

「ふふっ」

「? お父様、楽しそうだね?」

「うん、楽しいともさ。だって、君の成長をこの目で見られるんだ。親として、とても楽しいのさ」

「そうだ。勝つ? 負ける? そんな事はどうでも良い。」

「僕は父親だ。アイルズに勝つ必要はどこにもない。必要なのはアイルズの成長を見届ける事。僕がすべきなのは、アイルズの全てを引き出すことなのだ。」

「だから——」

「隙あります! お父様!」

僕の背後から、赤青の双剣アストライアが煌めく。

「重心が後ろに寄っていた僕には背後からの攻撃を避けることはできなかった。だから、僕はそれを甘んじて受け入れた。」

「うっ、よくお義母さんから離れられたね。アリアドネ」

「よく言いますよ。アルファイアさんに私だけを通すように言っただけであつたのはお父様でしろう？」

「私達が全力を出せるのは一緒にいる時だから、でしょ？」

「よく気づいたね。とは言つても分かりやすかつたか。アイズには悪いけど、娘達の成長は僕だけ見させてもらうよ」

最後の戦いが今この時をもって幕を開けた。

## 第四十四話

「さて、流石に武器がないとね」

ベルはそう呟き、右手を前に出す。かつての形を『幻想』し、その形を顕現させる。

「久しぶり、『神ヘステイア・ナイフの刃』。エルピス君の本体は『あっち』に行っちゃったけど、少しばかりで良  
いから僕に力を貸して」

ベルは目を閉じて、『ヘステイア・ナイフ』に額を付ける。『ヘステイア・ナイフ』に  
刻まれた『神聖文字ヒエログリフ』がまるでベルの言葉に呼応するかのように青く光る。  
今までの『出会い』が僕に貸してくれる。

『ヘステイア様』『アルテミス様』、そして『聖夜の精霊』

赤色の光、金色の光、青白色の光が『ヘステイア・ナイフ』の刀身に集まる。やがて光は『収束』し、『聖火の英斬』のように刀身が伸びる。

「行くよアリアドネ、アイルズ。君達の成長を僕に見せておくれ」

「ツ!!」

アリアドネとアイルズはベルの唯ならぬ威圧感に警戒態勢に入る。既にアリアドネはアイルズの《精霊の奇跡》によつて『器の強制昇華』されており、青色の瞳からは紅色の光が迸っている。

実質レベル10の二人に対し、未だレベル5のベル。本来なら勝負にもならないし、実際ベルの「ステイタス」は二人には遠く及ばない。今もそれである事には変わりはない。そうであるはずなのに、ベルの雰囲気は常軌を逸する程の威圧感を纏っていた。ベルほどでは無くても『英雄』の資格を持っている自分達でさえ、本物の『最後の英雄』を冠する『英雄王』のベルが持つ『想い』は二人の想像の遥か上をいつていた。

よくベルお父様が言っていた。

『良い？ アリアドネ、アイルズ。僕はね、『英雄』の素質なんて無かったんだよ。アイズ達みたいな強者の才覚なんてものは、僕は持っていなかったんだ』

『でも、皆さんはお父様の事を『英雄』とおっしゃられていますよ。人も、神も、世界がお父様を認めています』

『そうだね、確かに僕は『英雄』だ。でもね、昔の僕は『英雄』になりたかったけど、僕は『英雄』になるための素質は何も持っていなかったんだ』

『……仮にお父様の言う事を真実だとして、では、どうしてお父様は『英雄』になる事ができたのですか』

『一言で言うなら、そうだなあ、『出会い』かな？ 『ダンジョンに出会いを求めるのは間違いじゃなかった』から僕はここまで来れたんだよ』

『へっ』

『ふふっ、ちょっと難しかったかな？ 大丈夫、『ダンジョン』に限定しなくても『出会い』というのはどこにでもある。二人もいつかは分かるよ』

二人はそれを今同時に思い出した。

『出会い』



それは、お父様を英雄たらしめたもの。

その体現者が、今、私たちの目の前にいる。

私たちは今、その人と戦おうとしているのだ。

私たちの『想い』を示すために。

「行こう、アイルズ」

「うん、お姉ちゃん」

アリアドネは『アストラライア』を、アイルズは『デイザスター』をあらためて構える。そして、二人は走り出す。

ベルに赤色の剣と黒色の剣が迫る。その速さはまさに光と同等。限界まで昇華されたその攻撃は動体視力には捉えきれない。

しかし、ベルにはそんな事はどうでも良かった。

事前にベルは二人が走り出した瞬間に、『ヘステイア・ナイフ』を横に一閃した。すると、二人の剣は弾かれ、ベルに攻撃が当たることはなかった。

「(攻撃が誘導された!? わざとアイルズとタイミングをずらして攻撃したのに、つい

お父様の隙に飛びついてしまった！」

「（だからこそ、私たちの得物を一撃で弾ける位置に誘導された上に、攻撃の手を緩めさせて弾きやすくした！）」

いつかのアイズが『女神の戦車』『炎金の四戦士』に仕掛けた『技』。それをベルがやってのけた。ベルがアイズを『想い』続けたからこそ、可能にしたかつての『劍姫』の技。さらに、

「『ファイアボルト』」

十数にも及ぶ炎雷の塊が二人を襲う。ベル・クラネルの『原初の奇跡』。これはフレイヤの持つ『魔導書』から得られた『魔法』。

これもまた、本当に偶然だった女神との『出会い』が、その『本質』に執着した恋が、彼に『武器』を授けた。

今回使った「ファイアボルト」は本物とは違い、『聖火』を用いた、いわゆる『疑似魔法』である。

かつてのオリンピアでの一件によって、『聖火』の権能の一部を扱えるようになった。

とは言っても、ヘスティアの『本物』には遠く及ばない。そもそも、今は『聖火の眷属』ではなく、『道化の眷属』だし。

ん？ 『道化』？

ベルは何かを思いついたかのように、ニヤリと笑う。

折角だ。此度は『道化』<sup>アルゴワット</sup>らしく行こう。

「アリア、フィーナ、ユーリ、ガルス、リユールウ、オルナ、エルミナ。かつての間達よ、今宵は楽しい『宴』だ！ 君達も楽しく笑っていることだろう！ だが、まだこの馬鹿騒ぎは終わらない！」

ベルの後ろに七つの光の球体が生まれ、その七つの球体は三人を取り巻くように離れた位置で円環状に並ぶ。すると、光は立ち昇り、その内側をが外側から隔離する。

「では始めよう！ 我が娘達よ、思う存分に来るがいい！ 私は、いや『私達』はその全てを受け止めよう！」

ベルは大きく息を吸い、高らかに、天まで届くくらいの声で宣言する。

「さあ、『喜劇』を始めよう！」

## 第四十五話

——アイズ達 side ——

風の剣と炎の剣がぶつかり合う。剣同士がぶつかる度に天地を揺るがす程の衝撃を  
発し、エルピスが形成した世界『月と聖火の箱庭』プロミス・ザ・ムーンを壊していく。

燃え続ける炎に囲まれた湖。湖に映らない月がただ悠々と空に浮かぶ。その衝撃で  
湖が割れ、炎が消え、月が抉れる。

しかし、壊れた側から修復されていくため、誰も『月と聖火の箱庭』プロミス・ザ・ムーンの安全性を疑つ  
てないし、攻撃の手も緩めない。

「ウイン・フィンブルヴェトル」

「アルクス・レイ」

「ルミノス・ウインド」

「——『テンベスト聖なる風よ』——『クラネル白く輝け』」

ひとり世界を凍らせる氷雪が、必中の砲弾が、圧縮された風弾の嵐が、白く輝く風の斬撃が  
一柱の亜神へと向かう。

しかし、亜神は余裕綽々にそれらを見つめ、ただ右手を出して詠唱ウタする。

「——【月鏡】」

世界が反転する

上が下に、右が左に、前が後ろに、そして『現実』は『虚構』に。

【魔法】が炸裂する。しかし、何一つとして『現実』に作用する事はなかった。

4人が驚くのも束の間、エルピスが解説する。

「ふふつ、驚いてるね。これは私が持つ『魔法』の一つ。その実態は『権能』に近いものがあるけど、所詮神アルカナムの力の残滓のあり合わせでは『権能』には届かなくてね。それでも勿論、『権能』に近いだけあって、並大抵の『魔法』では叶わないよ。それ故に、この

世界でしか発動できないというデメリットはあるけどね」

「さて、話を戻そうか。この【月鏡】は、この世界に存在する『現象』を反転させる効果を持つ。ほら、見てごらん？ 空に浮かぶ月が消え湖の水にただ映るだけになり、周囲で燃えていた炎は全て熱を発さず空間を揺らすだけになった。それ即ち、『現実』の『現象』が反転し、『虚構』の『現象』が現れた」

「……つまり、『現実』の『現象』である『魔法』は全て『虚構』になったから、『現実』の存在である私達には何の効果も及ぼさないという事？」

エルピスの説明にアイズがざっと纏める。

その言葉にエルピスは大正解と言わんばかりの拍手を送る。

「流石アイズ、その通りさ。この【月鏡】の前では、物理法則を無視する君の風を無意味になる。我ながら良い『魔法』だろう？」

「……そうね。まさか、こんな大それた『魔法』があるなんて思いもしなかった」

アイズはまるでびっくりしたかのように言うが、エルピスの目にはソレが映っていた。

「ふふつ、アイズ。私だって一応神なんだよ？ 私の目は『嘘』が見える。君は全く驚いていない。流星は世界は渡った者、たかだか『反転世界』じゃ驚きもしないか。それとも、まだ私が、いやベルすら知らないナニカでもあるのかな？」

「……無いよ。少なくとも、もう私が持つてる全てはベルが知ってる。ベルが知ってるって事は、勿論貴方も知っている」

「ふむ、嘘は言つてない。しかし、違和感が拭えないね。君が、そんな低レベルな筈がない」

エルピスはそう言うが、アイズからすれば亜神視点から言われてもという感じである。

アイズは一応エルピスに勝つ方法として一つ思いついているが、その方法を使おうとすると確実に成功する前に妨害されて失敗する未来しか見えないため、今は使う事ができない。

アイズは自分の風を通して、3人に作戦を伝える。

『了解』



言葉に出さず、4人はアイコンタクトで意思疎通をする。

「作戦会議は終わりかな？　じゃあ、第二ラウンド開始だ、ね！」

エルピスはレフィーヤの元へ高速移動し、蹴りを放つ。

「まずは一人目かな！」

「やつと感覚が戻りました。もう油断はしません。【盾となれ、破邪の聖杯】——【ディ  
オ・グレイル】！」

対してレフィーヤは友の魔法を唱え障壁を展開し、さらに短杖ワンドと短剣を交差状に構え、エルピスの蹴りを受ける。その蹴りの威力は例え上級冒険者であってもその一撃だけで戦闘不能に陥らせるものであった。

障壁こそ破れたが、予めしていた武器の防御で衝撃の大半を殺したことによりレフィーヤ本人にそこまでダメージは与えなかった。

その前衛的防御にエルピスは驚愕する。

「……驚いたね。さつきまでの君なら、確実に捉えられなかったと思うんだけど」

「確かに今の私の『ステイタス』は他の3人に比べて格下も格下です。いくら前世でベル10まで達したとは言ってもです。兄さんもお姉様も私も例外なく転生という形で世界を渡っている以上、『ステイタス』のリセットは不可避ですからね」

レフィーヤは膝にかかった埃を両手で払う。短杖ワンドをエルピスに迎えて構え、紡ぐ。

「[??]——【アルクス・レイ】」

「おっと、驚いた。君の【二重追奏ダブル・カノン】は警戒していたんだけどね。まさかそんな規格外な方法で詠唱を簡略化するとは。ああ、その恐ろしい『魔力』の精密さで分かったよ、私の蹴りを耐えられた理由も。素晴らしいよレフィーヤ、君は間違いなくベルとアイズの義妹だ。その馬鹿馬鹿しさが2人に似ている」

「それはそうです。2人の横に立つために、常識という常識を全て壊して来ましたから」

「……レフィーヤ」

エルピスはレフィーヤに惜しめない賞賛を贈り、アイズはレフィーヤが自分達と同じ

『領域』にいと確かに感じた。

「[レア・ラーヴァテイン]！」

「おっとと」と

「私達を無視してもらつては困るな。そうだろう、[疾風]？」

「ええ、そうですね。そろそろ『彼』も動き出したようですし、私も好き勝手やるとしまししょう！ さあさあ今宵始まるは英雄達の宴！ ならば、『古代三大詩人』の1人であり、古き彼の友として面目躍如と行きましよう！」